

町 内 遺 跡 XII

—平成 23 年度 埋蔵文化財緊急発掘調査報告書—

2013

群馬県吾妻郡長野原町教育委員会

例 言

1. 本書は平成23年度に長野原町が各種開発事業に対応して実施した、町内遺跡緊急発掘調査の報告書である。
2. 本書は平成24年度国宝重要文化財整備事業補助金で作成した。
3. 本書に掲載した3地点は平成23年度国宝重要文化財整備事業補助金で実施した。
4. 調査は長野原町教育委員会直営で実施した。

調査主体 長野原町教育委員会

調査組織 教 育 長 黒岩文夫

教 育 課 長 市村 敏

社会教育 GL 白石光男

// 副 GL 富田孝彦（調査担当）

調 査 参 加 者 柿本六美・坂井春栄・佐藤久美子・向出治恵

5. 各遺跡の所在地は本文中に記した。
6. 本書中の遺跡名は調査が数次にわたっている場合はそれぞれを識別するために遺跡名の最後にローマ数字を表記してある。同一遺跡内の別地点と解釈していただきたい。

例) 坪井遺跡 VIII

(遺跡名) (第8次)

7. 本書作成にあたっての作業分担は以下の通りである。

編集・執筆：富田 遺構・遺物写真撮影：富田 遺物実測・トレース：富田・向出・柿本
図版および写真図版作成：富田・向出

8. 調査において以下の項目を委託した。

表土掘削・埋め戻し：東光建設株式会社

測 量：(株) 測 研

石器実測：技研測量設計株式会社

自然科学分析：(株) パレオ・ラボ

9. 本書における石器の石質は飯島静男氏（群馬地質研究会）、石器の器種は井上慎也氏（安中市教育委員会）弥生土器に関しては石川日出志氏（明治大学）・大木紳一郎氏（公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団）に御教示いただいた。
10. 本発掘調査における出土遺物ならびに図面・写真は長野原町教育委員会で保管している。
11. 発掘調査、整理調査及び報告書作成にあたり、次の方々・団体から御指導・御協力を賜った（五十音別敬称略）。

相京建史・麻生敏隆・飯田陽一・飯森康広・石川日出志・石田真・伊藤敏英・井上慎也・
大川明子・大木紳一郎・小川卓也・小野和之・川田強・黒澤照弘・佐々木由香・佐藤雅一・
篠原正洋・鈴木徳雄・高林真人・高橋政充・田中浩江・堤 隆・中沢悟・藤巻幸男・松田哲・
松本太郎・向出博之・村上章義・山口逸弘・吉田智哉
群馬トヨペット株式会社・群馬県教育委員会・株式会社歴史の杜・公益財団法人群馬県埋蔵
文化財調査事業団・ソフトバンクモバイル株式会社

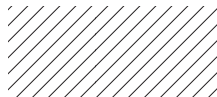
凡 例

1. 本書で使用した地図は1：2500「長野原町都市計画図」（長野原町1994）、1：25000「長野原」・「大前」である。
2. 挿図の方位は磁北を示す。
3. 挿図中の土層図のレベルは各遺跡とも、現地表面レベルを基に任意で設定している。
4. 挿図中の縮尺については下記の通りであり、各挿図中に示してある。
遺 構：竪穴式住居跡・・・1/60 土坑・炉跡・・・1/30 陥し穴・・・1/40
遺 物：復元土器・礫石器（台石）・・・・・・1/4 土器片・打製石斧類・礫石器・・・1/3
鉄滓・剥片石器類（石鏃以外）・・・・1/2 剥片石器類（石鏃）・銅銭・・・・1/1
5. 遺構の略号については以下の通りである。
S I：竪穴式住居跡 S K：土坑
6. 挿図に図示した遺物は、観察表にその内容を記してある。観察表における復元土器の法量は左から器高、中央が口径、右側が底径を表し、計測数値は推定値を含む。（ ）内の数値は現存値、＜ ＞内の数値は復元値を表す。
7. 土器の色調に関しては、「新版標準土色帖1995年後期版」（編・著小山正忠・竹原秀雄、監修農林水産省農林水産技術会議事務局、色票監修財団法人日本色彩研究所）の色名を参考にした。観察表には外面／内面の順で記した。
8. 挿図中のスクリントーン・記号は以下の通りである。

遺構・土層図



焼 土



地



泥 流



掘り込み



土器



石器



炭化材

遺物



赤 彩



磨 面・摩 耗

※土器における欠損部に関しては点描で表現している。

断面の塗りつぶしは須恵器を示している。

目 次

例言

凡例

各遺跡の位置図	1
第1章 平成23年度長野原町内遺跡の概要	2
第2章 発掘調査	3
1. 坪井遺跡Ⅷ	3
I 調査に至る経緯	3
II 遺跡の立地と既往の調査	4
III 基本土層	6
IV 検出された遺構と遺物	10
V 自然科学分析	34
VI まとめ	44
第3章 試掘および立会調査	45
a. 小滝Ⅱ遺跡	45
b. 上原Ⅰ遺跡Ⅲ	51

出土遺物観察表

写真図版

報告書抄録

挿 図 目 次

第 1 図	各遺跡の位置図 (1/100,000)	1	第 20 図	SK12 出土遺物実測図 2	25
第 2 図	調査地点位置図 (1/5,000)	3	第 21 図	SK12 出土遺物実測図 3	26
第 3 図	確認調査のトレンチ配置図 (1/400)・土層図 (1/20)	4	第 22 図	SK15 ～ 19 実測図	28
第 4 図	坪井遺跡調査地点位置図 (1/2,500)	7	第 23 図	SK17 ～ 19 出土遺物実測図	29
第 5 図	基本土層図 (1/20)	8	第 24 図	SK07 実測図 (1/40)	30
第 6 図	坪井遺跡Ⅶ全体図 (1/200)	9	第 25 図	SK13 実測図 (1/40)	31
第 7 図	SI01 実測図 (1/60・1/30)	11	第 26 図	SK14 実測図 (1/40)	32
第 8 図	SI01 遺物出土状況図 (1/60)	12	第 27 図	遺構外出土遺物実測図 1	33
第 9 図	SI01 出土遺物実測図	13	第 28 図	遺構外出土遺物実測図 2	35
第 10 図	SK01 ～ 04 実測図 (1/30)	15	第 29 図	坪井遺跡 (8 次) 出土炭化材の走査型電子顕微鏡	38
第 11 図	SK05・06・08 ～ 11 実測図 (1/30)	17	第 30 図	暦年較正結果	41
第 12 図	SK01 ～ 05・11 出土遺物実測図	19	第 31 図	坪井遺跡出土の種実圧痕	43
第 13 図	SK12 実測図 (1/30)	21	第 32 図	調査地点位置図 (1/5,000)	45
第 14 図	SK12 遺物出土状況図 1 <全体> (1/30)	21	第 33 図	トレンチ配置図 (1/400)	46
第 15 図	SK12 遺物出土状況図 2 <壺形土器> (1/30)	22	第 34 図	小滝Ⅱ遺跡全体図 (1/160)	47
第 16 図	SK12 遺物出土状況図 3 <甕形土器>	22	第 35 図	各トレンチ土層図 (1/40)	48
第 17 図	SK12 遺物出土状況図 4 <筒形・浅鉢形土器> (1/30)	23	第 36 図	KT4 号畑出土遺物実測図	48
第 18 図	SK12 遺物出土状況図 5 <石器> (1/30)	23	第 37 図	調査地点位置図 (1/5,000)	51
第 19 図	SI12 出土遺物実測図 1	24	第 38 図	土層図 (1/20)	51

表 目 次

第 1 表	平成 23 年度埋蔵文化財調査一覧	2	第 7 表	放射性炭素年代測定および暦年較正の結果	38
第 2 表	坪井遺跡調査一覧	6	第 8 表	坪井遺跡出土土器圧痕の同定結果	42
第 3 表	SI01 ピット計測表	10	第 9 表	小滝Ⅱ遺跡 畑計測値等一覧	46
第 4 表	坪井遺跡 (8 次) 出土炭化材の樹種同定結果	34	第 10 表	小滝Ⅱ遺跡から出土した植物圧痕	49
第 5 表	坪井遺跡 (8 次) 出土炭化材の樹種同定結果一覧	35	第 11 表	坪井遺跡Ⅶ出土遺物観察表	52
第 6 表	測定試料および処理	37	第 12 表	小滝Ⅱ遺跡出土遺物観察表	55

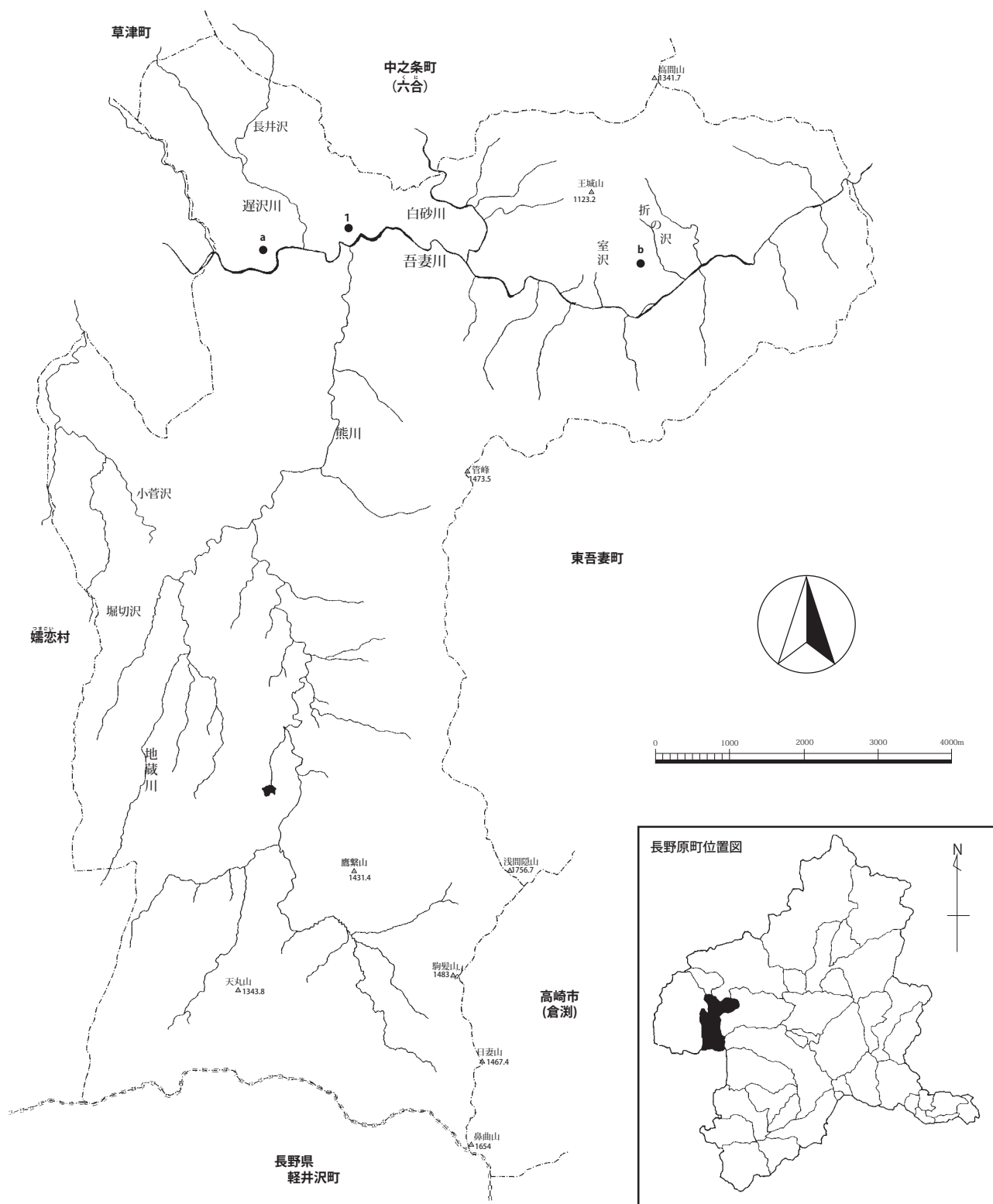
図 版 目 次【坪井遺跡Ⅶ】

P L 1	1. 1 区全景 (南東から)		4. SK06 半截 (南から)
	2. 2 区近景 (東から)		5. SK08 (南から)
P L 2	1. 2 区西側近景 (南から)		6. SK08 半截 (南から)
	2. 3 区全景 (東から)		7. SK09 (南から)
P L 3	1. SI01 (南から)		8. SK09 半截 (南から)
	2. SI01 遺物出土状況 (南西から)	P L 6	1. SK10 (東から)
	3. SI01 炉跡 (南から)		2. SK10 半截 (東から)
	4. SI01 炉跡半截 (南から)		3. SK11 (東から)
	5. SI01 炉跡検出状況 (南から)		4. SK11 半截 (東から)
P L 4	1. SK01 (南から)		5. SK12 (南から)
	2. SK01 半截 (南から)	6. SK12 半截 (南から)	
	3. SK02 (南から)	7. SK12 遺物出土状況 1 (南から)	
	4. SK02 半截 (南から)	8. SK12 遺物出土状況 2 (南から)	
	5. SK03 (南から)	P L 7	1. SK12 遺物出土状況 3 (南東から)
	6. SK03 半截 (南から)		2. SK12 遺物出土状況 4 (南から)
	7. SK04 (東から)		3. SK12 遺物出土状況 5 (南から)
	8. SK04 半截 (東から)		4. SK15 (南から)
P L 5	1. SK05 (南から)	5. SK15 半截 (西から)	
	2. SK05 半截 (南から)	6. SK16 (東から)	
	3. SK06 (南から)	7. SK16 半截 (東から)	

8. SK17 (西から)
- P L 8 1. SK17 半截 (西から)
2. SK18 (南から)
3. SK18 半截 (南から)
4. SK19 (東から)
5. SK19 半截 (東から)
6. SK07 (東から)
7. SK07 南北セクション (西から)
8. SK07 東西セクション (北から)
- P L 9 1. SK13 (北東から)
2. SK13 セクション (東から)
3. SK14 (東から)
4. SK13・14 (南から)
5. SK14 南北セクション (東から)
6. SK14 東西セクション (南から)
7. 調査風景 (東から)
8. 測量風景 (南から)
- P L 10 SI01 出土遺物①
- P L 11 SI01 出土遺物②・SK01・02・03・05・11 出土遺物
- P L 12 SK04 出土遺物・SK12 出土遺物①
- P L 13 SK12 出土遺物②
- P L 14 SK12 出土遺物③・SK17・18・19・遺構外出土遺物①
- P L 15 遺構外出土遺物②
- P L 16 遺構外出土遺物③

【小滝Ⅱ遺跡】

- P L 17 1. 1 トレンチ全景 (北から)
2. 土層堆積状況 (西から)
3. 畝サク検出状況 (東から)
4. 畝サク断面 (西から)
- P L 18 1. 植物遺存体検出状況 (北から)
2. 埋め戻し状況 (南から)
3. 2 トレンチ全景 (西から)
4. 土層堆積状況 (西から)
5. 畝サク断面 (西から)
- P L 19 1. 埋め戻し状況 (西から)
2. 2 トレ北東側石造物 (南から)
3. 3 トレンチ全景 (南から)
4. 土層堆積状況 (西から)
5. 畝サク断面 (西から)
- P L 20 1. 植物遺存体検出状況 (南から)
2. 遺物出土状況 (東から)
3. 4 トレンチ全景 (西から)
4. 土層堆積状況 (南から)
5. KT4 号畑出土遺物 (肥前碗)
- P L 21 小滝Ⅱ遺跡から出土した植物圧痕
- 【上原Ⅰ遺跡Ⅲ】
- P L 22 1. 上原Ⅰ遺跡Ⅲ全景 (南東から)
2. 土層堆積状況 (南から)
3. ローム面検出状況 (南から)
4. 埋め戻し状況 (南東から)



第1図 各遺跡の位置図 (1/100,000)

第1章 平成23年度長野原町内遺跡の概要

浅間山の北東麓に位置する長野原町では、平成24年6月現在で220の包蔵地（指定文化財を含む）が把握されている。この地域内において開発行為が計画された場合、事業主体者と町教育委員会文化財係との間で埋蔵文化財に関する取り扱いの協議を行い、試掘確認調査（包蔵地外は立会調査）を基本的実施している。それによって明確な遺構・遺物が検出された場合、工事計画変更の協力をお願いをして現状で保存するか、やむを得ない場合は遺跡の破壊を前提とした記録保存（発掘調査）を行っている。

平成23年度の長野原町における埋蔵文化財調査は8件であった（第1表）。その内訳は本調査が4遺跡、包蔵地内の試掘確認調査3遺跡、包蔵地外の試掘および立会調査3地点である。これらには水源地域対策特別措置法（以下、水特法）の対象事業1件（第1表6）が含まれている。基本的に水特法事業は国庫補助対象外で、それによる調査報告は別稿で実施する予定である。本書では本調査を実施した1遺跡の本報告とそれ以外の2件の概要を報告する。

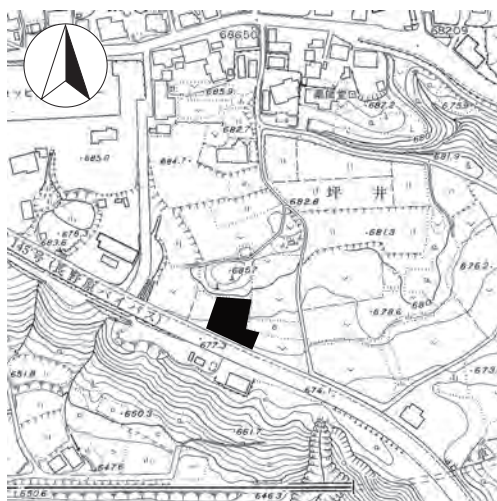
第1表 平成23年度埋蔵文化財調査一覧

No	本書No	遺跡名	所在地	原因類	調査面積	調査期間	備考
1	—	上原Ⅱ遺跡Ⅱ	林字上原 1249-1外7筆	土地改良事業 本調査	3,026㎡	H23年5月20日～ 10月6日	縄文中期初頭竪穴状遺構3・ 焼土遺構5・土坑21・不明 遺構1・包含層1、平安時代 陥し穴3、時期不明土坑 53・ピット9 発掘届 (94-1) 水特法
2	—	上原Ⅲ遺跡Ⅱ	林字上原 1273外15筆	土地改良事業 本調査	8,955㎡	H23年5月20日～ 10月6日	縄文前期末～後期前葉土坑 2、弥生時代中期前半土坑 2、平安時代鍛冶工房1・竪 穴住居11・焼土遺構6・陥 し穴29・土坑11、中世竪穴 状遺構1、近世以降墓1・ 自然流路5、時期不明土坑 126・ピット131 発掘届（94-1） 水特法
3	a	小滝遺跡	羽根尾字小滝 378-7	工場建て替え 試掘調査	70㎡	H23年6月6・7日 8月2・3日	天明畑4 包蔵地の把握（95）
4	1	坪井遺跡Ⅷ	大津字馬込 72-3	店舗兼用住宅 本調査	555㎡	H23年7月28日～8 月12日、10月13・ 14日	縄文早期前半土坑2・後期前 葉土坑3、弥生中期前半竪 穴式住居1・土坑5、平安時 代陥し穴3・掘立柱建物跡 1、時期不明土坑5 発掘届（93-1）
5	b	上原Ⅰ遺跡Ⅲ	林字上原 1036-1	携帯電話基地局 試掘調査	9㎡	H23年8月30日	遺構なし 発掘届（93-1）
6	—	尾坂遺跡	長野原字橋場 1295-2外	駅前広場整備事 業 試掘調査	30㎡	H23年10月11・12日	旧貨物施設（旧駅舎か）・天 明泥流 包蔵地の把握（95） 水特法

7	—	林字宮原	林字宮原 498-1	町道林線拡幅 試掘調査	11㎡	H23年10月21日	遺構なし	水特法
8	—	中棚Ⅰ遺跡Ⅱ	林字中棚 341-1外8筆	土地改良事業 本調査	1,662 ㎡	H23年10月31日～ 12月22日	縄文土坑2、平安住居4、時 期不明土坑17・ピット57 発掘届（94-1）	水特法

第2章 発掘調査

1. 坪井遺跡Ⅷ



所在地 長野原町大字大津字馬込72-3
 開発事業名 店舗兼用住宅
 調査期間 平成23年7月28日（確認調査）
 7月29日～8月12日（本調査）
 10月13・14日（補足調査）
 開発総面積 660㎡
 調査面積 555㎡

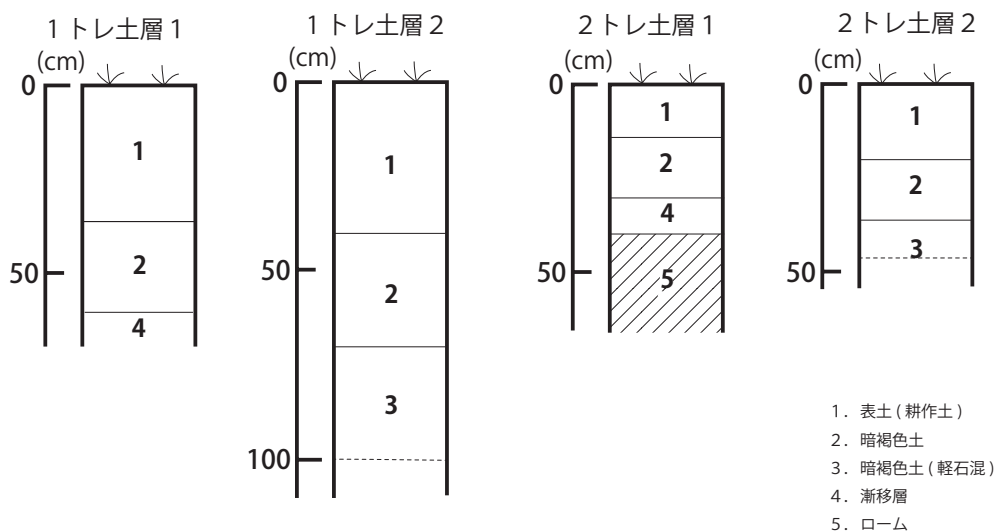
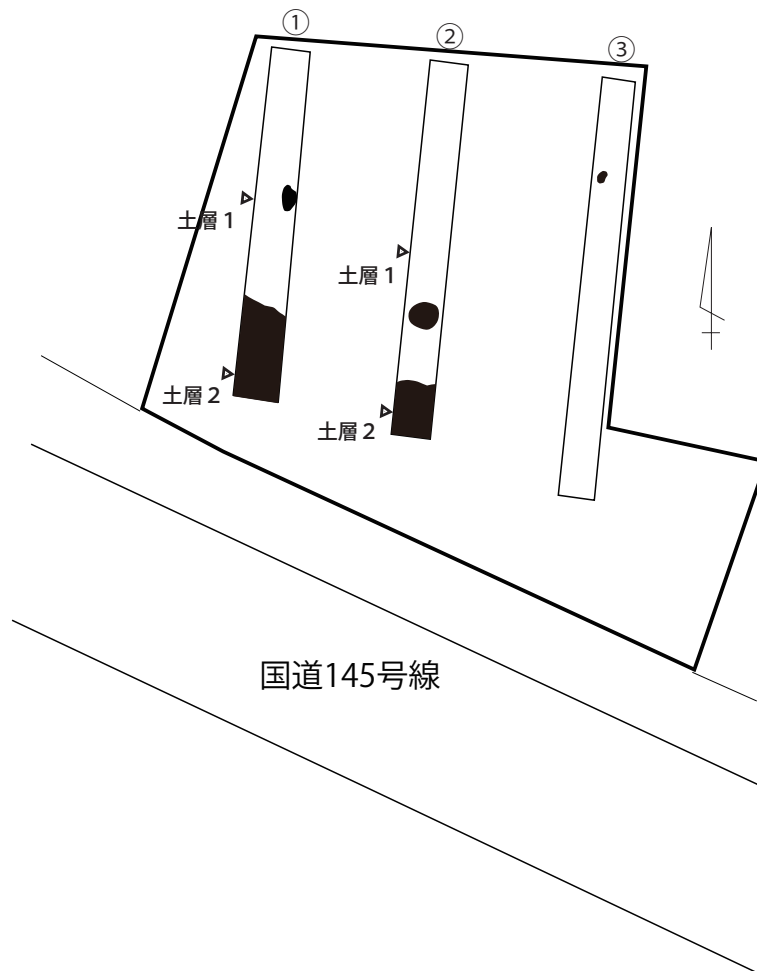
第2図 調査地点位置図（1/5,000）

I 調査に至る経緯

平成23年6月下旬に施主より個人専用住宅建設の計画が示され、埋蔵文化財の取り扱いについて、長野原町教育委員会教育課社会教育グループに照会があった。対象地は周知の包蔵地「坪井遺跡（No.86）」の範囲内であることから開発事業主と協議し、確認調査が必要である旨を説明し、遺構が検出されれば発掘調査を実施することで合意を得た。同年7月5日付けで施主より長野原町教育委員会教育長へ「開発に伴う文化財調査願書」が提出され、同年7月28日に教育委員会文化財担当が立会いのもと確認調査を実施した（第3図）。

店舗兼住宅予定箇所にトレンチを3本設定して、土層の堆積状況と遺構の有無を確認した。その結果、各トレンチで遺物が出土し、1トレでは縄文時代早期前半、2トレでは弥生時代中期前半の土坑が数基検出された。全体的に北側は削平を被っており、地山の関東ローム層はトレンチ北側で表土下15cm、トレンチ中央で表土下30～40cm、トレンチ南側では谷になっており表土下150cmで確認された。対象地は台地の縁辺に立地していることが改めて確認された。以上の調査所見から工事計画と照会してみると、対象地全体をほぼ国道面まで下げた場合は南側の谷部分以外はすべて削平されることから、対象地全体の表土を剥いで、面的な記録保存（発掘調査）する必要があると判断された。

この結果を受けて文化財保護法第93条第1項の規定により、同年7月28日付け長教社第97



第3図 確認調査のトレンチ配置図 (1/400)・土層図 (1/20)

号で長野原町教育委員会を經由して群馬県教育委員会教育長へ「埋蔵文化財発掘の届出」が提出され、記録保存を前提とした発掘調査を実施するに至った。また同年 10 月 13・14 日には対象地と歩道部分の境界の補足調査を実施した。

Ⅱ 遺跡の立地と既往の調査

坪井遺跡が存在する長野原町は群馬県の北西部、吾妻郡の南西隅に位置し、「鶴舞う形の群馬県」と上毛かるたに詠まれている鶴の尾部下端に位置する。北部は高間山（標高1,341m）・本白根山（標高2,171m）の両山系から成り吾妻川流域沿いに東西に延びている。南部は浅間山（標高2,568m）の裾野に広がる浅間高原地帯を経て長野県に接している。本遺跡は長野原町の北東部、吾妻川流域地帯に属し、吾妻川左岸の段丘上に位置する。標高は約678mである。この段丘は吾妻川から下位・中位・上位・最上位の4段からなる河岸段丘の上位段丘に相当し、吾妻川からの比高差は約70mを測る。この段丘は約21,000年前に浅間山（標高2,568m）から噴出した応桑泥流堆積物を削って形成されている。その上を覆っている関東ローム層中には約11,000年前に噴出したと考えられる浅間草津黄色軽石層（As-YPk）が1.2m以上堆積している。遺跡の対岸には山頂から北西へ緩やかな稜線が伸びる菅峰（標高1,474）、その東側には独特な景観をもち太古から当該地域のランドマークとしての要素を備えもつ“岩峰丸岩”（標高1,124m）が聳えている。

本遺跡は過去に7次にわたる調査が実施されており、今回の調査は第8次調査にあたる（第4図・第2表）。

第1次調査は平成3年度に国道145号線（長野原バイパス）道路改良工事に先行して実施された（文献1）。縄文時代中期後半の陥穴1基、時期不明の土坑が数基検出されており、遺構外出土遺物では弥生時代中期前半の土器片が確認されている。

第2次調査は平成10年度に（仮称）長野原ショッピングセンター建設工事に先立って実施された（文献2）。縄文時代前期初頭（花積下層式）の竪穴式住居跡1軒・土坑6基、中期後半の弧状列石1基・立石1基・竪穴式（敷石）住居跡19軒・土坑（屋外埋設遺構と石組遺構含む）48基、後期前葉（堀之内2式）の土坑1基、弥生時代中期の土坑1基、平安時代の竪穴式住居跡1軒・掘立柱建物跡1棟、中世の配石遺構1基・集石遺構2基、その他時期不明の遺構などが検出されている。この調査での成果として、①本遺跡が縄文時代～中近世に至る複合遺跡であることが判明した、②縄文時代前期初頭の花積下層Ⅰ式（関東地方）と塚田式（長野県）が同一土坑内で共伴した、③列石・立石を有する縄文時代中期後半の拠点集落であることが判明し、出土土器の系統も北関東系・越後系・信州系などが混在していた、の3点が挙げられよう。

第3次・第4次調査は平成12年度に実施された（文献3）。第3次調査は（仮称）小林マンション建設工事に先立って実施され、現在は暗渠となっている旧河川跡の検出に留まった。第4次調査はショッピングセンター駐車場内の浄化槽埋置工事に先立って実施され、縄文時代中期後半の竪穴式住居跡1軒・土坑2基が検出された。

第5次調査は平成13年度にショッピングセンター駐車場造成に先立って実施された（文献4）。縄文時代中期後半の竪穴式住居跡6軒・土坑6基が検出された。この調査は第4次調査とともに、第2次調査で同時期の拠点集落であることが判明した本遺跡の広がりを把握する上で重要な調査であった。

第6次・第7次調査はともに平成14年度に実施された（文献5）。第6次調査はコンビニエンスストア建設、第7次調査は事務所兼作業場建設に先立って実施され、いずれも遺構・遺物を検出するには至らなかった。

第2表 坪井遺跡既往調査一覧（数字は第8図と対応）

番号	調査年度	調査機関	原 因 類	調査面積 (開発面積)	概 要	備 考
1	平成3年度	長野原町教育委員会	国道145号(長野原ハートパス)道路改良事業 本調査	1,300㎡ (6000㎡)	縄文中期末：土坑1、時期不明：土坑14・不明遺構2	文献1・6
2	平成10年度	〃	(仮称)長野原ショッピングセンター 本調査	5,824㎡ (12,581.5㎡)	縄文前期初頭：住居1・土坑6、中期後半：弧状列石1・住居19・土坑48、後期前葉：土坑1、弥生中期：土坑1、平安：住居1・掘立柱建物1、中世：配石遺構1・集石遺構1、時期不明：溝状遺構1・道路状遺構1・不明遺構2・土坑1	文献2・7～9
3	平成12年度	〃	マンション 確認調査	187㎡ (1,448㎡)	遺構なし	文献3・9
4	〃	〃	浄化槽埋設 本調査	400㎡ (400㎡)	縄文中期後半：住居1・土坑2	文献3・9
5	平成13年度	〃	駐車場造成 本調査	233㎡ (233㎡)	縄文中期後半：住居6・土坑6	文献4・10
6	平成14年度	〃	コンビニエンスストア 確認調査	166㎡ (166㎡)	遺構なし	文献5・11
7	〃	〃	事務所併用作業場 確認調査	36㎡ (36㎡)	遺構なし	文献5・11
8	平成23年度	〃	店舗兼用住宅 本調査	550㎡ (660㎡)	本報告	文献12

Ⅲ 基本土層

本調査区の基本土層は第6図A地点で確認した。発掘調査の所見と併せると以下の通りとなる。

第Ⅰ層 暗灰褐色土

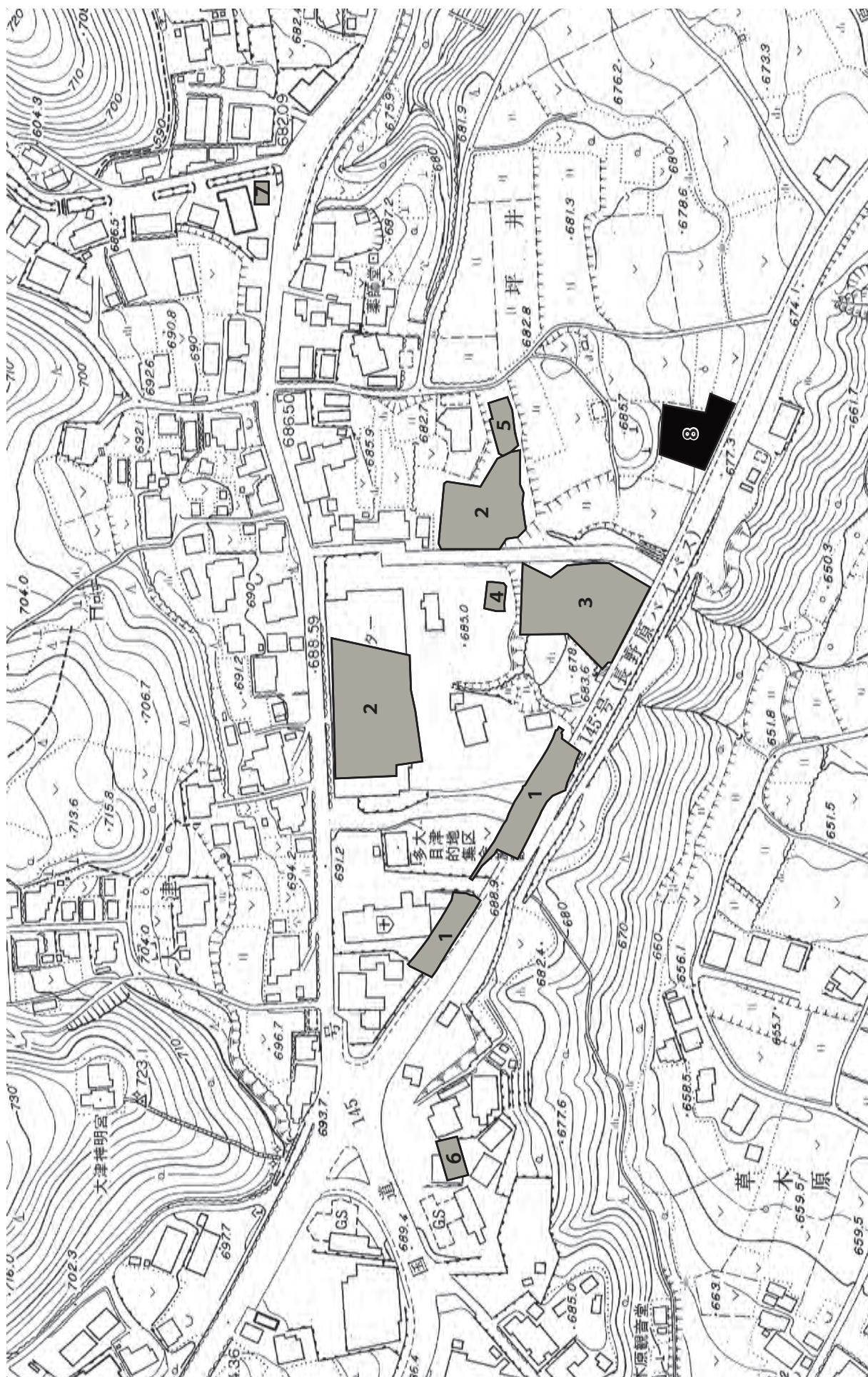
いわゆる表土で上位は畑の耕作土である。締まりは上位が弱く、下位はやや強い。

第Ⅱ層 暗褐色土

φ1～5mm大の白色・褐色軽石、φ5～10mm大の黄色軽石（As-YPk）を少量含む。

第Ⅲ層 暗褐色土

φ1～5mm大の白色・褐色軽石、φ5～10mm大の黄色軽石（As-YPk）を少量含む。縄文時代早期～平安時代の遺構はこの層中を掘り込んで構築されている。



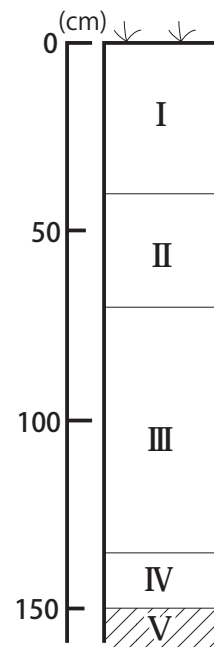
第4図 坪井遺跡調査地点位置図 (1/2,500)

第Ⅳ層 暗褐色土

いわゆる漸移層である。黄色ロームをブロック状に含み、 $\phi 1\sim 5\text{mm}$ 大の白色・褐色軽石、 $\phi 5\sim 10\text{mm}$ 大の黄色軽石（As-YPk）を含む。

第Ⅴ層 黄褐色ローム

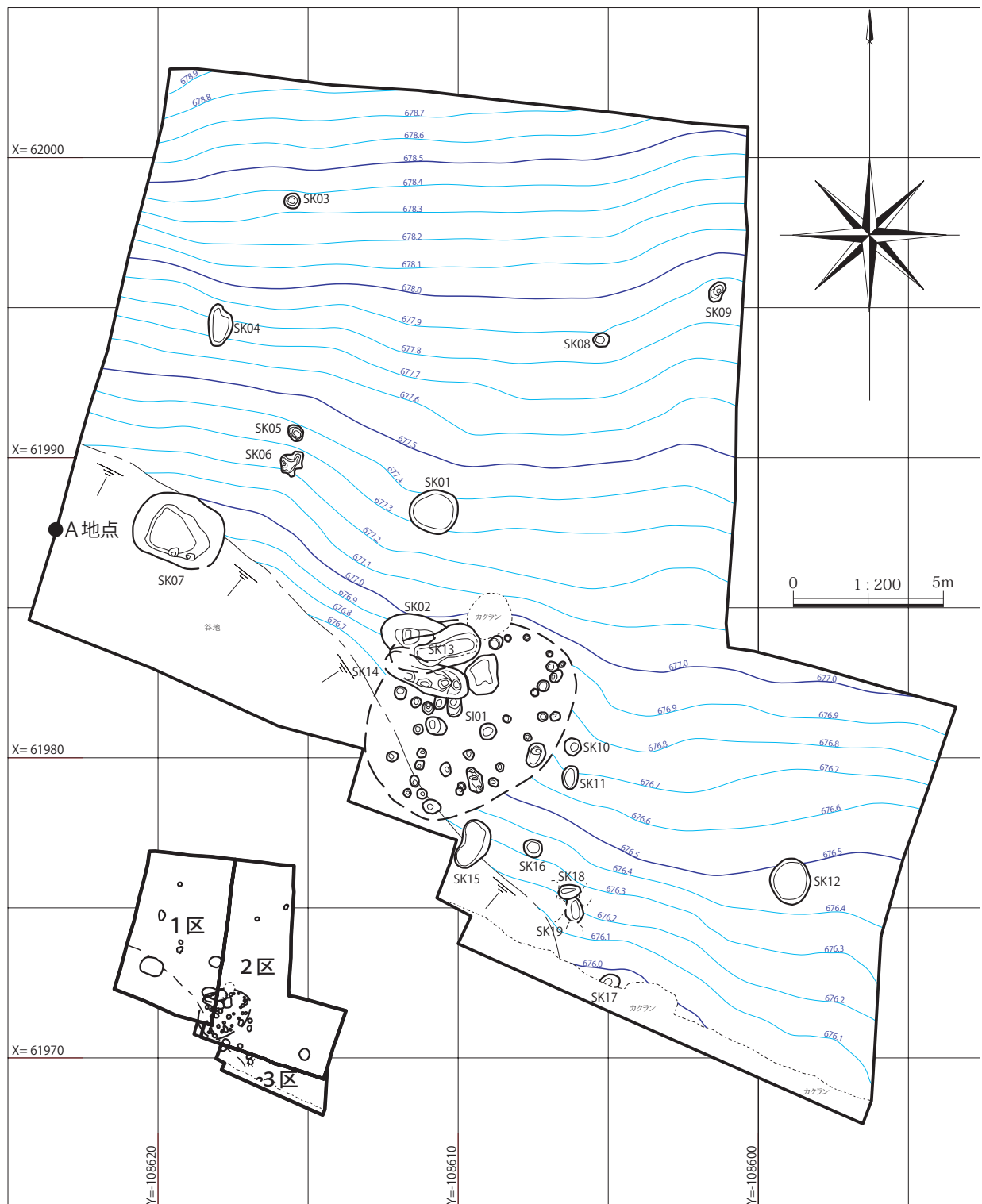
いわゆる関東ローム層である。 $\phi 5\sim 20\text{mm}$ 大の礫、 $\phi 5\sim 20\text{mm}$ 大の黄色軽石（As-YPk）を多量に含む。



参考文献（第2表の文献No.に対応）

1. 長野原町教育委員会 1992 『長畝Ⅱ遺跡 坪井遺跡』 長野原町埋蔵文化財調査報告第3集
2. 長野原町教育委員会 2000 『坪井遺跡Ⅱ』 長野原町埋蔵文化財調査報告第7集
3. 長野原町教育委員会 2002 『町内遺跡Ⅰ』 長野原町埋蔵文化財調査報告第9集
4. 長野原町教育委員会 2003 『町内遺跡Ⅱ』 長野原町埋蔵文化財調査報告第10集
5. 長野原町教育委員会 2003 『町内遺跡Ⅲ』 長野原町埋蔵文化財調査報告第11集
6. (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 1992 『年報11』
7. (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 1999 『年報18』
8. (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 2000 『年報19』
9. (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 2001 『年報20』
10. (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 2002 『年報21』
11. (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 2003 『年報22』
12. 公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団 2003 『年報31』

第5図 基本土層図（1/10）



第6図 坪井遺跡Ⅶ全体図 (1/200)

IV 検出された遺構と遺物

店舗兼住宅予定箇所を西側（１区）と東側（２区）の順で半分ずつ面的に表土を剥ぎ、本調査を実施した。また補足調査として対象地南側の歩道と境界部分（３区）の調査を実施した。その結果、以下の遺構と遺物が検出された。

<検出遺構>

縄文時代早期前半 土坑 ２基
 〃 後期前葉 土坑 ３基
 弥生時代中期前半 竪穴式住居跡 １軒 土坑 ５基
 平安時代 陥し穴 ３基 掘立柱建物跡 １棟
 時期不明 土坑 ５基

<出土遺物>

縄文土器・石器
 弥生土器・石器・炭化材
 須恵器・鉄サイ

（１）竪穴式住居跡

SI01（第７～９図／PL3・10）

位置 １区～２区。調査区中央南側。

重複関係 SK02とも一部重複するが新旧関係は不明、SK13・14に切られる。

遺存状態 不良。北側に僅かに掘り込み面を残すのみである。

覆土 暗褐色土を基調とし、自然堆積を示しているが、本住居跡の覆土は明確にはできなかった。

平面形と規模 柱穴と遺物出土範囲から平面形は不整楕円形を呈すると思われる。規模は主軸方向で約472cm、副軸方向で約410cm、確認面からの掘り込みは最深8cmを測る。床面積は推定で約35.0㎡を測る。

主軸方位 N－23°－E

床面 硬化面も見られず明確に把握することはできなかった。地山は北側から南側へ傾斜している。

壁・壁溝 壁は北側に僅かに残るのみで壁高は8cmを測る。壁周溝は見られなかった。

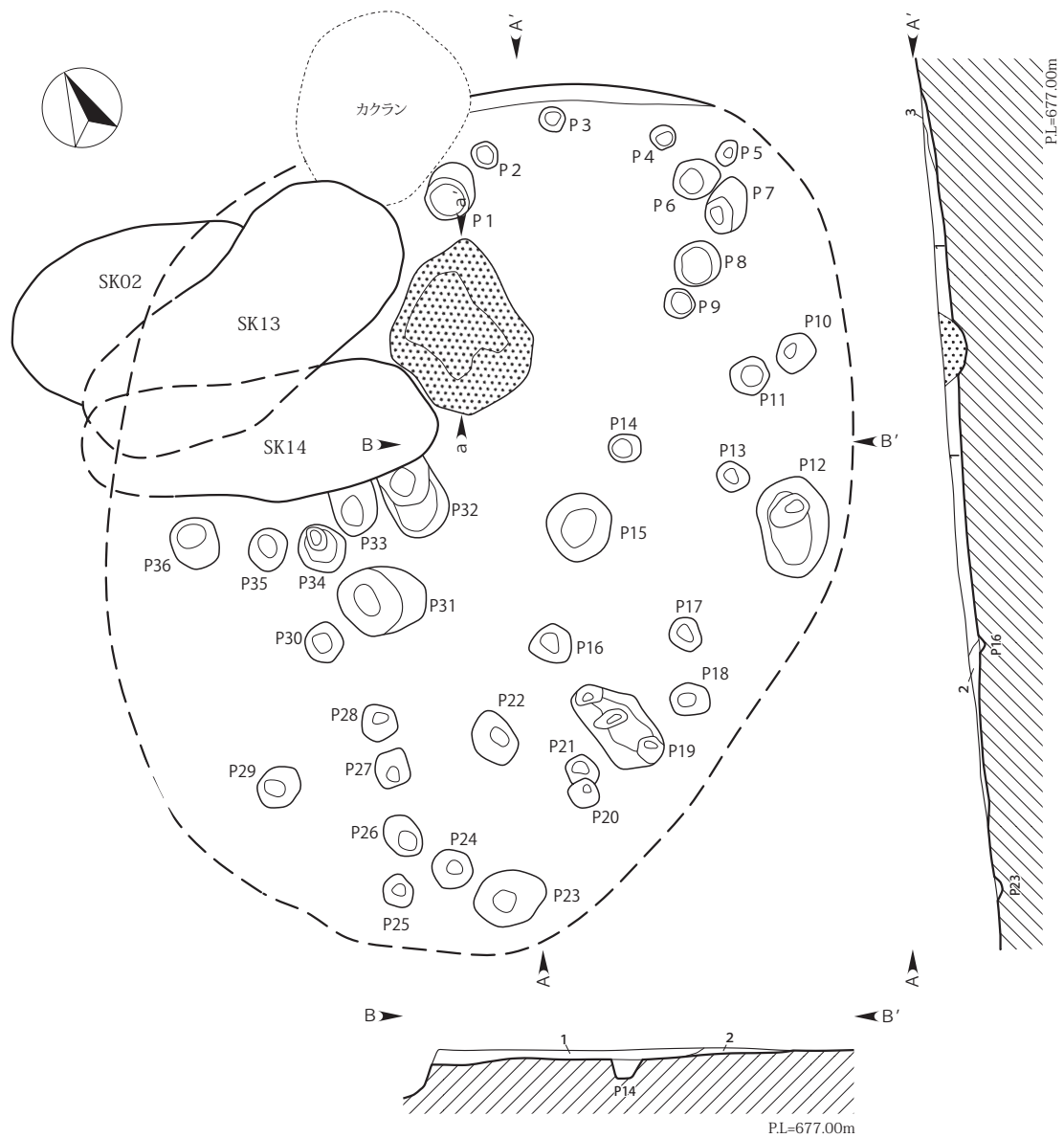
柱穴 P1～P36が検出されているが、支柱穴といえそうな深さを有しているものは少ない。壁に沿って巡っていたであろうP1・P7・P12・P19・P23・P29・P36などが支柱穴の候補となり得るであろう。ピット計測値は第3表に示した。

炉跡 住居跡中央北寄りに位置する。平面形は不整形を呈する。規模は長軸方向で96cm、短軸方向で79cmを測り、確認面からの深さは最深54cmを測る。第1層の焼土層から炭化材2点が出土し、

第3表 SI01ピット計測表

	P1	P2	P3	P4	P5	P6	P7	P8	P9	P10	P11	P12	P13	P14	P15	P16	P17	P18	P19	P20
長軸 (cm)	49	23	22	21	23	41	48	40	26	35	32	82	27	27	57	36	29	33	88	27
短軸 (cm)	39	21	21	19	16	32	32	38	25	15	28	56	23	23	53	31	26	27	46	25
床面からの深さ (cm)	38	10	8	6	12	15	31	13	9	18	8	28	12	15	27	16	16	19	36	17

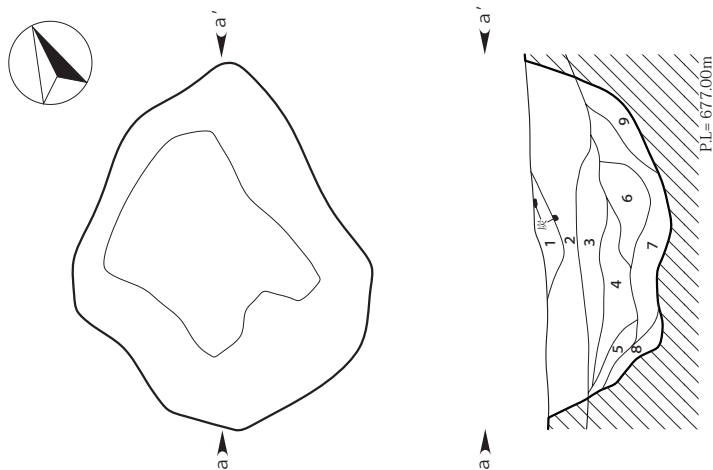
	P21	P22	P23	P24	P25	P26	P27	P28	P29	P30	P31	P32	P33	P34	P35	P36
長軸 (cm)	28	47	61	34	28	39	35	30	40	34	74	(61)	(40)	42	35	44
短軸 (cm)	24	34	45	32	24	28	29	28	32	30	58	44	37	39	30	40
床面からの深さ (cm)	18	20	27	23	17	21	23	21	32	17	42	27	36	52	40	37



SI01土層説明

AA'BB'

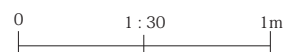
1. 暗褐色土層: 粘性なし、締まりややあり。ローム粒・軽石粒を微量、焼土粒・炭化粒(材)を含む。
2. 明褐色土層: 粘性なし、締まりややあり。ローム粒を含み、軽石粒を少量含む。
3. 明褐色土層: 粘性なし、締まりややなし。ローム粒をやや多く含み、軽石粒を微量含む。



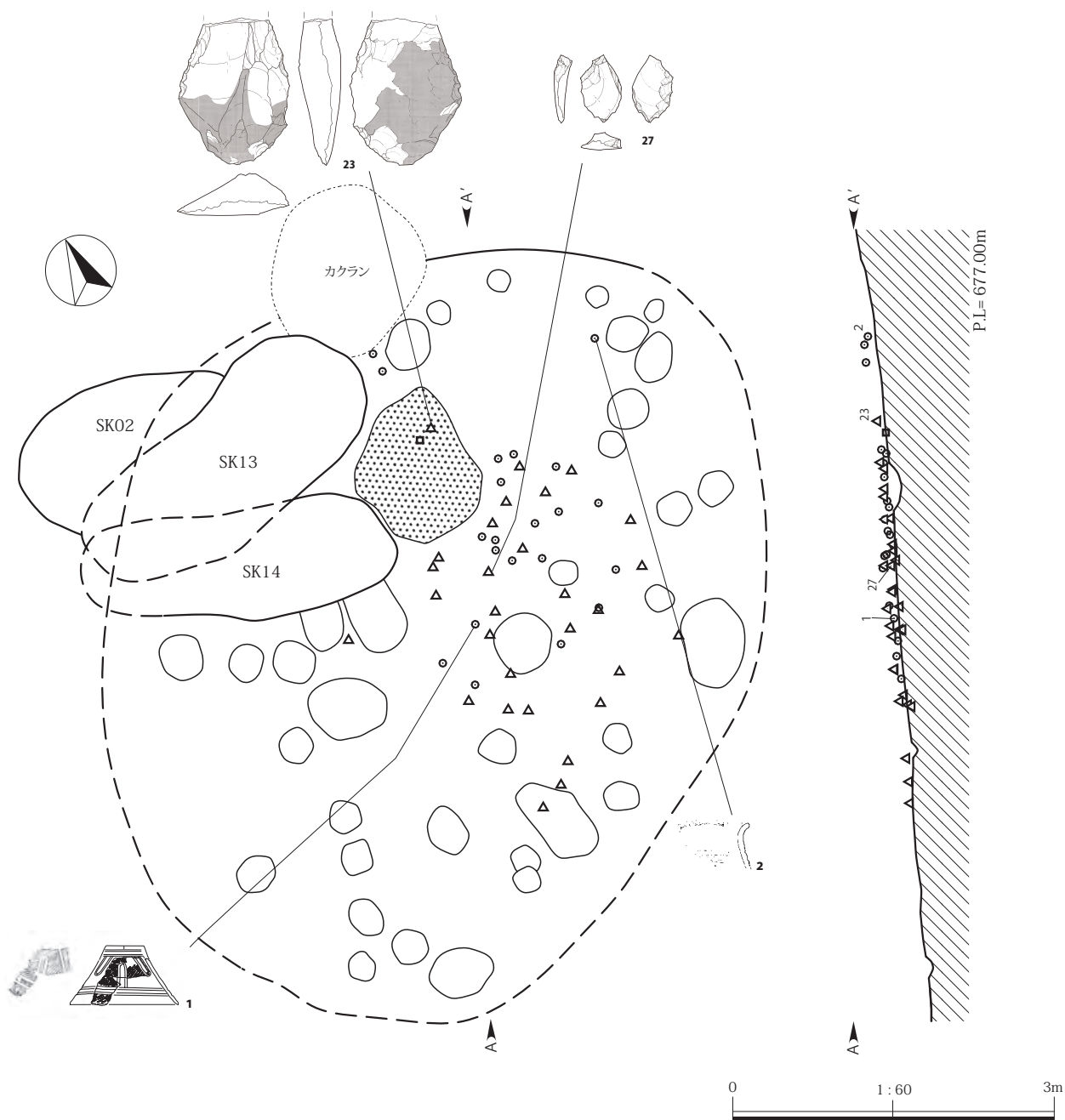
SI01炉跡土層説明

a a'

1. 焼土層: 粘性なし、締まりあり。焼土粒・炭化粒(材)を多量に含む。
2. 暗褐色土層: 粘性なし、締まりややあり。ローム粒・軽石粒を微量、焼土粒・炭化粒(材)を含む。
3. 暗褐色土層: 粘性なし、締まりあり。ローム粒・軽石粒を微量、炭化粒を含む。
4. 暗褐色土層: 粘性なし、締まりややあり。ローム粒・軽石粒を少量含む。
5. 暗褐色土層: 粘性なし、締まりややあり。ローム粒・軽石粒を含む。
6. 明褐色土層: 粘性なし、締まりあり。ローム粒を微量、軽石粒を少量含む。
7. 明褐色土層: 粘性なし、締まりややなし。ローム粒を含み、軽石粒を微量含む。
8. 明褐色土層: 粘性なし、締まりややあり。ローム粒及びφ~2cm大のロームブロックを多量、軽石粒を含む。
9. 明褐色土層: 粘性なし、締まりなし。ローム粒及びφ~1cm大のロームブロックを多量、軽石粒を微量含む。



第7図 SI01実測図 (1/60・1/30)



第8図 SI01遺物出土状況図 (1/60)

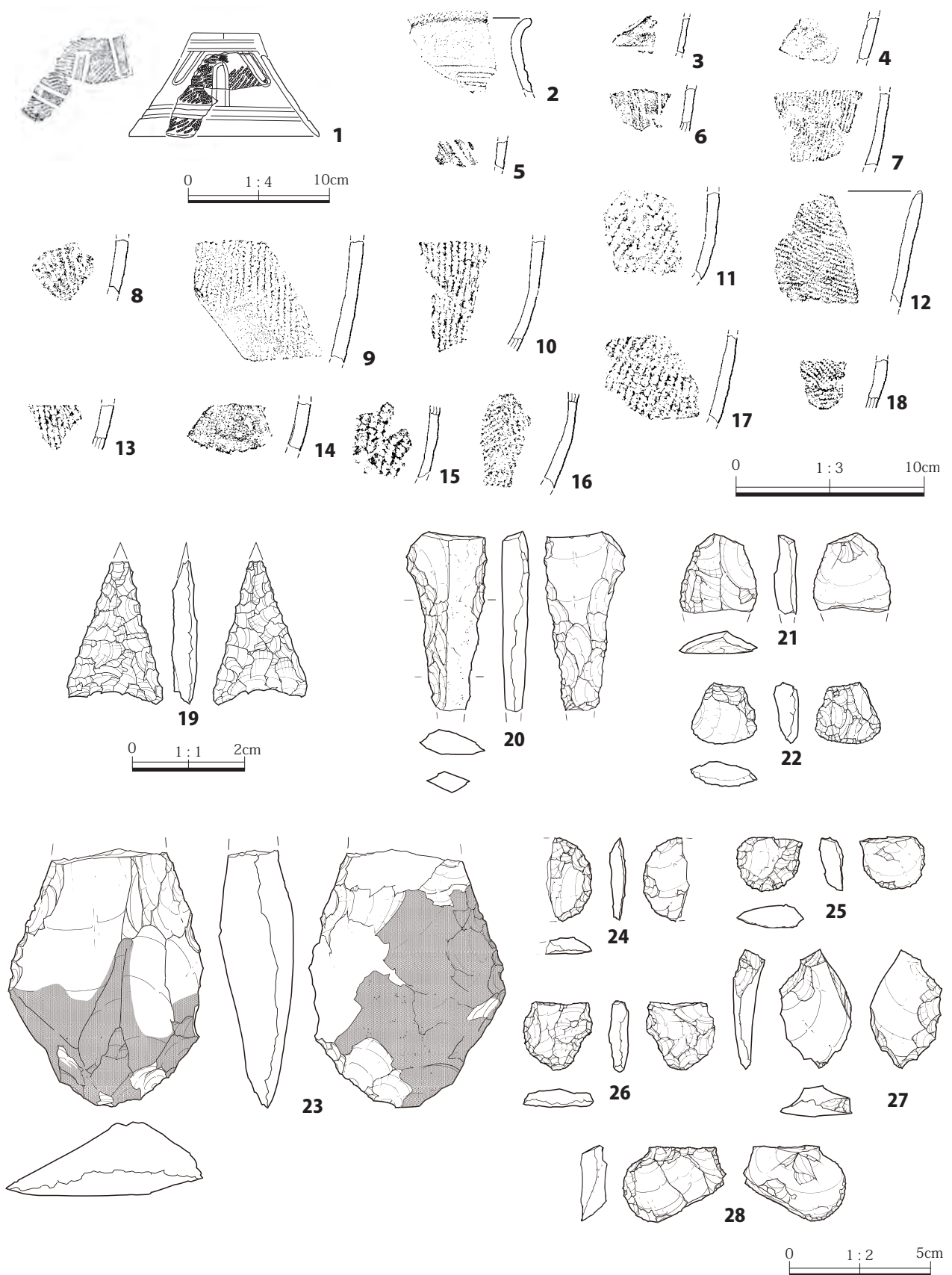
樹種同定および炭素性年代測定を実施している（V 自然科学分析を参照）。

その他の施設 なし。

遺物検出状況 住居跡中央部やや東側に 3.4 m × 2.5 m の遺物集中箇所が認められた。縄文時代早期前半の土器片や石器類が大部分で、当初は住居跡という認識ではなかったが数点の弥生時代中期前半の遺物も散見され、同じ面で炉跡と考えられる掘り込みも認められたことから住居跡と確定するに至った。このことから本遺構が縄文包含層の上に構築されたことが窺えた。

遺物 総出土量は弥生土器片 6 点 (46g)、縄文土器片 41 点 (214g)、石器 (剥片含む) 53 点 (5,957g)、炭化材 3 点 (79g) である。そのうち土器 16 点、石器 10 点を図示し得た。

備考 上述したように調査時には住居跡という認識は薄かったが住居跡として報告する。弥生土器は 6 点と少ないが、蓋形土器 (第9図1) や短頸壺 (第9図2) から本住居跡は弥生時代中期初頭に帰属すると考えられる。



第9図 SI01出土遺物実測図

(2) 土 坑

SK01 (第 10・12 図／P L 4・11)

位置 1 区。調査区中央南寄り。

重複関係 なし。

遺存状態 遺存状態は良好である。

覆土 暗褐色土を基調とし、自然堆積を示している。

平面形と規模 平面形は楕円形を呈し、長軸 160cm、短軸 144cm、確認面からの掘り込みは最深 28cmを測る。

主軸方位 N－82°－W

壁面 外傾して立ち上がっている。

底面 やや凸凹しているがほぼ平坦である。

遺物 総出土量は土器片 1 点 (13g)、石器 (剥片含む) 4 点 (2,877g) である。そのうち土器 1 点、石器 1 点を図示し得た。

備考 土器片 (第 12 図 1) は無文であるが、胎土や調整等の特徴から縄文時代後期前葉に帰属すると考えられる。

SK02 (第 10・12 図／P L 4・11)

位置 1 区～2 区。調査区中央南側。

重複関係 SI01・SK13 と重複し、SI01 との新旧関係は不明、SK13 には切られる。

遺存状態 良好。

覆土 明褐色土を基調とし、自然堆積を示している。

平面形と規模 平面形は楕円形を呈し、長軸 216cm以上、短軸 118cm以上、確認面からの掘り込みは最深 69cmを測る。

主軸方位 N－87°－W

壁面 階段状に立ち上がっている。

底面 中央が凹む。

遺物 総出土量は土器片 1 点 (6g)、石器 (剥片含む) 2 点 (50g) である。そのうち土器 1 点を図示し得た。

備考 土器片 (第 12 図 3) は、その特徴から弥生時代中期前半に帰属すると考えられる。

SK03 (第 10・12 図／P L 4・11)

位置 1 区。調査区北西側。

重複関係 なし。

遺存状態 良好。

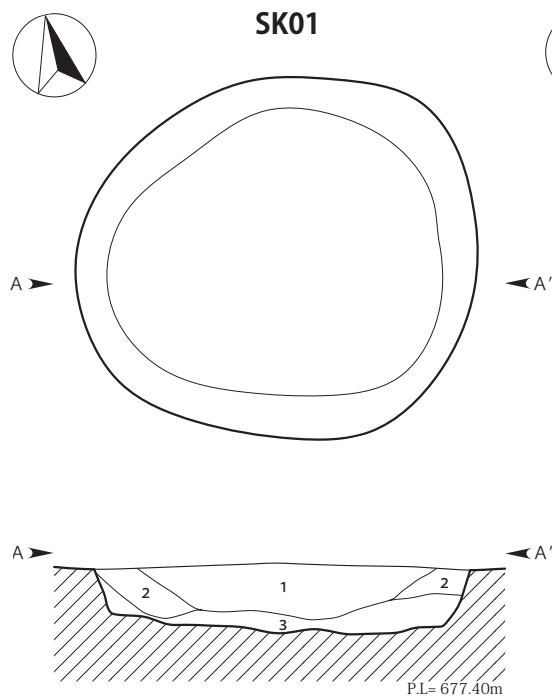
覆土 明褐色土を基調とし、自然堆積を示している。

平面形と規模 平面形は円形を呈し、長軸 52cm、短軸 49cm、確認面からの掘り込みは最深 39cmを測る。

主軸方位 N－11°－E

壁面 東壁は外傾、西壁は中位まで直立し上位は外傾して立ち上がっている。

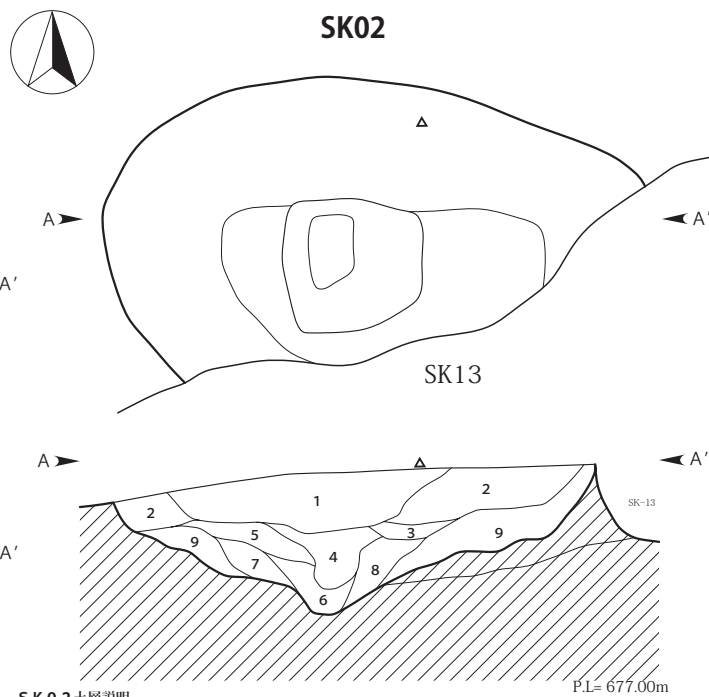
底面 ほぼ平坦であるが西側へ傾斜している。



SK01土層説明

AA'

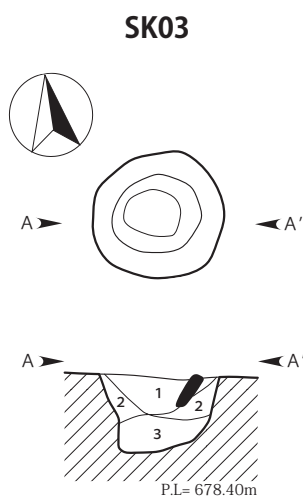
1. 暗褐色土層: 粘性なし、締まりややあり。ローム粒・軽石粒を微量含む。
2. 明褐色土層: 粘性なし、締まりややあり。ローム粒を多量、軽石粒を少量含む。
3. 明褐色土層: 粘性なし、締まりややなし。ローム粒及びφ〜3cm大のロームブロックを多量、軽石粒を微量含む。



SK02土層説明

AA'

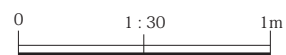
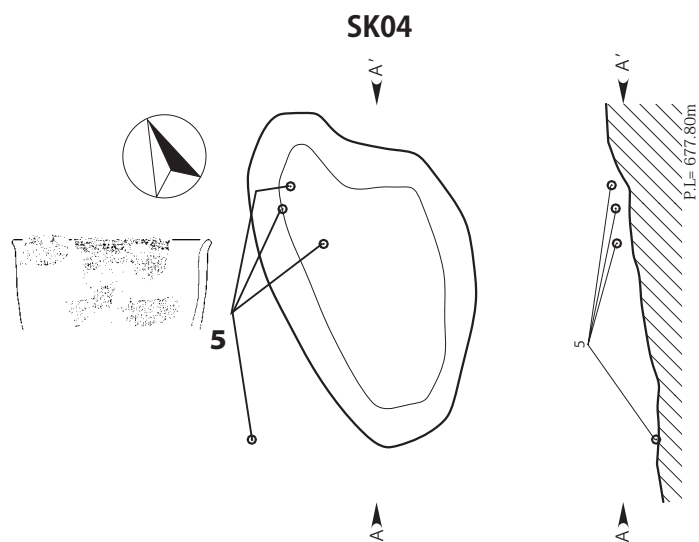
1. 暗褐色土層: 粘性なし、締まりややなし。ローム粒・軽石粒を微量含む。
2. 明褐色土層: 粘性なし、締まりややあり。ローム粒を含み、軽石粒を微量含む。
3. 暗褐色土層: 粘性なし、締まりややあり。ローム粒を少量、軽石粒を微量含む。
4. 明褐色土層: 粘性なし、締まりややなし。ローム粒及びφ〜3cm大のロームブロックを含み、軽石粒を少量含む。
5. 明褐色土層: 粘性なし、締まりややなし。ローム粒を含み、軽石粒を微量含む。
6. 明褐色土層: 粘性なし、締まりあり。ローム粒及びφ〜5cm大のロームブロックを多量、軽石粒を少量含む。
7. 明褐色土層: 粘性なし、締まりあり。全体の80%がローム粒及びφ〜3cm大のロームブロックから成る。
8. 明褐色土層: 粘性なし、締まりややあり。ローム粒及びφ〜2cm大のロームブロックを含み、軽石粒を微量含む。
9. 明褐色土層: 粘性なし、締まりややあり。ローム粒を含み、軽石粒を少量含む。



SK03土層説明

AA'

1. 暗褐色土層: 粘性なし、締まりあり。ローム粒・軽石粒を含む。
2. 明褐色土層: 粘性なし、締まりあり。ローム粒を多量、軽石粒を含む。
3. 明褐色土層: 粘性なし、締まりあり。ローム粒を含み、軽石粒を少量含む。



遺物 総出土量は石器 6 点 (50g) である。そのうち石器 1 点を図示し得た。

備考 土器片の出土がないので帰属時期は不明であるが、台石 (第 12 図 4) から弥生時代中期前半の可能性が高い。

SK04 (第 10・12 図／PL 4・12)

位置 調査区中央西側中央。

重複関係 なし。

遺存状態 良好。

覆土 単層である。明褐色土土層で粘性なし、締まりあり。ローム粒を多量、 $\phi \sim 3$ cm 大のロームブロックを少量、軽石粒を含む。

平面形と規模 平面形は不整楕円形を呈し、長軸 140cm、短軸 81cm、確認面からの掘り込みは最深 14cm を測る。

主軸方位 N - 7° - E

壁面 外傾して立ち上がっている。

底面 ほぼ平坦であるが北側から南側へ緩やかに傾斜している。

遺物 総出土量は土器片 (個体含む) 3 点 (30g)、石器 (剥片含む) 1 点 (2.4g) である。そのうち土器 1 点を図示し得た。

備考 接合により復元された深鉢 (第 12 図 5) から、本土坑は縄文時代早期前半に帰属すると考えられる。

SK05 (第 11・12 図／PL 5・11)

位置 1 区。調査区西側中央南寄り。

重複関係 なし。

遺存状態 良好。

覆土 明褐色土を基調とし、自然堆積を示している。

平面形と規模 平面形は楕円形を呈し、長軸 60cm、短軸 46cm、確認面からの掘り込みは最深 28 cm を測る。

主軸方位 N - 44° - E

壁面 西壁は階段状、東壁は直立して立ち上がっている。

底面 攪乱を被っているが平坦である。

遺物 総出土量は土器片 1 点 (2 g) のみである。

備考 深鉢口縁部片 (第 12 図 6) から、本土坑は縄文時代早期前半に帰属すると考えられる。

SK06 (第 11 図／PL 5)

位置 1 区。調査区西側中央南寄り。

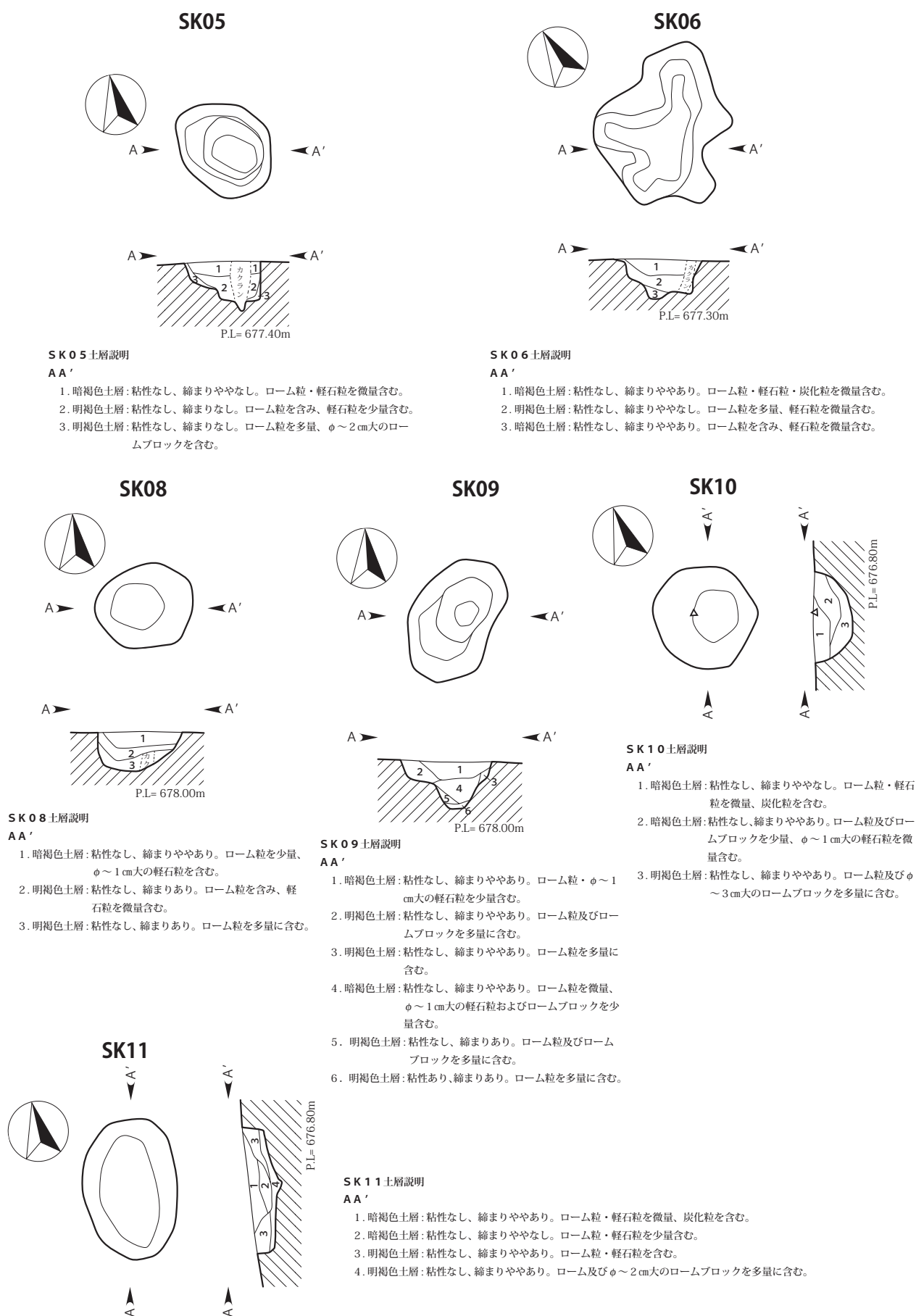
重複関係 なし。

遺存状態 良好。

覆土 暗褐色土を基調とし、自然堆積を示している。

平面形と規模 平面形は不整形を呈し、長軸 90cm、短軸 76cm、確認面からの掘り込みは最深 22 cm を測る。

主軸方位 N - 35° - E



第11図 SK05・06・08～11実測図 (1/30)

壁面 西壁は階段状、東壁は中位まで直立し上位は外傾して立ち上がっている。

底面 凸凹し、全体的に西側から東側に傾斜している。

遺物 総出土量は石器(剥片含む)3点(6g)、炭化材1点(0.3g)であるが、図示するには至らなかった。

備考 本土坑は時期を特定する遺物がないため帰属時期は不明であるが、出土炭化材の樹種同定を実施している(V 自然科学分析参照)。

SK08 (第11図/PL5)

位置 2区。調査区中央北寄り。

重複関係 なし。

遺存状態 良好。

覆土 暗褐色土を基調とし、自然堆積を示している。

平面形と規模 平面形は不整楕円形を呈し、長軸53cm、短軸46cm、確認面からの掘り込みは最深24cmを測る。

主軸方位 N-86°-W

壁面 西壁は中位まで外傾し上位は直立気味、東壁は外傾して立ち上がっている。

底面 皿状を呈している。

遺物 なし。

SK09 (第11図/PL5)

位置 2区。調査区中央北寄り。

重複関係 なし。

遺存状態 良好。

覆土 暗褐色土を基調とし、自然堆積を示している。

平面形と規模 平面形は楕円形を呈し、長軸72cm、短軸48cm、確認面からの掘り込みは最深27cmを測る。

主軸方位 N-23°-E

壁面 階段状を呈している。

底面 ピット状に凹む。

遺物 総出土量は石器(剥片含む)1点(0.3g)のみで図示するには至らなかった。

SK10 (第11図/PL6)

位置 2区。調査区中央南側。

重複関係 なし。

遺存状態 良好。

覆土 暗褐色土を基調とし、自然堆積を示している。

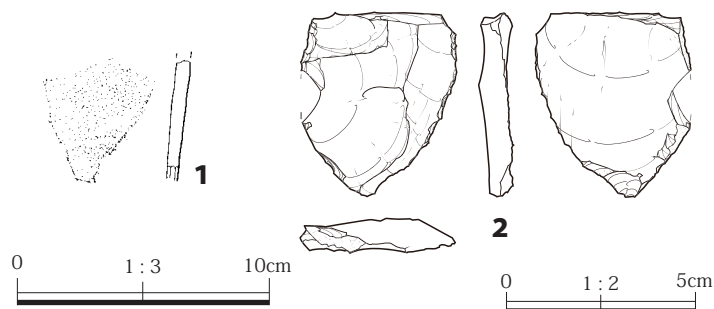
平面形と規模 平面形は不整円形を呈し、長軸58cm、短軸56cm、確認面からの掘り込みは最深20cmを測る。

主軸方位 N-19°-E

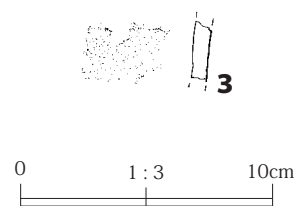
壁面 丸く立ち上がっている。

底面 皿状を呈している。

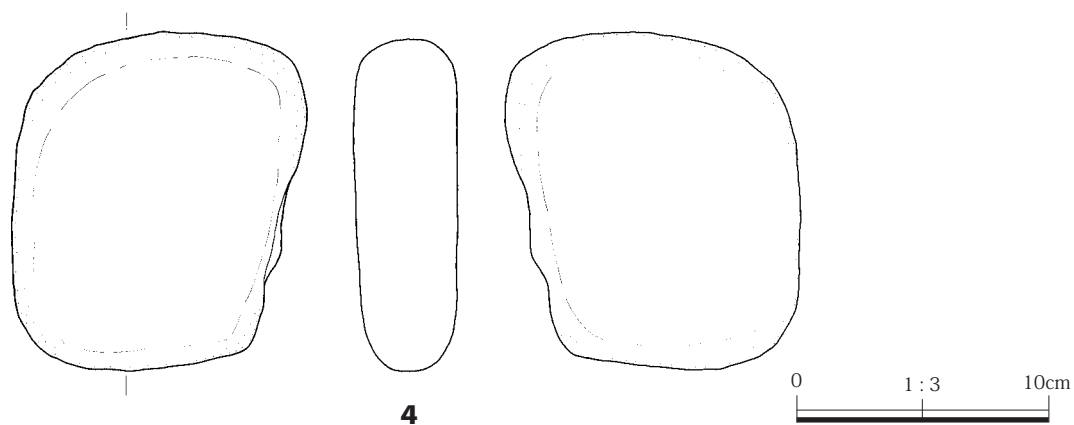
SK01



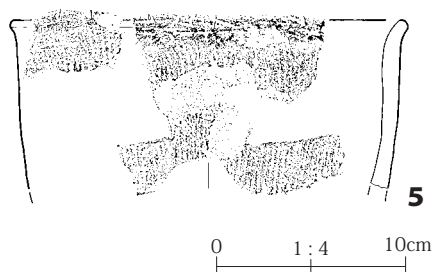
SK02



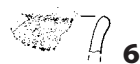
SK03



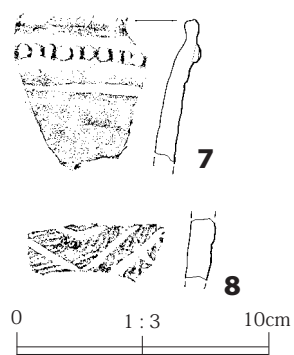
SK04



SK05



SK11



第12図 SK01～05・11出土遺物実測図

遺物 総出土量は土器片（個体含む）1点（5g）、石器（剥片含む）1点（2g）であるが図示するには至らなかった。

SK11（第11・12図／PL6・11）

位置 2区。調査区中央。

重複関係 なし。

遺存状態 良好。

覆土 暗褐色土を基調とし、自然堆積を示している。

平面形と規模 平面形は楕円形を呈し、長軸 77cm、短軸 52cm、確認面からの掘り込みは最深 27cmを測る。

主軸方位 N - 7° - E

壁面 直立気味に立ち上がる。

底面 ほぼ平坦で中央がやや凹む。

遺物 総出土量は土器片 3 点 (45g)、石器 (剥片含む) 1 点 (29g) である。そのうち土器 2 点を図示し得た。

備考 土器片 2 点 (第 12 図 7・8) から本土坑は縄文時代後期前葉に帰属すると考えられる。

S K 1 2 (第 13～21 図／P L 6・7・12～14)

位置 調査区東側。

重複関係 なし。

遺存状態 良好。

覆土 暗褐色土を基調とし、自然堆積を示している。

平面形と規模 平面形は楕円形を呈し、長軸 153cm、短軸 136cm、確認面からの掘り込みは最深 47cm を測る。

主軸方位 N－1°－E

壁面 やや外傾して立ち上がっている。

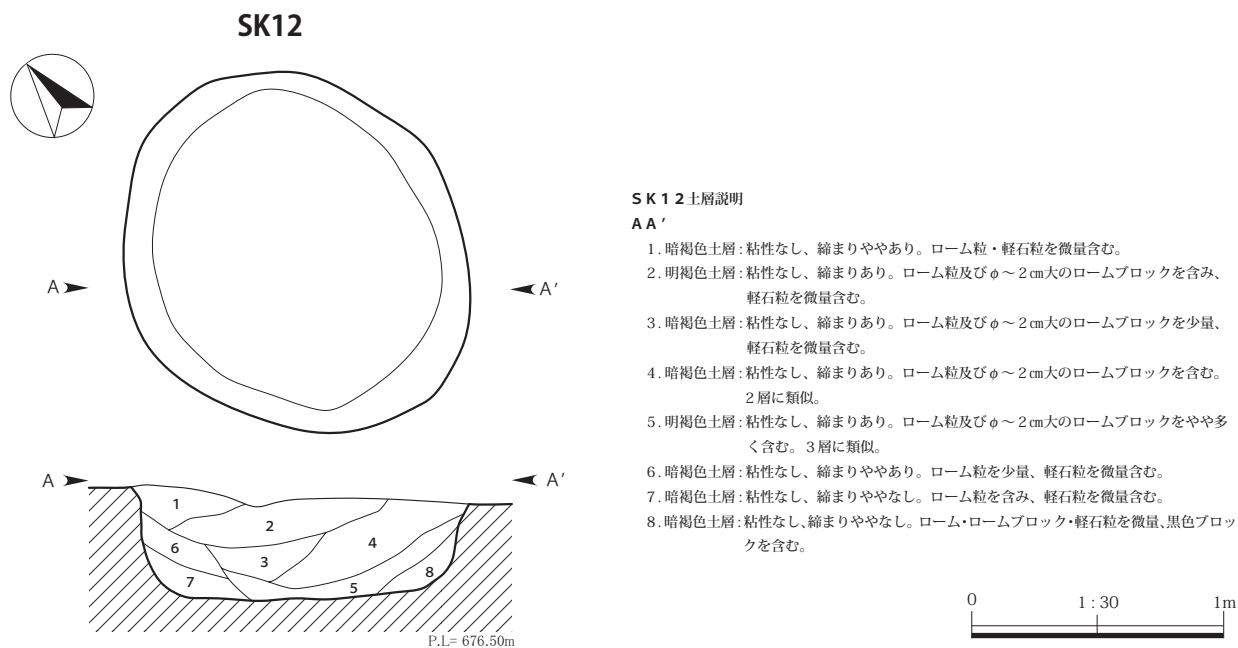
底面 ほぼ平坦である。

遺物 総出土量は土器片 (個体含む) 219 点 (1,933g)、石器 (剥片含む) 93 点 (1,367.5g)、炭化材 43 点 (68g) である。そのうち土器 45 点、石器 9 点を図示し得た。

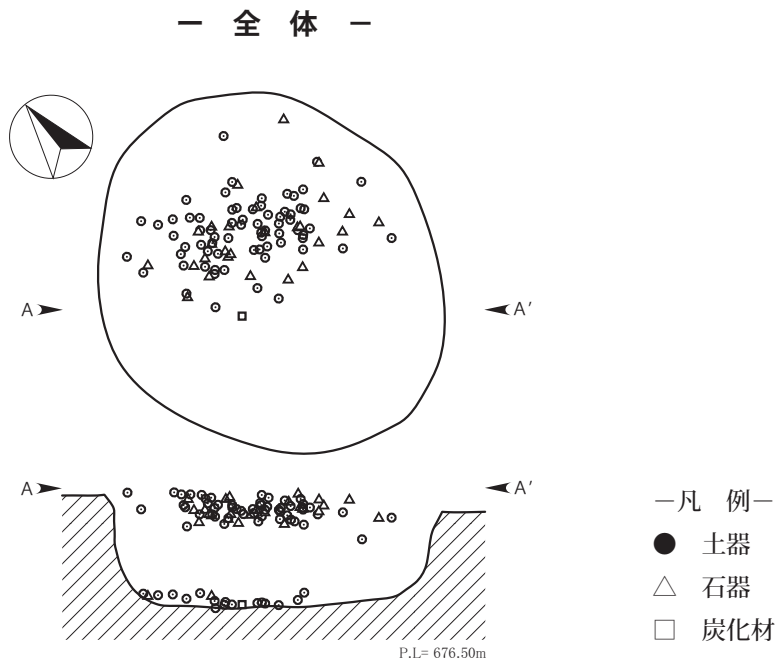
備考 本土坑からは大量の弥生土器片と石器が出土した。他時期の流れ込み遺物は一切確認されていない。器種ごとの出土状況図 (第 15～18 図) から遺物の分布が上層と下層に分かれ、中層での出土がないことが分かる。壺形土器は上層と底面直上に分布しており上下の接合関係は認められない。甕形土器は上層のみの分布である。筒形・浅鉢形土器は上層と下層に分かれ、上下で接合関係が認められた。石器はそのほとんどが上層に分布するが 1 点だけ下層で出土している。出土土器は第 19 図 1～4 が壺で同図 2 は細頸化、条痕の線が細く櫛描化している。同図 3・4 は同じく内面の条痕の線が細くハケメ化している。同図 5～7 は筒形土器で、同図 5 は磨消縄文により口縁部～底部まで途切れることなく工字状文の構図を描いており、区画沈線が幅広く古手の印象を受ける。ただ、筒形土器は文様帯幅が広い場合は、中ほどで文様帯を上下に区分するのが普通だが、これは区分していない点で異様に感じる。これに対して同図 6 は同じく磨消縄文により方形、同図 7 は工字状文の構図を描いているが区画沈線は 5 より細く、7 は器形も細身化している。破片資料 (第 20 図) の中で同図 12 は壺の頸部片で低い貼付突帯を巡らしており新しい印象を受ける。石器の中では同図 47 の有茎石鏃や同図 52～54 の石鏃は土器群との共伴資料として相応しいであろう。

以上、出土土器群の所見を簡潔に綴ったが、第 19 図 5 が遺存度の高い遺物として目立っており、筒形土器の盛行から当初は弥生時代中期中葉の神保富士塚式かその直前段階を想定していたが、上述した壺や筒形の特徴から判断して、神保富士塚式の新段階と栗林 1 式の接点に係わる時期に帰属し、遺構の性格はひとつの土坑から複数個体の土器が出土していることから再葬墓の可能性が高いと考えられる。

また、筒形土器 (第 19 図 6) の外面に付着していた煤 (炭化物) と土坑底面で出土した炭化物の樹種同定および炭素性年代測定を実施している (V 自然科学分析を参照)。

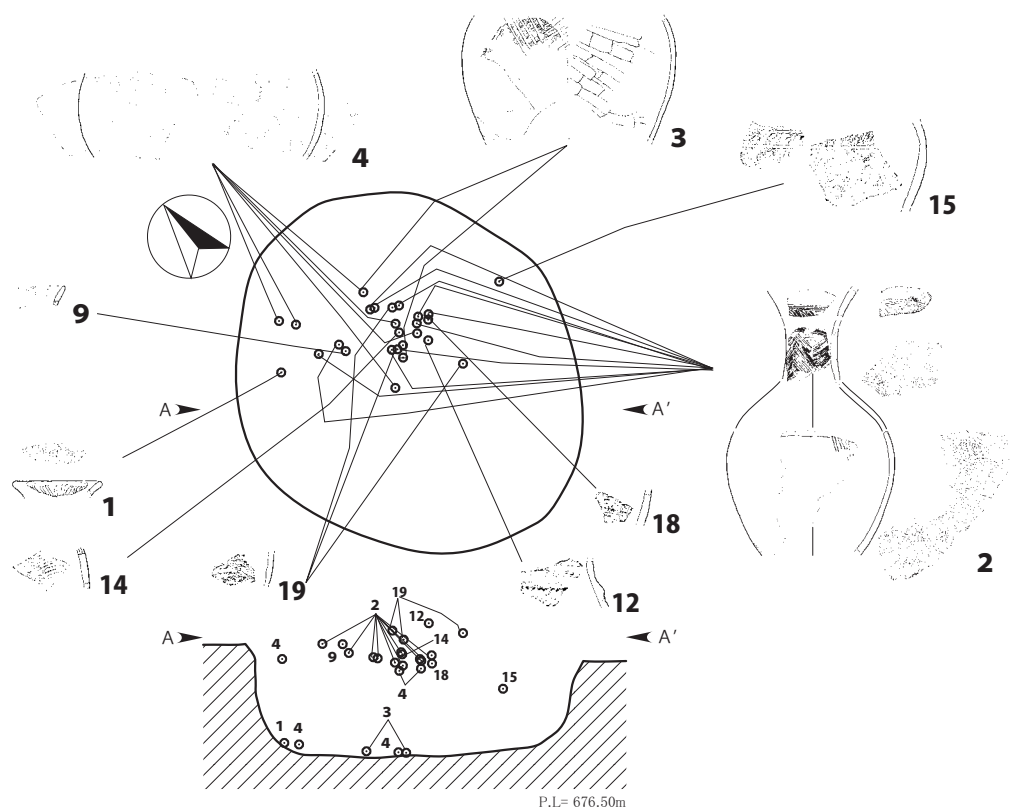


第13図 SK12実測図 (1/30)



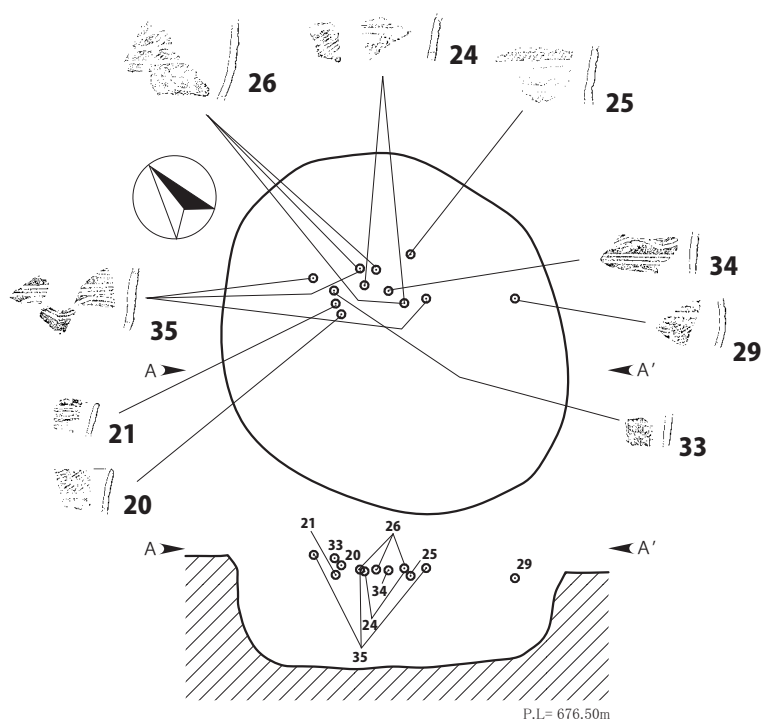
第14図 SK12遺物出土状況実測図1 <全体> (1/30)

— 壺形土器 —



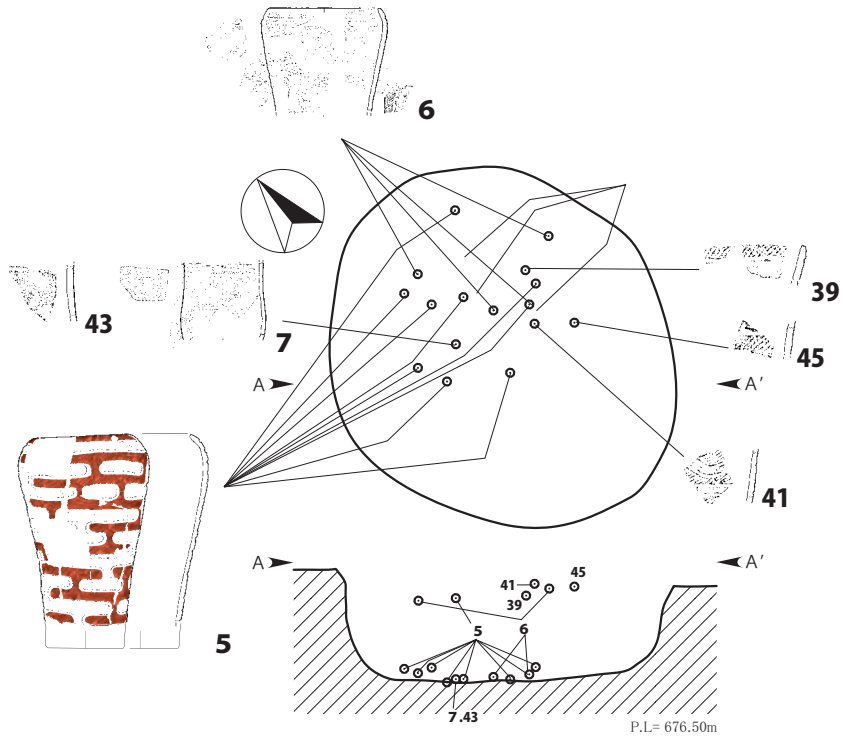
第15図 SK12遺物出土状況図2 <壺形土器> (1/30)

— 甕形土器 —



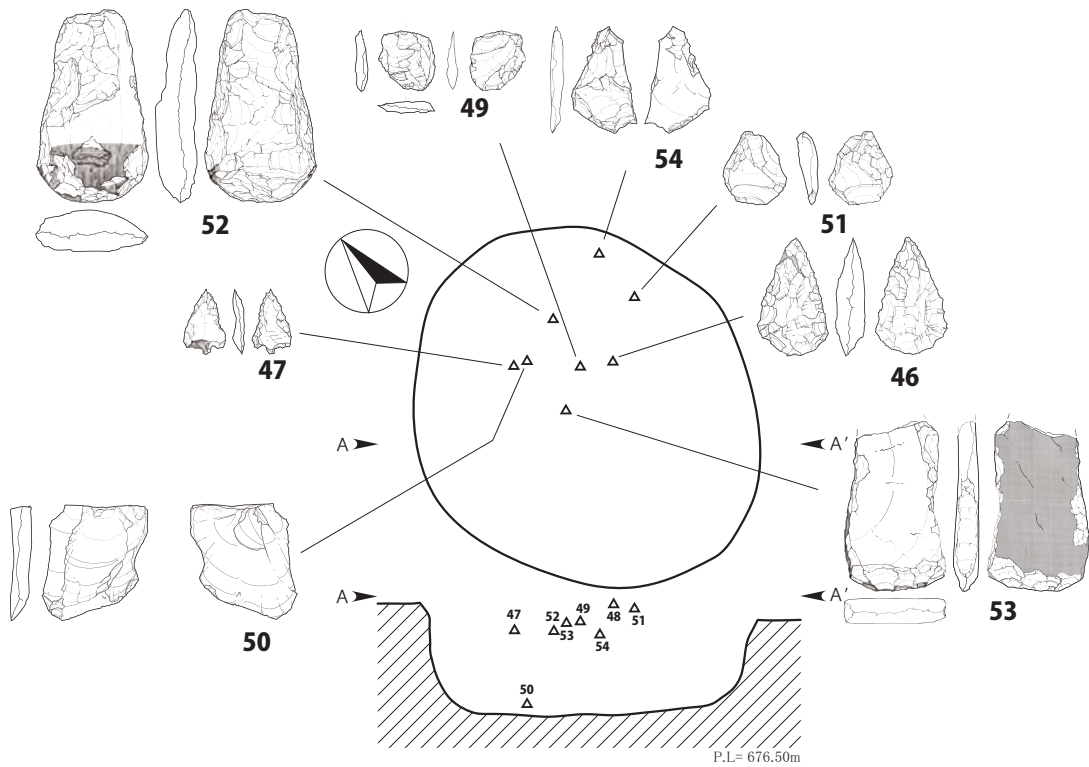
第16図 SK12遺物出土状況図3 <甕形土器> (1/30)

— 筒形・浅鉢形土器 —

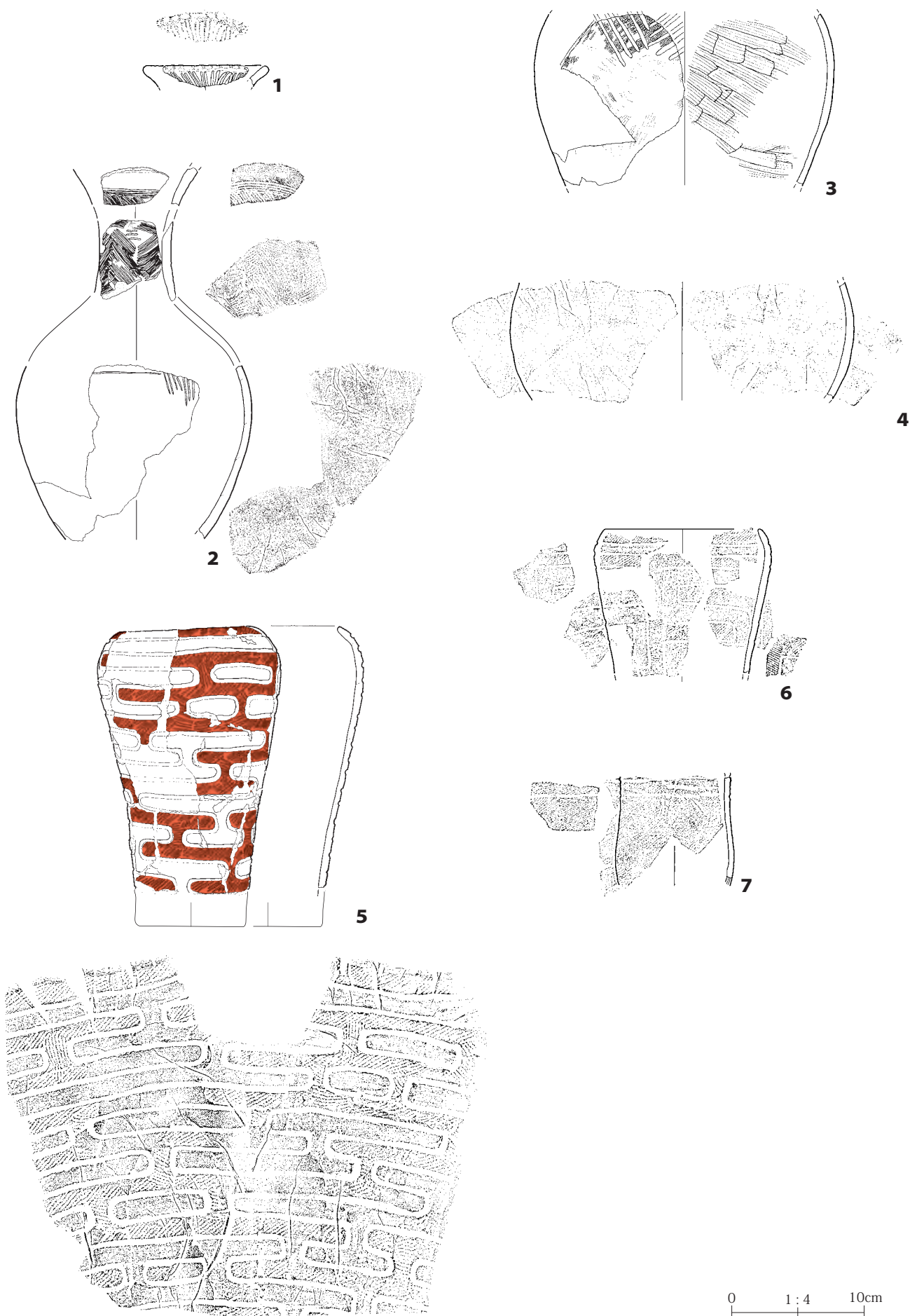


第17図 SK12遺物出土状況図4 <筒形・浅鉢形土器> (1/30)

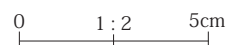
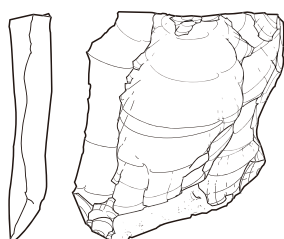
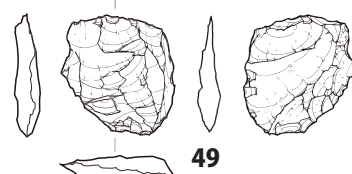
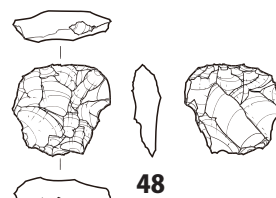
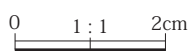
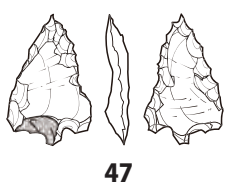
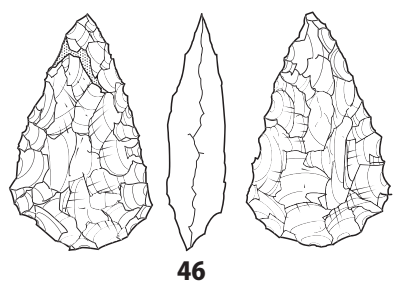
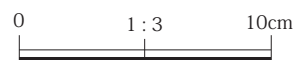
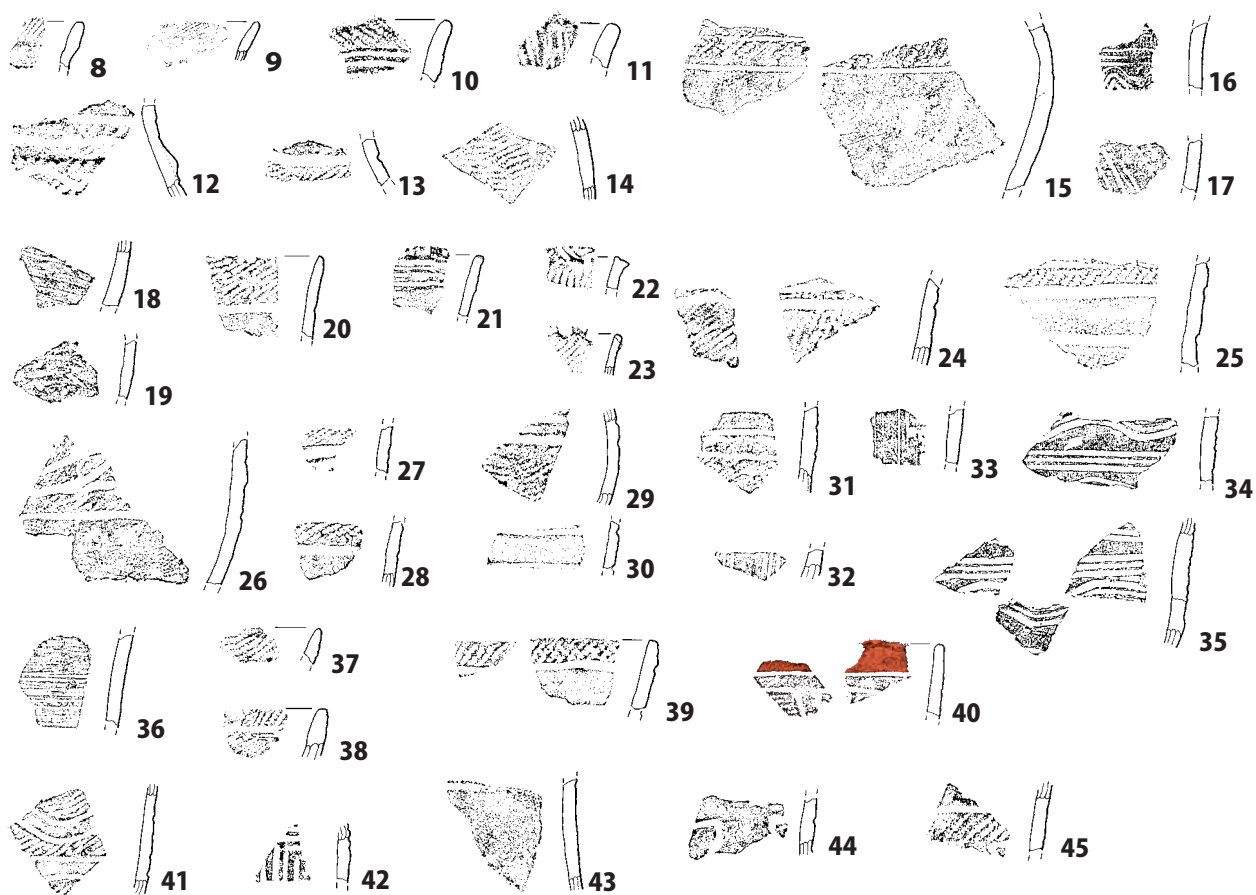
— 石器 —



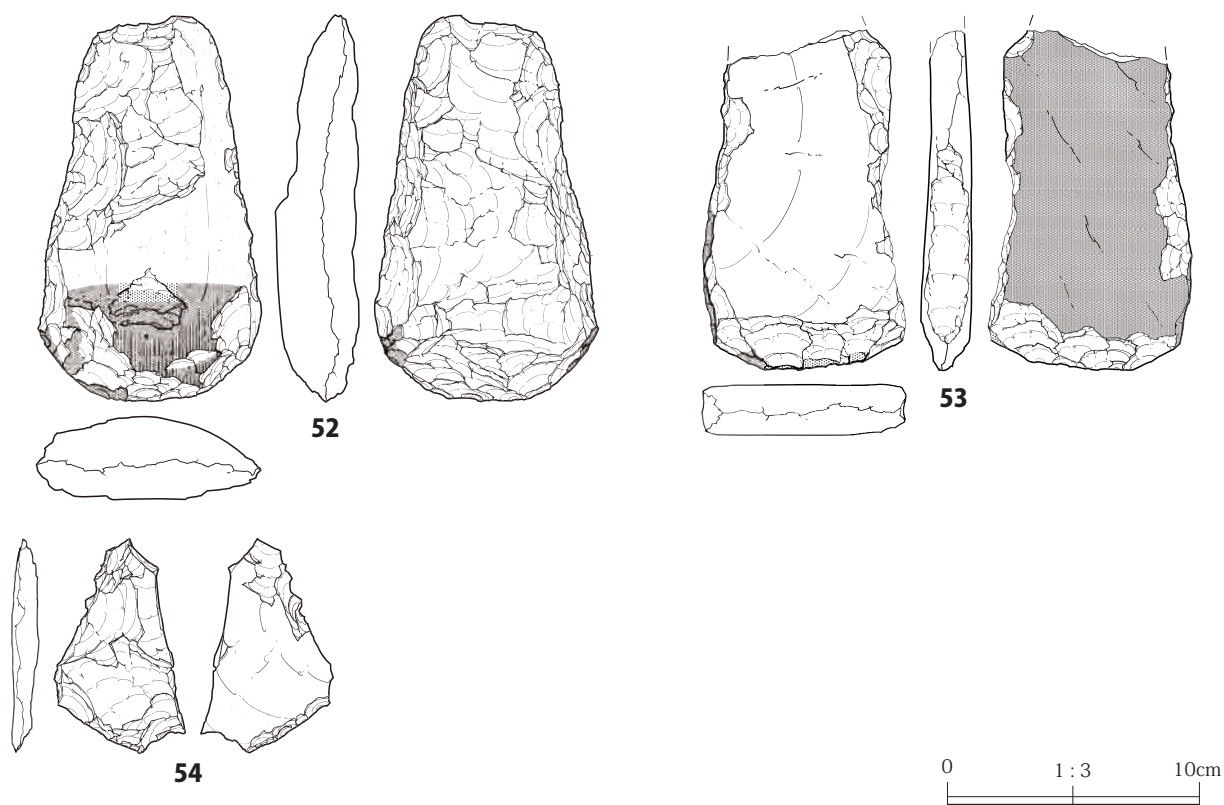
第18図 SK12遺物出土状況図5 <石器> (1/30)



第19図 SK12出土遺物実測図1



第20図 SK12出土遺物実測図2



第21図 SK12出土遺物実測図3

SK15 (第22図／PL7)

位置 2区から3区。調査区中央南側。

重複関係 なし。

遺存状態 良好。

覆土 中央に柱痕跡、周囲は人為的な水平堆積が認められる。柱は直径10～18cmの太さを示している。

平面形と規模 平面形は不整楕円形を呈し、長軸164cm、短軸107cm、確認面からの掘り込みは最深47cmを測る。

主軸方位 N－69°－W

壁面 やや外傾して立ち上がっている。

底面 ほぼ平坦である。

遺物 なし。

備考 本土坑は堆積土層の観察から掘立柱建物跡の柱穴と考えられる。ただ調査区内では対応する掘り方を検出することができなかった。

SK16 (第22図／PL7)

位置 3区。調査区中央南側。

重複関係 なし。

遺存状態 良好。

覆土 暗褐色土を基調とし、自然堆積を示している。

平面形と規模 平面形は円形を呈し、直径 60cm、確認面からの掘り込みは最深 33cmを測る。

主軸方位 —

壁面 外傾して立ち上がっている。

底面 皿状を呈している。

遺物 なし。

SK17 (第 22・23 図／P L 7・8・14)

位置 3区。調査区中央南側東寄り。

重複関係 なし。

遺存状態 攪乱を被り約 1/2 の遺存である。

覆土 暗褐色土を基調とし、自然堆積を示している。

平面形と規模 平面形は楕円形を呈し、長軸 68cm以上、短軸 44cm以上、確認面からの掘り込みは最深 26cmを測る。

主軸方位 N－80°－E

壁面 やや外傾して立ち上がっている。

底面 皿状を呈している。

遺物 総出土量は土器片 3 点 (66g) である。そのうち土器 1 点を図示し得た。

備考 土器片 (第 23 図 1) から縄文時代後期前葉に帰属すると考えられる。

SK18 (第 22・23 図／P L 8・14)

位置 3区。調査区中央南側東寄り。

重複関係 SK19 を切る。

遺存状態 良好。

覆土 暗褐色土を基調とし、自然堆積を示している。

平面形と規模 平面形は楕円形を呈し、長軸 75cm、短軸 48cm、確認面からの掘り込みは最深 32cmを測る。

主軸方位 N－79°－E

壁面 やや外傾して立ち上がっている。

底面 やや凸凹している。

遺物 総出土量は土器片 5 点 (23g)、石器 (剥片含む) 1 点 (36.5g) である。そのうち土器 3 点を図示し得た。

備考 土器片 (第 23 図 2～4) から弥生時代中期前半に帰属すると考えられる。

SK19 (第 22・23 図／P L 8・14)

位置 3区。調査区中央南側東寄り。

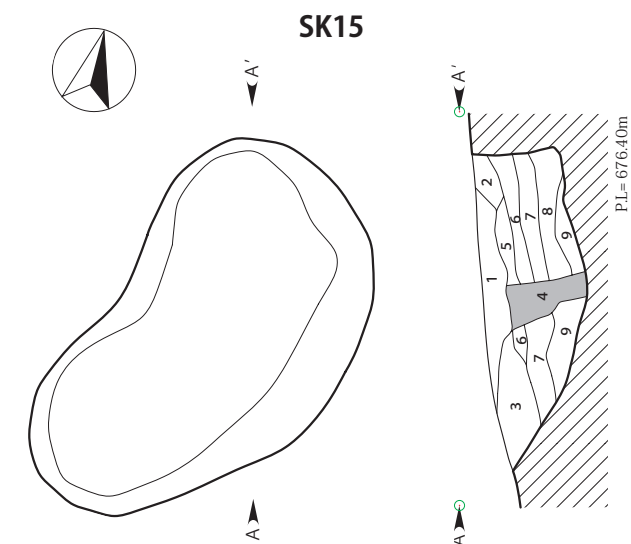
重複関係 SK18 に切られる。

遺存状態 良好。

覆土 暗褐色土を基調とし、自然堆積を示している。

平面形と規模 平面形は楕円形を呈し、長軸 84cm以上、短軸 59cm、確認面からの掘り込みは最深 29cmを測る。

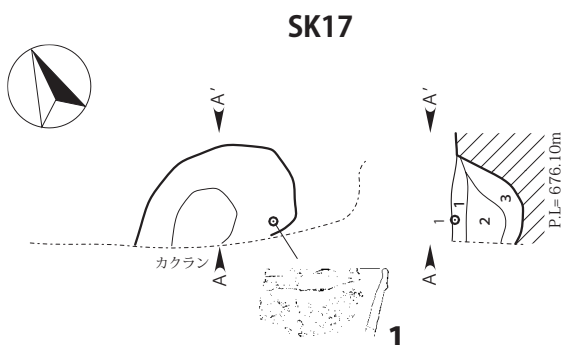
主軸方位 N－10°－W



SK15土層説明

AA'

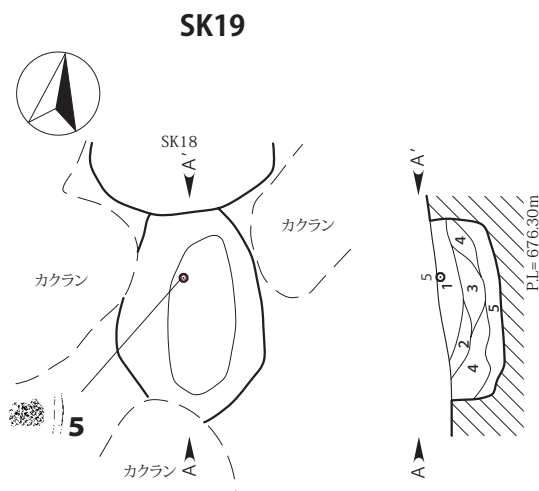
1. 暗褐色土層: 粘性なし、締まりややあり。ローム粒・軽石粒を微量含む。
2. 明褐色土層: 粘性なし、締まりあり。ローム粒を少量、軽石粒を微量含む。
3. 暗褐色土層: 粘性なし、締まりややあり。ローム粒を微量、軽石粒を少量含む。
4. 暗褐色土層: 粘性なし、締まりややあり。柱痕跡。
5. 明褐色土層: 粘性なし、締まりあり。ローム粒を多量、軽石粒を含む。
6. 暗褐色土層: 粘性なし、締まりあり。ローム粒・軽石粒を微量含む。
7. 明褐色土層: 粘性なし、締まりあり。ローム粒を多量、軽石粒を含む。5層と同じ。
8. 暗褐色土層: 粘性なし、締まりあり。ローム粒・軽石粒を微量含む。6層と同じ。
9. 明褐色土層: 粘性なし、締まりあり。ローム粒を多量、軽石粒を含む。5・7層と同じ。



SK17土層説明

AA'

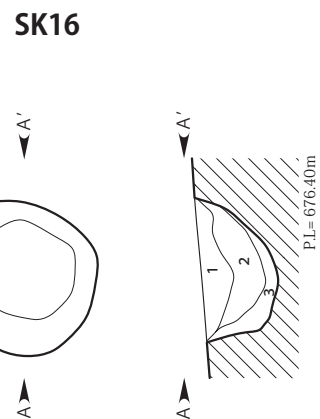
1. 暗褐色土層: 粘性なし、締まりややあり。ローム粒・軽石粒を微量含む。
2. 暗褐色土層: 粘性なし、締まりややあり。ローム粒を微量、 $\phi \sim 1$ cm大の軽石粒を少量含む。
3. 明褐色土層: 粘性なし、締まりあり。ローム粒を含み、 $\phi \sim 1$ cm大の軽石粒を微量含む。



SK19土層説明

AA'

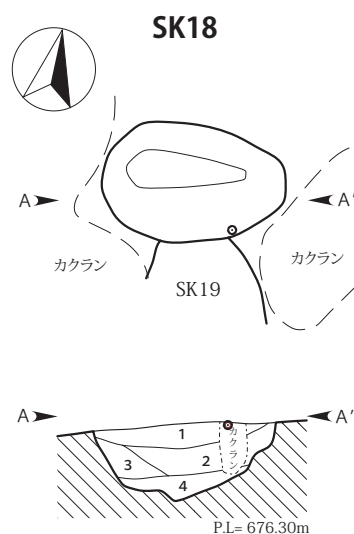
1. 暗褐色土層: 粘性なし、締まりあり。ローム粒・軽石粒を微量含む。
2. 明褐色土層: 粘性なし、締まりややあり。ローム粒を含み、軽石粒を微量含む。
3. 暗褐色土層: 粘性なし、締まりあり。軽石粒を微量含む。
4. 明褐色土層: 粘性なし、締まりあり。ローム粒を含み、軽石粒を少量含む。
5. 明褐色土層: 粘性なし、締まりあり。ローム粒を多量、 $\phi \sim 1$ cm大の軽石粒を含む。



SK16土層説明

AA'

1. 暗褐色土層: 粘性なし、締まりややなし。ローム粒・軽石粒を微量含む。
2. 暗褐色土層: 粘性なし、締まりあり。ローム粒を少量、軽石粒を微量含む。
3. 明褐色土層: 粘性なし、締まりあり。ローム粒を多量、 $\phi \sim 1$ cm大のロームブロックを少量、軽石粒を微量含む。



SK18土層説明

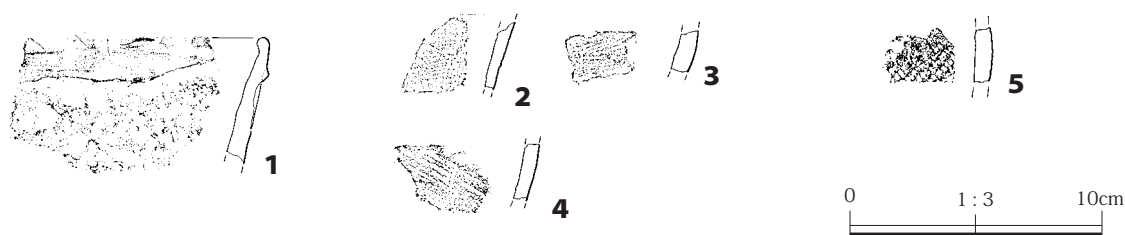
AA'

1. 暗褐色土層: 粘性なし、締まりあり。ローム粒・軽石粒を微量含む。
2. 明褐色土層: 粘性なし、締まりややあり。ローム粒を含み、軽石粒を微量含む。
3. 暗褐色土層: 粘性なし、締まりややあり。ローム粒・軽石粒を微量含む。
4. 明褐色土層: 粘性なし、締まりややなし。ローム粒を多量、軽石粒を少量含む。

SK17

SK18

SK19



第23図 SK17～19出土遺物実測図

壁面 やや外傾して立ち上がっている。

底面 ほぼ平坦である。

遺物 総出土量は土器片2点(8.4g)、炭化材1点(0.2g)である。そのうち土器1点を図示し得た。

備考 土器片(第23図5)から弥生時代中期前半に帰属すると考えられる。また出土炭化材の樹種同定を実施している(V 自然科学分析参照)。

(3) 陥し穴

SK07 (第24図／PL8)

位置 1区。調査区西側南寄り。

重複関係 なし。

遺存状態 良好。

覆土 中央にローム質土層と軽石のレンズ状堆積が認められた。全体的に暗褐色土を基調としており、自然堆積を示している。

平面形と規模 平面形は隅丸長方形を呈し、長軸300cm、短軸232cm、確認面からの掘り込みは最深93cmを測る。

主軸方位 N－67°－W

壁面 西壁は垂直気味に、南壁は外傾して立ち上がっている。

底面 ほぼ平坦である。小ピットが2基認められた。

遺物 総出土量は土器片(個体含む)3点(64g)、石器(剥片含む)8点(3,007g)であるが図示するには至らなかった。

SK13 (第25図／PL9)

位置 1区から2区。調査区中央南側。

重複関係 SI01・SK02・SK14を切る。

遺存状態 良好。調査区を跨がったの検出のため約半分は推定。

覆土 中央にローム質土層の堆積が認められた。全体的に明褐色土を基調とし、自然堆積を示している。

平面形と規模 平面形は楕円形を呈すると推測され、長軸300cm、短軸133cm、確認面からの掘り込みは最深61cmを測る。

主軸方位 N－77°－E

壁面 外傾して立ち上がっている。

底面 ほぼ平坦である。

遺物 総出土量は土器片(個体含む)1点(6g)、石器(剥片含む)2点(148g)であるが図示するには至らなかった。

SK14 (第26図/P L 9)

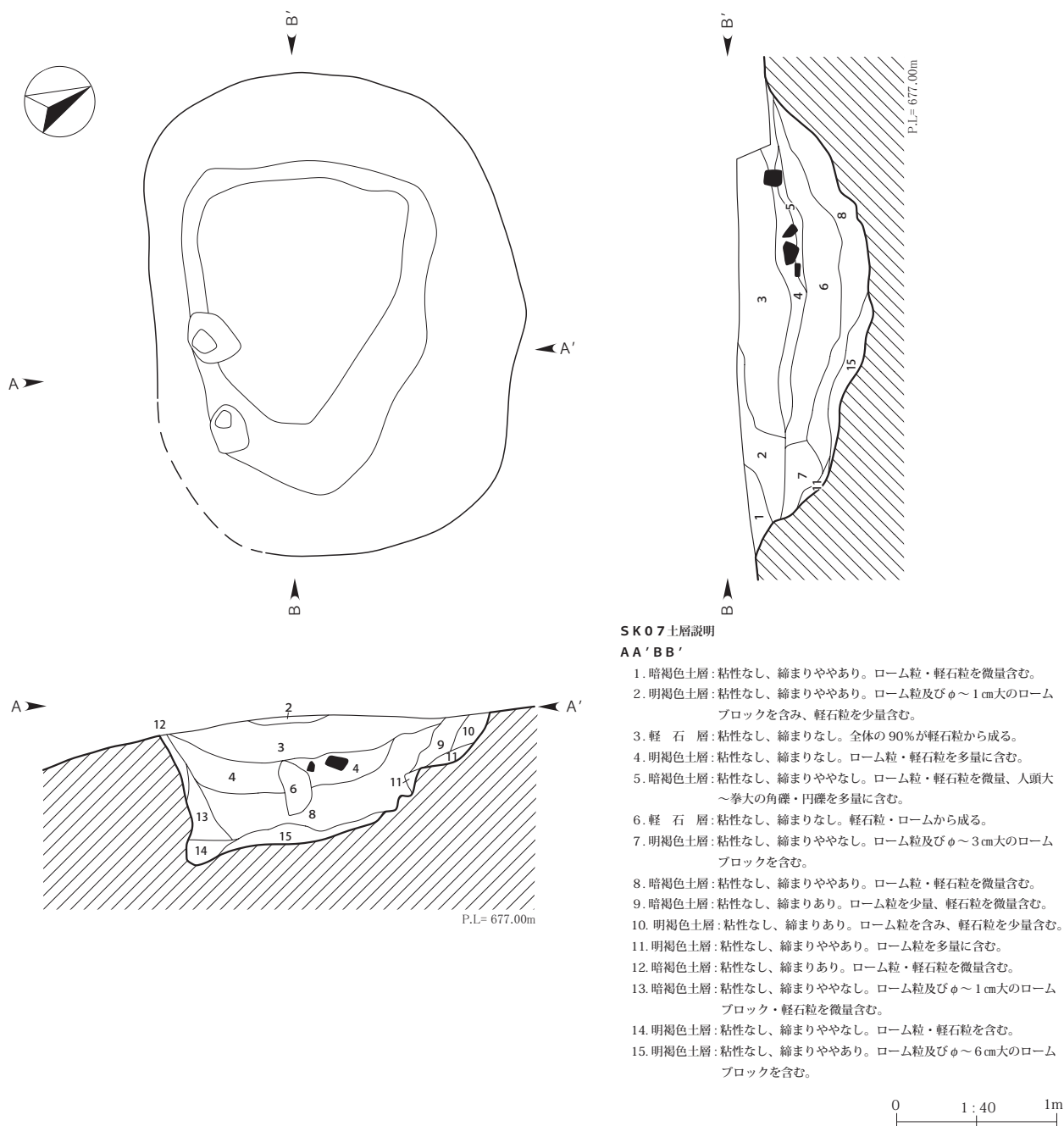
位置 1区から2区。調査区中央南側。

重複関係 SI01・SK02を切り、SK14に切られる。

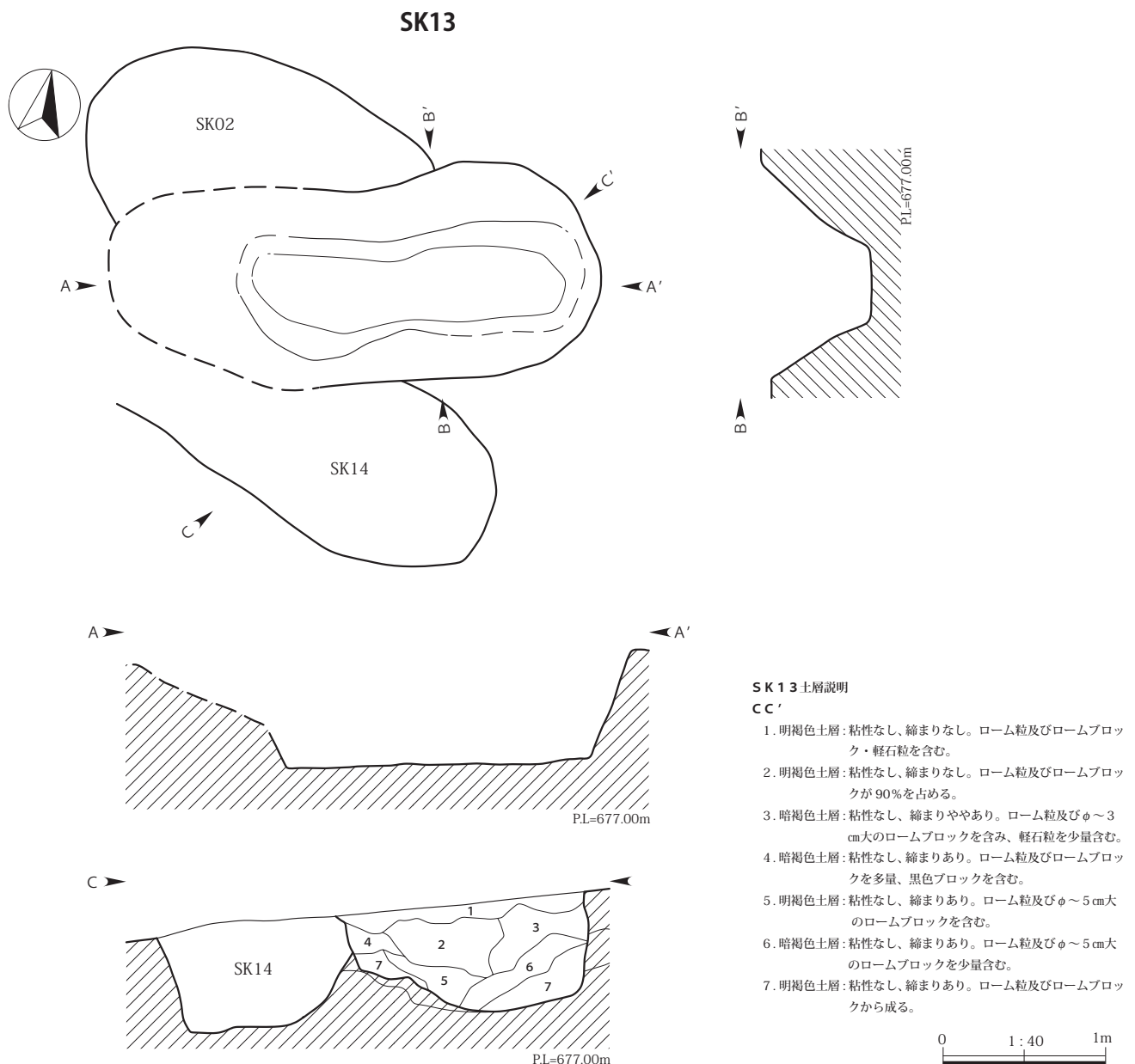
遺存状態 良好。調査区を跨がっての検出のため約半分は推定。

覆土 中央にローム質土層と軽石のレンズ状堆積が認められた。全体的に暗褐色土を基調とし、自

SK07



第24図 SK07実測図 (1/40)



第25図 SK13実測図 (1/40)

然堆積を示している。

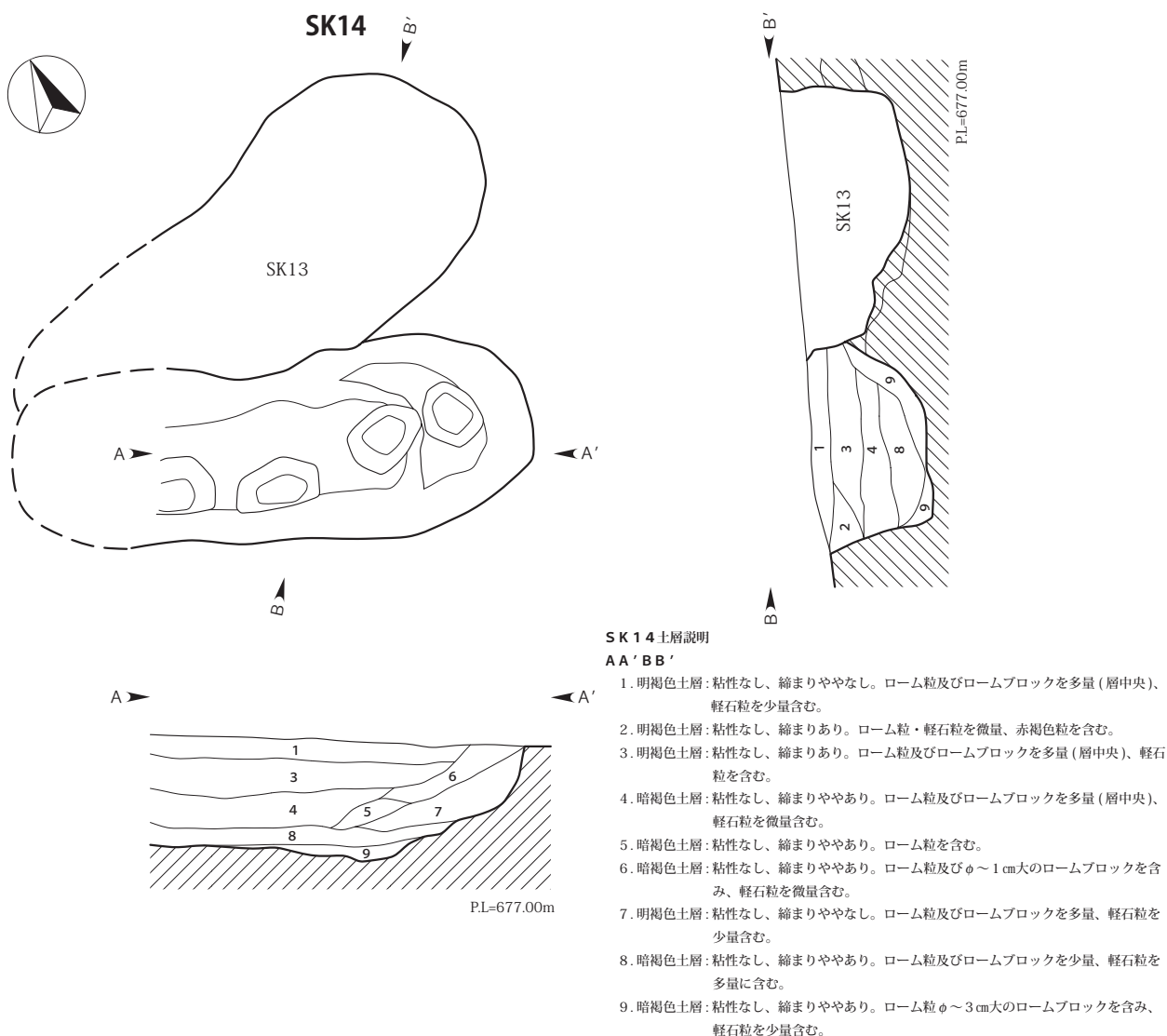
平面形と規模 平面形は楕円形を呈すると推測され、長軸 297cm、短軸 113cm、確認面からの掘り込みは最深 73cmを測る。

主軸方位 N－69°－W

壁面 南北壁は外傾して、東壁は階段状に立ち上がっている。

底面 ほぼ平坦である。小ピットが4基認められた。

遺物 総出土量は土器片（個体含む）4点（19g）、石器（剥片含む）1点（3g）であるが図示するには至らなかった。



第26図 SK14実測図 (1/40)

(4) 遺構外出土遺物

ここでは調査区表土および遺構内流れ込み遺物、トレンチ出土遺物を一括して取り扱う。遺構外出土遺物は縄文時代早期前半から平安時代までのものが認められる。

1. 土 器

以下の4群に大別する。

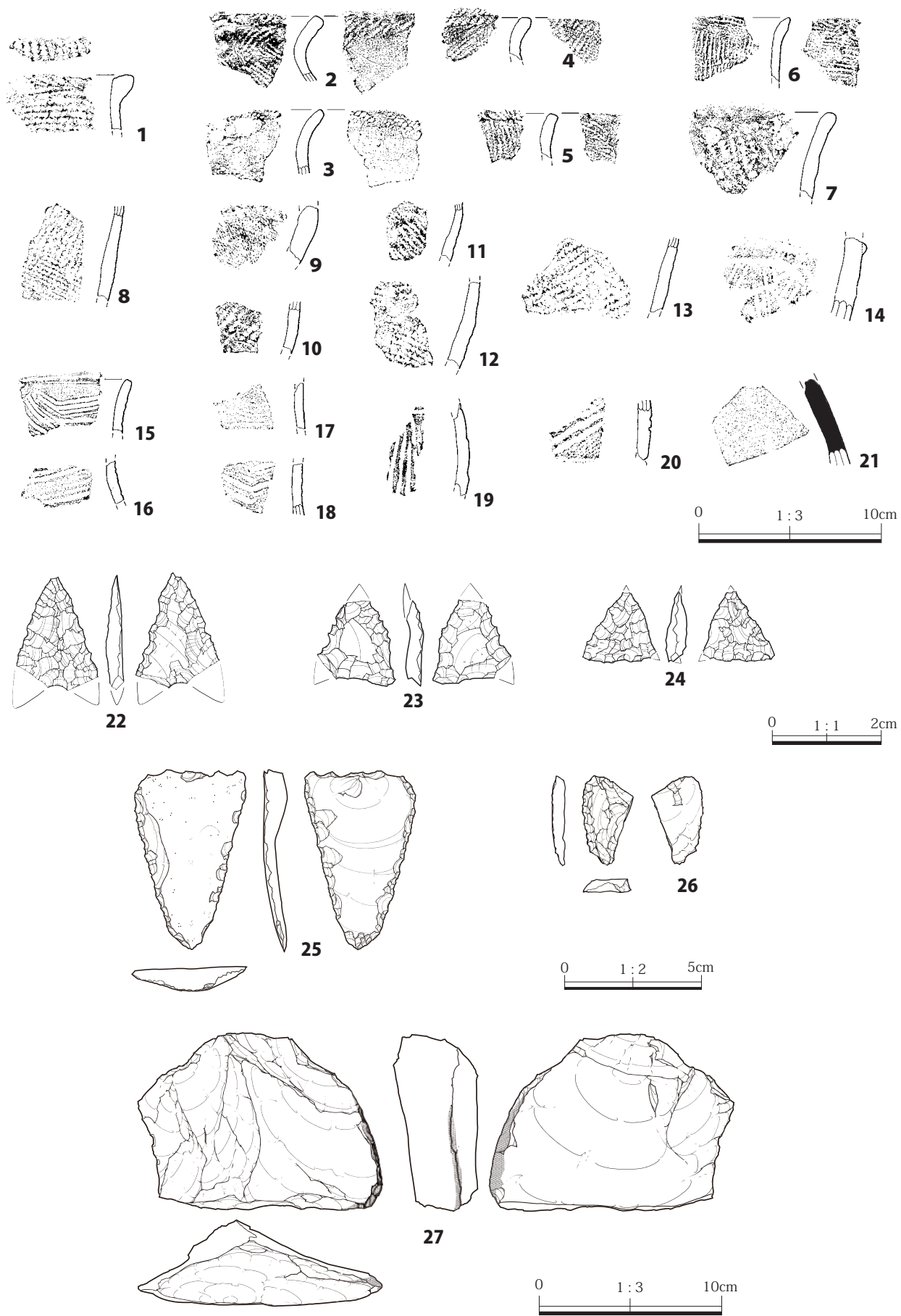
第Ⅰ群 縄文時代早期前半撚糸文土器を一括する (第27図1~13)。

撚糸施文 (同図6・9) はごく一部で大部分が縄文施文である。口縁部は肥厚させるもの (同図1)、角頭状 (同図2・3・5) や円頭状 (同図4・7) など外反が強く、同一原体で外面・口唇部・内面に施文することが特徴的である。外面施文は異方向に転がすことで羽状構成を採るもの (同図2・8) が認められる。これらは撚糸文の中でも古相を示しており、井草式併行と考えられる。

第Ⅱ群 縄文時代中期後半郷土式土器を一括する。

同図14のみで加曽利E2式新段階併行と思われる。

第Ⅲ群 弥生時代中期前半土器を一括する (同図15~20)。



第27図 遺構外出土遺物実測図 1

15 は甕の口縁部片で内外面ともに非常に丁寧なミガキ調整が施されている。外面に櫛描条痕を横位に施文している。16～19 は壺あるいは甕の胴部片でへう状工具ないしは櫛描条痕で文様が施されている。19 の縦位短沈線は特徴的である。20 は壺の胴部片と思われるがへう描沈線で区画された中に縄文を充填して文様を構成している。

第Ⅳ群 平安時代土師器・須恵器を一括する。

同図 21 のみで、須恵器甕の胴部片と思われる。

2. 石 器

(1) 剥片石器類 (同図 22～26)

石鏃とスクレイパーが認められる。石鏃は凹基長形のもの (同図 22) と平基三角 (同図 23・24) に分けることができる。スクレイパーはいずれも縦長剥片を素材としている。

(2) 打製石斧類 (同図 27・第 28 図 28)

スクレイパーと石鍬が認められる。27 は大形の横長剥片を素材としている。28 は平大バチ形を呈する石鍬である。扁平横長剥片を素材としており、刃部は摩耗が顕著である。

(3) 礫石器類 (同図 29・30)

いずれも複合石器で 29 が凹石＋磨石＋敲石、30 が凹石＋磨石である。

3. 金属製品

(1) 鉄製品 (同図 31)

製品ではないがここに分類する。31 は椀状を呈する鉄サイである。

(2) 銅製品 (同図 32)

32 は宋銭「元祐通宝」。初鑄年代は 1086 年で 9 世紀後半～10 世紀前半にかけて集落が造営される本遺跡と符号する。

V 自然科学分析

(1) 出土炭化材の樹種同定

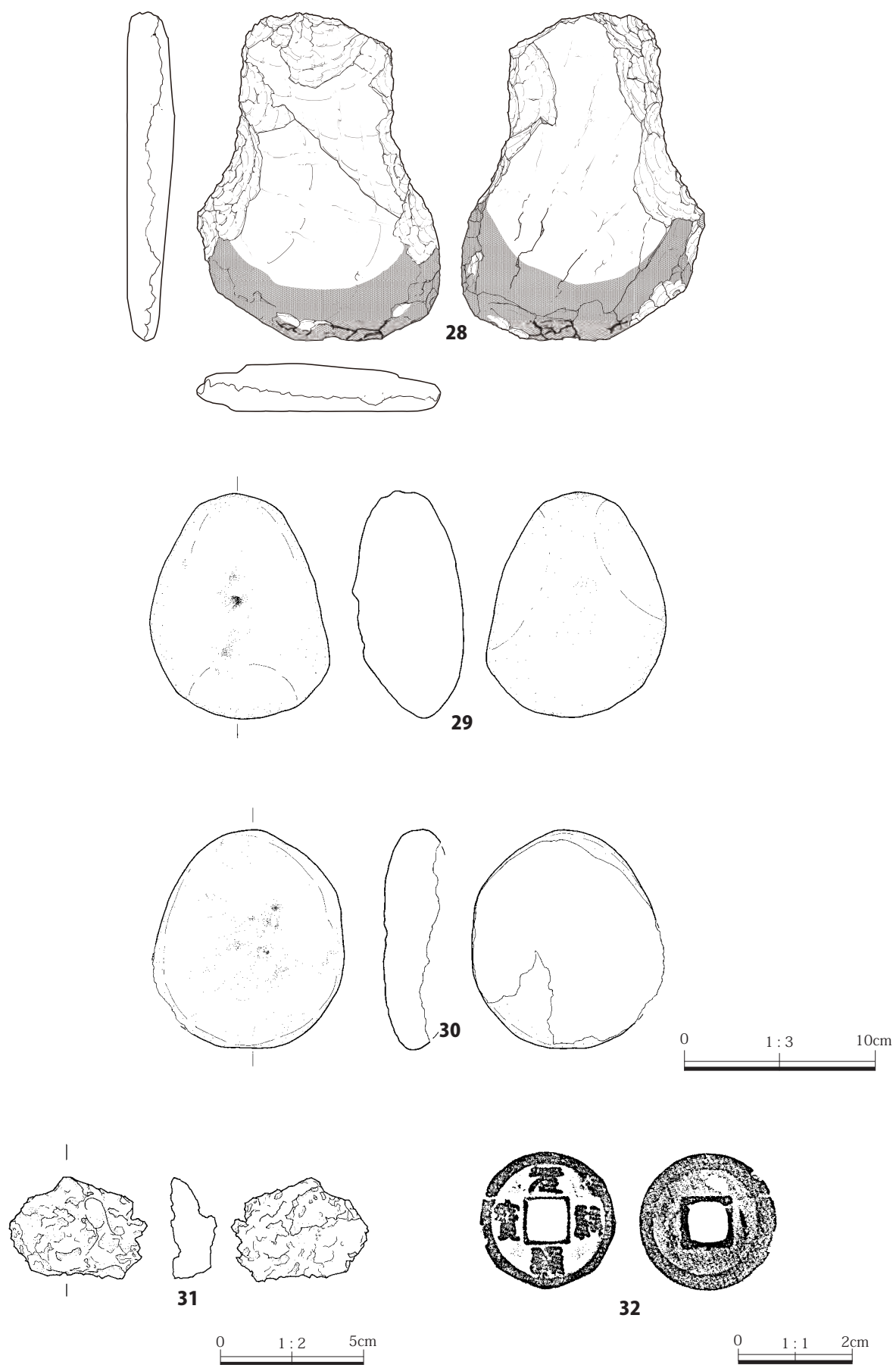
小林克也 (パレオ・ラボ)

1. はじめに

吾妻川の左岸段丘上に位置する坪井遺跡の 8 次調査で、竪穴住居跡や土坑から出土した炭化材について、樹種同定を行なった。なお、同定試料の一部については放射性炭素年代測定も行われている (放射性炭素年代測定の項参照)。

2. 試料と方法

試料は、竪穴住居跡である SI01 の炉跡から 2 点、土坑である SK06 から 1 点と SK12 から 3 点、SK19 から 1 点の、計 7 点の出土炭化材である。なお、放射性炭素年代測定の結果では、SI01 炉跡？で出土した試料 No.3 のクリは縄文時代晩期中葉、SK12 で出土した試料 No.5 のクリは縄文時代晩



第28図 遺構外出土遺物実測図2

期後葉～弥生時代前期の年代値を示した（放射性炭素年代測定の項参照）。なお、SK19 は弥生時代？、SK06 は時期不明である。

各試料について、残存半径と残存年輪数の計測を行なった。残存半径は試料に残存する半径を直接計測し、残存年輪数は残存半径内の年輪数を計測した。

炭化材の樹種同定では、まず試料を乾燥させ、材の横断面（木口）、接線断面（板目）、放射断面（柃目）について、カミソリと手で割断面を作製し、整形して試料台にカーボンテープで固定した。その後、イオンスパッタにて金蒸着を施し、走査型電子顕微鏡（日本電子（株）製 JSM-5900LV）にて検

第4表 坪井遺跡（8次）出土炭化材の樹種同定結果

樹種	出土遺構	縄文時代 晩期中葉 SI01		縄文時代晩期後葉 ～弥生時代前期		弥生時代？	時期不明	合計
		炉跡	炉跡？	SK12		SK19	SK06	
クリ		1	1	1		1	1	5
コナラ属クヌギ節				1				1
クスノキ科				1				1
	合計	1	1	3		1	1	7

鏡および写真撮影を行なった。

3. 結果

同定の結果、広葉樹のクリとコナラ属クヌギ節（以下クヌギ節と呼ぶ）、クスノキ科の3分類群が産出した。クリが最も多く5点で、クヌギ節とクスノキ科は各1点の産出であった。年輪数の計測では、残存半径0.5cm内に14年輪がみられた試料No.7のクヌギ節のように年輪幅が詰まった試料もみられたが、多くは残存半径0.4cm内に3年輪がみられた試料No.3のクリのように相対的に年輪幅がやや広い試料であった。同定結果を第4表に、一覧を第5表に示す。

次に、同定された材の特徴を記載し、図版に走査型電子顕微鏡写真を示す。

(1) クリ *Castanea crenata* Siebold. et Zucc. ブナ科 第29図1a-1c(No.3)

年輪のはじめに大型の道管が1～2列並び、晩材部では径を徐々に減じた道管が火炎状に配列する環孔材である。軸方向柔組織はいびつな線状となる。道管は単穿孔を有する。放射組織は同性で単列となる。

クリは北海道の石狩、日高以南の温帯から暖帯にかけての山林に分布する落葉中高木の広葉樹である。材は重硬で、耐朽性が高い。

(2) コナラ属クヌギ節 *Quercus sect. Aegilops* ブナ科 第29図2a-2c(No.7)

年輪のはじめに大型の道管が1列並び、晩材部では徐々に径を減じた、厚壁で丸い道管が放射方向に配列する環孔材である。軸方向柔組織はいびつな線状となる。道管は単穿孔を有する。放射組織は同性で、単列のものと広放射組織がみられる。

コナラ属クヌギ節にはクヌギとアベマキがあり、温帯から暖帯にかけて分布する落葉高木の広葉樹である。材は重硬で、切削などの加工はやや困難である。

(3) クスノキ科 *Lauraceae* 第29図3a-3c(No.6)

小型の道管が単独ないし2～3個複合し、疎らに散在する散孔材である。軸方向柔組織は周囲状となる。道管は単穿孔を有する。放射組織は上下端1～3列が直立する異性で、1～4列となる。

クスノキ科にはニッケイ属やタブノキ属、クロモジ属などがあり、暖帯を中心に分布する、主に常緑性の高木または低木である。

4. 考察

同定の結果、縄文時代晩期中葉の SI01 の炉跡では、クリが2点産出した。材はいずれも燃料材であると考えられている。クリは長時間燃焼し続けるという材質をもつため（伊東ほか 2011）、燃料材に適しているといえる。遺跡周辺に生育していたクリが燃料材として利用されていた可能性がある。

縄文時代晩期後葉～弥生時代前期の SK12 では、クリとクヌギ節、クスノキ科が各1点産出した。材の用途は不明である。また弥生時代可能性のある土坑 SK19 と、時期不明の SK06 でも、共に用途不明のクリが産出した。クリとクヌギ節は、重硬で強靱な材で割裂性が良く、燃料材としてみても長時間燃焼し続けるという材質をもつ。またクスノキ科は、軽軟な材から重厚な材までみられ、器具材としても用いられる場合もあるが、薪炭材として利用される場合も多い（平井 1996）。

時期は異なるが、同じ長野原町の長野原一本松遺跡では縄文時代後期の住居跡でクリの炭化材がきわめて多く産出している（植田 2008）。また弥生時代～古墳時代前期にかけての自然木の樹種同定が行われた高崎市の新保遺跡では、クヌギ節やクリ、エノキ属、オニグルミ、コナラ属コナラ節などが多く産出している（山田 1993）。今回の坪井遺跡の周辺にもクリやクヌギ節が多く生育し、それらが伐採され利用されていた、または周辺遺跡よりクリやクヌギ節を選択して伐採していた可能性がある。

第5表 坪井遺跡（8次）出土炭化材の樹種同定結果一覧

試料 No.	遺構名	層位 (注記)	遺物 No.	樹種	残存半径 (cm)	残存 年輪数	時期	年代測定 番号
3	SI01 炉跡		46	クリ	0.4	3	縄文時代晩期中葉	PLD-22226
4	SI01 炉跡	(シP)		クリ	0.2	1	縄文時代晩期中葉	
5	SK12	底面直上	47	クリ	0.3	4	縄文時代晩期後葉 ～弥生時代前期	PLD-22227
6	SK12	上		クスノキ科	0.7	1	縄文時代晩期後葉 ～弥生時代前期	
7	SK12	下		コナラ属クヌギ節	0.5	14	縄文時代晩期後葉 ～弥生時代前期	
9	SK06			クリ	0.4	4	時期不明	
10	SK19			クリ	0.4	2	弥生時代？	

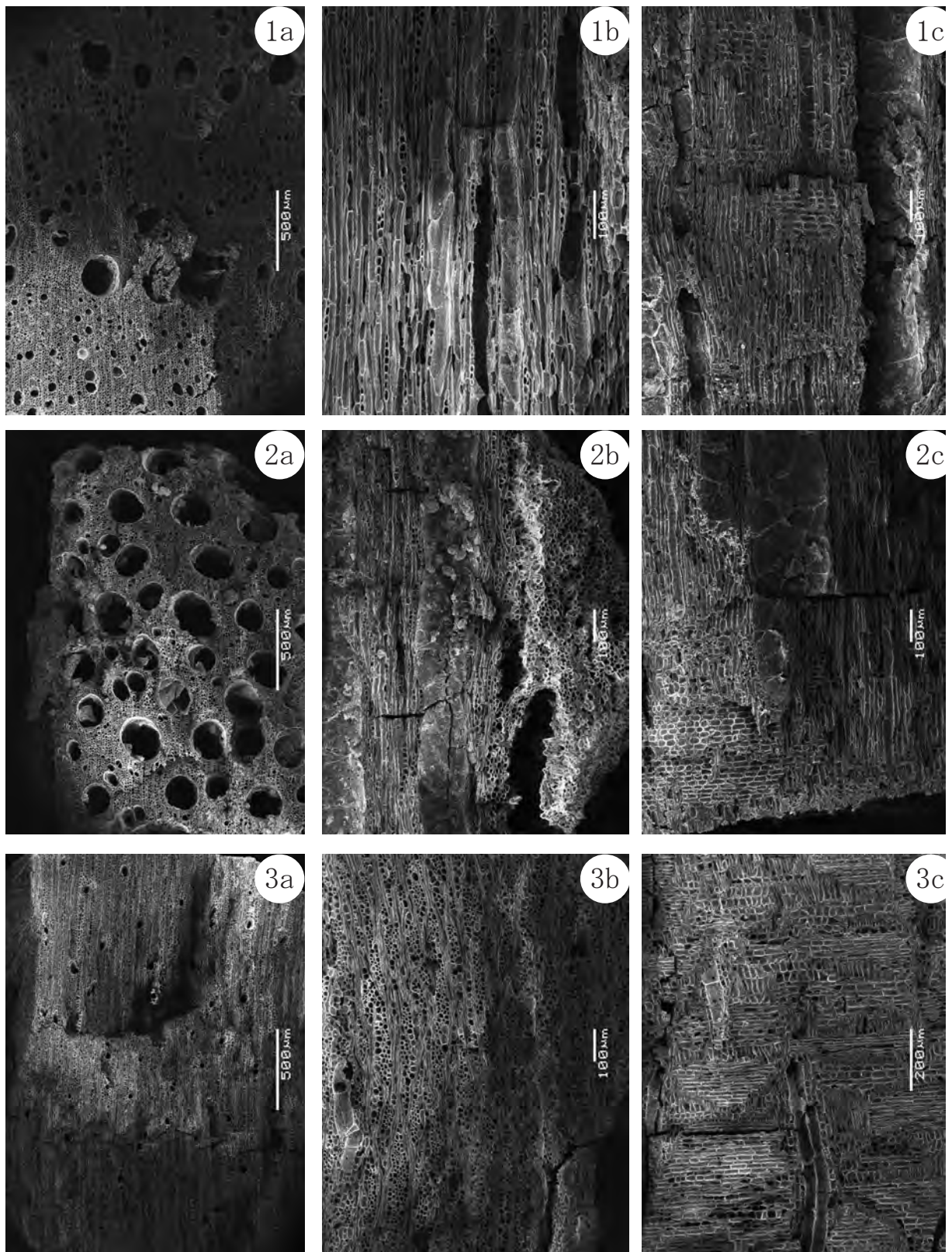
引用文献

平井信二 1996 『木の大本科—解説編—』 642p, 朝倉書房

伊東隆夫・佐野雄三・安部 久・内海泰弘・山口和穂 2011 『日本有用樹木誌』 238p, 青海社

植田弥生 2008 「長野原一本松遺跡住居跡出土炭化材の樹種同定」『長野原一本松遺跡（4）』：269-275, (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団

山田昌久 1993 「日本列島における木質遺物出土遺跡文献集成—用材から見た人間・植物関係史」 242p, 『植生史研究』 特別第1号



1a-1c.クリ(No.3)、2a-2c.コナラ属クヌギ節(No.7)、3a-3c.クスノキ科(No.6)
a:横断面、b:接線断面、c:放射断面

(2) 放射性炭素年代測定

パレオ・ラボ AMS 年代測定グループ

伊藤 茂・安昭炫・佐藤正教・廣田正史・山形秀樹・小林紘一

Zaur Lomtadze・Ineza Jorjoliani・菊地有希子

1. はじめに

群馬県吾妻郡長野原町に位置する坪井遺跡（8 次）より検出された試料について、加速器質量分析法（AMS 法）による放射性炭素年代測定を行った。なお、炭化材試料については、同一試料を用いて樹種同定も行われている（炭化材樹種同定の項参照）。

2. 試料と方法

測定試料の情報、調製データは第 6 表のとおりである。

試料は、SI01 の炉跡と思われる場所から出土した炭化材（PLD-22226）、SK12 の炉から出土した炭化材（PLD-22227）、同じく SK12 から出土した筒形土器の外面に付着していた炭化物（PLD-22228）の、計 3 点である。SI01 の炭化材は最終形成年輪が残っており、SK12 の炭化材は最終形成年輪を欠くものの、樹皮に近い部分が残る試料である。

試料は調製後、加速器質量分析計（パレオ・ラボ、コンパクト AMS：NEC 製 1.5SDH）を用いて測定した。得られた ^{14}C 濃度について同位体分別効果の補正を行った後、 ^{14}C 年代、暦年代を算出した。

第 6 表 測定試料および処理

測定番号	遺跡データ	試料データ	前処理
PLD-22226	遺構：SI01 位置：炉跡か 遺物 No. 46 試料 No. 3	種類：炭化材（クリ） 試料の性状：最終形成年輪 採取位置：最終形成年輪 -2 年輪 状態：dry	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄（塩：1.2N, 水酸化ナトリウム：1.0N, 塩酸：1.2N）
PLD-22227	遺構：SK12 位置：底面直上 遺物 No. 47 試料 No. 5	種類：炭化材（クリ） 試料の性状：最終形成年輪以外 樹皮に近い部分 採取位置：最外 -5 年輪 状態：dry	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2N, 水酸化ナトリウム：1.0N, 塩酸：1.2N）
PLD-22228	遺構：SK12 試料 No. 8	種類：土器付着物（煤類） 器種：筒形土器 部位：外面 状態：dry	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2N, 水酸化ナトリウム：1.0N, 塩酸：1.2N）

3. 結果

第 7 表に、同位体分別効果の補正に用いる炭素同位体比（ $\delta^{13}\text{C}$ ）、同位体分別効果の補正を行って暦年較正に用いた年代値と較正によって得られた年代範囲、慣用に従って年代値と誤差を丸めて表示した ^{14}C 年代を、第 30 図に暦年較正結果をそれぞれ示す。暦年較正に用いた年代値は下 1 桁を丸めていない値であり、今後暦年較正曲線が更新された際にこの年代値を用いて暦年較正を行うために記載した。

^{14}C 年代は AD1950 年を基点にして何年前かを示した年代である。 ^{14}C 年代（yrBP）の算出には、 ^{14}C の半減期として Libby の半減期 5568 年を使用した。また、付記した ^{14}C 年代誤差（ $\pm 1\sigma$ ）は、測定の統計誤差、標準偏差等に基づいて算出され、試料の ^{14}C 年代がその ^{14}C 年代誤差内に入る確率が 68.2%であることを示す。

なお、暦年較正の詳細は以下のとおりである。

第7表 放射性炭素年代測定および暦年校正の結果

測定番号	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	暦年校正用年代 (yrBP $\pm 1\sigma$)	^{14}C 年代 (yrBP $\pm 1\sigma$)	^{14}C 年代を暦年代に校正した年代範囲	
				1 σ 暦年代範囲	2 σ 暦年代範囲
PLD-22226 SI01 試料 No. 3	-25.44 ± 0.18	2774 ± 21	2775 ± 20	974BC (14.8%) 957BC 941BC (50.4%) 896BC 866BC (3.0%) 860BC	997BC (2.3%) 987BC 980BC (93.1%) 844BC
PLD-22227 SK12 試料 No. 5	-24.08 ± 0.15	2400 ± 21	2400 ± 20	508BC (54.3%) 439BC 420BC (13.9%) 405BC	702BC (0.9%) 696BC 538BC (94.5%) 400BC
PLD-22228 SK12 試料 No. 8	-26.54 ± 0.13	2233 ± 20	2235 ± 20	370BC (13.8%) 354BC 291BC (54.4%) 231BC	385BC (22.5%) 348BC 318BC (72.9%) 207BC

暦年校正とは、大気中の ^{14}C 濃度が一定で半減期が 5568 年として算出された ^{14}C 年代に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の ^{14}C 濃度の変動、および半減期の違い (^{14}C の半減期 5730 ± 40 年) を校正して、より実際の年代値に近いものを算出することである。

^{14}C 年代の暦年校正には OxCal4.1 (校正曲線データ: IntCal09) を使用した。なお、1 σ 暦年代範囲は、OxCal の確率法を使用して算出された ^{14}C 年代誤差に相当する 68.2% 信頼限界の暦年代範囲であり、同様に 2 σ 暦年代範囲は 95.4% 信頼限界の暦年代範囲である。カッコ内の百分率の値は、その範囲内に暦年代が入る確率を意味する。グラフ中の縦軸上の曲線は ^{14}C 年代の確率分布を示し、二重曲線は暦年校正曲線を示す。

4. 考察

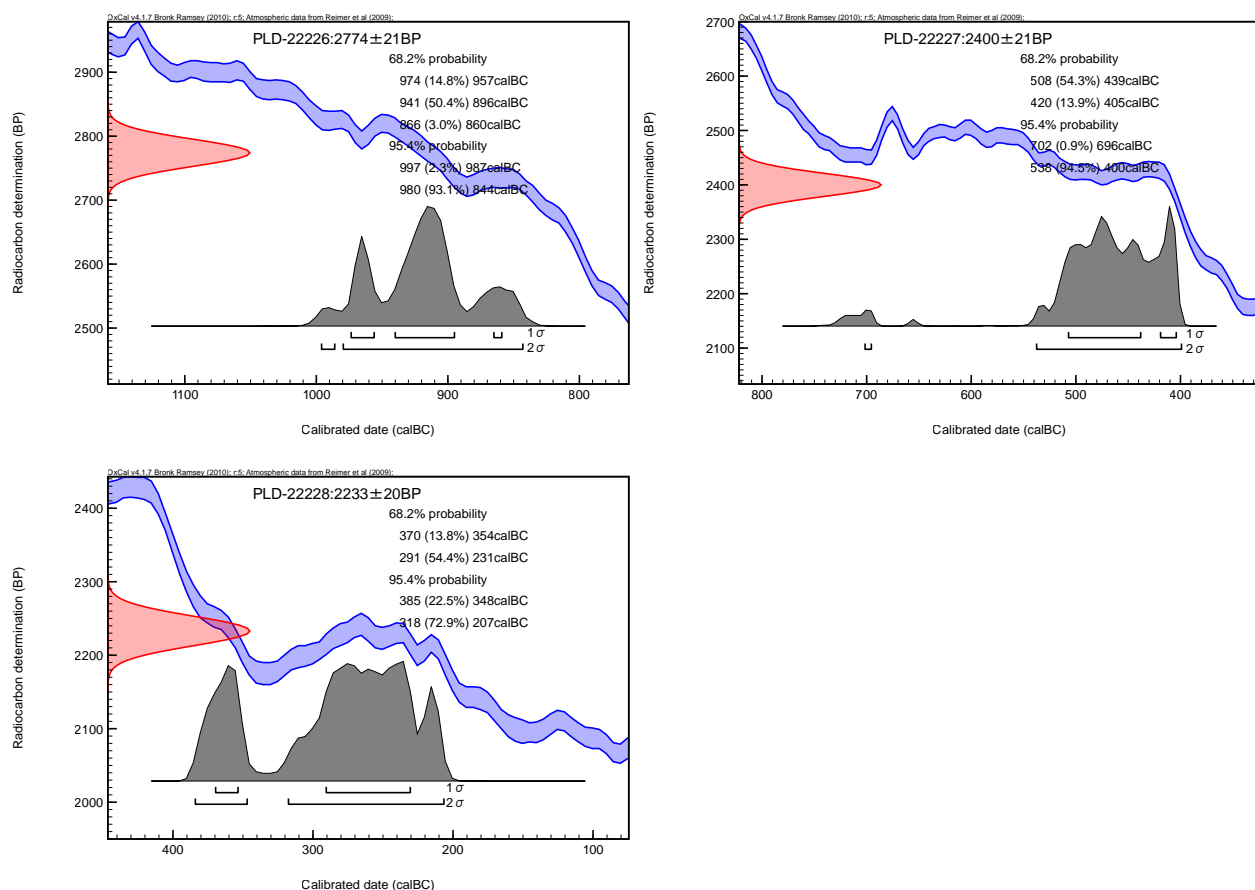
各試料の暦年校正結果のうち、2 σ 暦年代範囲 (95.4% の確率) に注目し、結果を整理する。なお、縄文時代の暦年代については小林 (2008) による縄文土器編年と暦年代の対応関係を、弥生時代の暦年代については小林 (2009) によるまとめを参照した。

SI01 出土の炭化材 (PLD-22226) は、997-987 cal BC (2.3%) および 980-844 cal BC (93.1%) の暦年代範囲を示した。これは、縄文時代晩期中葉に相当する。

SK12 の炉から出土した炭化材 (PLD-22227) は、702-696 cal BC (0.9%) および 538-400 cal BC (94.5%) の暦年代範囲を示した。これは、縄文時代晩期後葉～弥生時代前期に相当する。また、同じ SK12 から出土した筒形土器の外表面付着炭化物 (PLD-22228) は、385B-348 cal BC (22.5%) および 318-207 cal BC (72.9%) の暦年代範囲を示した。これは、弥生時代前期～中期に相当する。

参考文献

- Bronk Ramsey, C. 2009 Bayesian Analysis of Radiocarbon dates. Radiocarbon, 51(1), 337-360.
- 小林謙一 2008 「縄文時代の暦年代」小杉 康・谷口康浩・西田泰民・水ノ江和同・矢野健一編『縄文時代の考古学2 歴史のものさし』: 257-269, 同成社
- 小林謙一 2009 「近畿地方以東の地域への拡散」西本豊弘編『新弥生時代のはじまり第4巻 弥生農耕のはじまりとその年代』: 55-82, 雄山閣
- 中村俊夫 2000 「放射性炭素年代測定法の基礎」日本先史時代の ^{14}C 年代編集委員会編『日本先史時代の ^{14}C 年代』: 3-20, 日本第四紀学会
- Reimer, P.J., Baillie, M.G.L., Bard, E., Bayliss, A., Beck, J.W., Blackwell, P.G., Bronk Ramsey, C., Buck, C.E., Burr, G.S., Edwards, R.L., Friedrich, M., Grootes, P.M., Guilderson, T.P., Hajdas, I., Heaton, T.J., Hogg, A.G., Hughen, K.A., Kaiser, K.F., Kromer, B., McCormac, F.G., Manning, S.W., Reimer, R.W., Richards, D.A., Southon, J.R., Talamo, S., Turney, C.S.M., van der Plicht, J. and Weyhenmeyer C.E. 2009 IntCal09 and Marine09 Radiocarbon Age Calibration Curves, 0-50,000 Years cal BP. Radiocarbon, 51, 1111-1150.



第30図 遺構外出土遺物実測図 1

(3) 土器の種実圧痕の同定

佐々木由香・米田恭子（パレオ・ラボ）

1 はじめに

群馬県長野原町に位置する坪井遺跡は、吾妻川の左岸段丘上に立地する縄文時代から中近世までの複合遺跡である。弥生時代中期中葉の土器には種実の圧痕が確認された。ここでは種実圧痕のレプリカを採取して種実の同定を行なった。

2 資料と方法

資料は、SK12 から出土した弥生時代中期中葉の土器 6 点である。目視および拡大鏡で種実らしい形状の圧痕を 15 カ所抽出した。レプリカの採取方法は、圧痕内を筆と流水で水洗し、乾燥条件下でブロアーを用いて付着物を除去した。その後、実体顕微鏡下で観察し、作業前の記録として全体と圧痕部分を撮影した。レプリカ法は、丑野・田中（1991）等を参考にして以下の手順で行った。資料の保護のため、パラロイド B72 の 5% アセトン溶液を離型材にして土器に含浸させ、印象材に用いるシリコン樹脂（JM シリコン レギュラータイプ）を医療用注射器に入れ、圧痕部分に充填してレプリカを作製した。このレプリカを実体顕微鏡と走査型電子顕微鏡（KEYENCE 社製 VE-9800）で観察および写真撮影を行った。なお、レプリカは（株）パレオ・ラボ、土器は長野原町教育委員会に保管されている。

3 結果

第8表 坪井遺跡出土土器圧痕の同定結果

試料No.	遺構名	挿図 No.	圧痕位置	分類群	部 位	
1	SK12	第19図5	外面	アワ	有ふ果	内穎側
2			外面	キビ	有ふ果	内穎側
3			外面	アワ	有ふ果	外穎側
4			外面	アワ	有ふ果	内穎側
5			外面	種実ではない		
6			外面	種実ではない		
7			外面	アワ	有ふ果	内穎側
8			外面	種実ではない		
9			内面	種実ではない		
10		第19図3	内面	種実ではない		
11		第20図30	内面	種実ではない		
12		第20図29	断面	種実ではない		
13		第20図36	断面	不明	種実	
14		第20図35	内面	種実ではない		
15			外面	種実ではない		

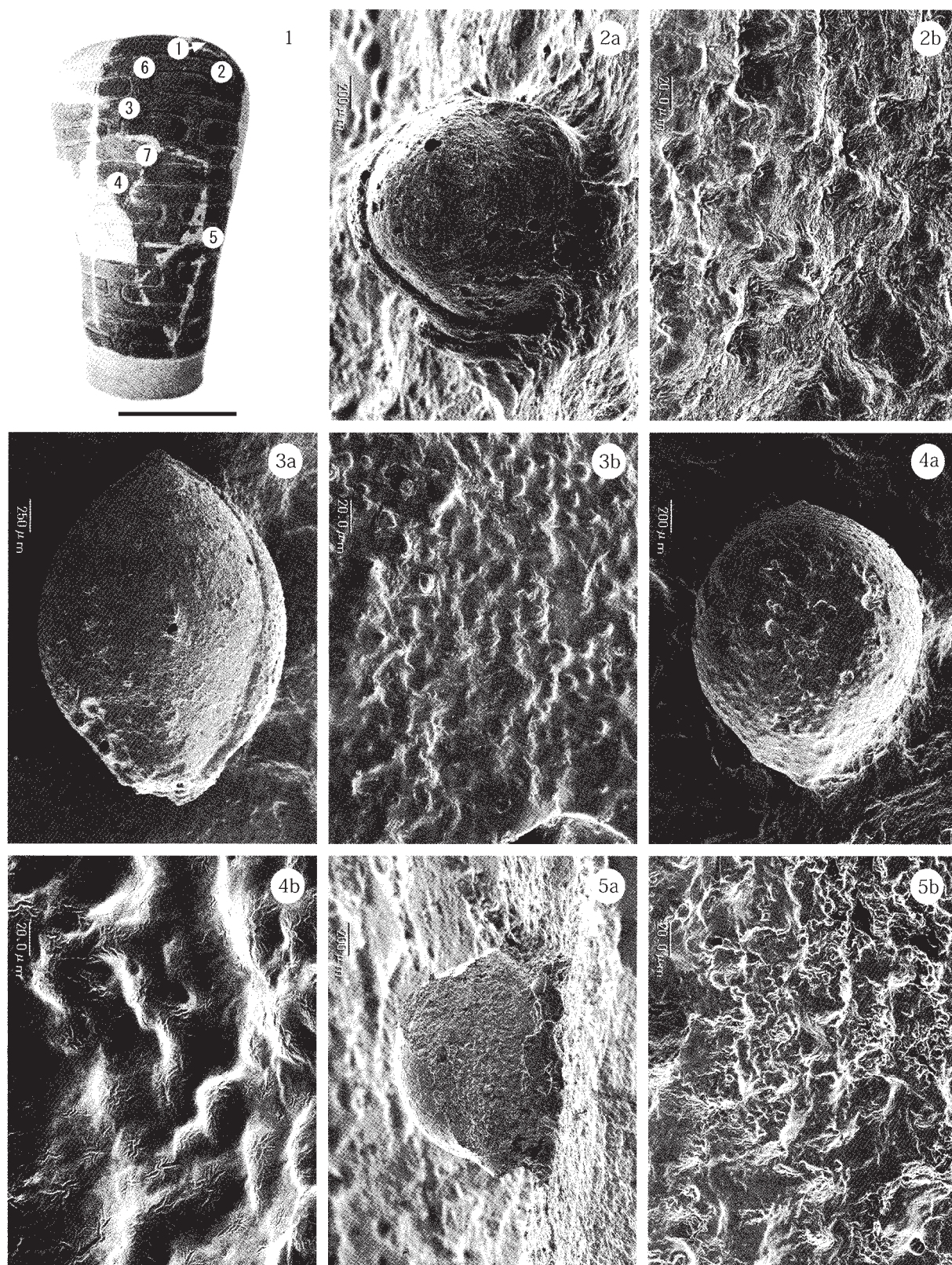
採取したレプリカを同定した結果、第19図5の筒形土器からアワ有ふ果が4点、キビの有ふ果が1点、第20図36の土器から不明種実1点が得られた（第8表，第31図）。記載は紙面の都合上省略するが、同定根拠は佐々木ほか（2010）と同様である。

4 考察

レプリカ法による土器種実圧痕の同定を行った結果、2点から6カ所の種実圧痕が得られた。弥生時代中期中葉の筒形土器外面に付着していた圧痕は、アワとキビの有ふ果であった。土器づくりの際に粃が付近にあり偶発的に混ざったか、意図的に混和した可能性がある。圧痕の形状を観察すると、圧痕がオーバーハングしており、土器を成形後に有ふ果を押し付けたものではないと考えられる。

引用文献

- 佐々木由香 米田恭子 那須浩郎 2010 レプリカ法による土器種実圧痕の同定」昭和女子大学人間文化学部歴史文化学科中屋敷遺跡発掘調査団編『中屋敷遺跡発掘調査報告書Ⅱ』 43-56, 昭和女子大学人間文化学部歴史学科。
- 丑野 毅 田川裕美 1991「レプリカ法による土器圧痕の観察」『考古学と自然科学』24, 13-36. 日本文化財科学会。



1. 実測 No.1 の土器、2. アワ有ふ果内穎側 (No.1)、3. キビ有ふ果内穎側 (No.2)、4. アワ有ふ果外穎側 (No.3)、5. アワ有ふ果内穎側 (No.7)
a: 種実全体の走査型電子顕微鏡写真、b: 種実拡大の走査型電子顕微鏡写真
土器のスケールバー: 10cm、土器写真内番号は種実圧痕位置を示す

第31図 坪井遺跡出土の種実圧痕

VI まとめ

今回の調査は店舗兼用住宅建設に先立つもので、550㎡の調査面積であった。期間的に限りのある調査であったが、縄文時代早期前半土坑2基・後期前葉土坑3基、弥生時代中期前半竪穴式住居跡1軒・土坑5基、平安時代陥し穴3基・掘立柱建物跡1棟を検出することができた。特に弥生時代中期前半の遺構は全町的にも微増はしているものの、まとまった形での遺物の出土はほとんど見られていない状況で今回の調査成果として特筆すべき発見である。

全体的に調査区北側は削平をうけており、地山の関東ローム層は調査区北側で表土下15cm、調査区中央で表土下30～40cm、調査区南西側では谷になっており表土下150cmで確認された。台地の縁辺という立地で、傾斜変換点付近で遺構が集中して分布していた。

縄文時代早期前半の表裏縄文・撚糸文土器は土坑2基(SK04・05)を中心に付近に疎らに分布していた。また弥生時代の住居跡(SI01)は当該期包含層の上に構築されていたようである。この時期は遺構が検出されている中では現時点で長野原町で最も古い段階のものである。その他に後期前葉の土坑が3基(SK01・11・17)検出された。

弥生時代中期前半の遺構で注目されるのが12号土坑(SK12)であろう。土坑から300点を超える土器片・石器(剥片が主体)が出土しており、他時期の混入が一切認められなかった。遺物の土坑内での分布状況や接合関係も把握され、複数個体の復元土器を報告することができた。ただし、本来ならば周辺地域の土器との比較等の検討が必要であったが紙幅と期間に限りがあり、事実記載での所見に留まった。神保富士塚式土器の一群の下限と栗林1式土器の上限に係わる難しい問題を含んでおり⁽¹⁾、改めて検討したいと考えている。本地域における中期中葉と中期後葉の接点に係わる一括資料として石器とともに貴重な発見であることは確かであろう。また竪穴式住居跡(SI01)は調査段階では明確に住居跡と判断する要素が見つからなかったが、遺物の出土状況やピットの配列状況、炉跡の存在から遺物集中箇所ではなく竪穴式住居跡と判断した。ただ遺構の掘り込み面や床面などを明確にすることができなかったことは残念である。縄文時代早期前半土器や石器に混じって弥生土器が数点出土していることから、弥生時代中期初頭に帰属する遺構と判断した。

平安時代の遺構とした陥穴3基(SK07・SK13・SK14)と掘立柱建物跡の柱穴(SK15)は先述した傾斜変換点付近に構築されており、流れ込み遺物以外は認められていないがほぼ同時期のものと考えられよう。

註

(1) 石川日出志氏(明治大学)と大木紳一郎氏(公益法人群馬県埋蔵文化財調査事業団)の両氏にはご多忙の中、図面と写真で土器群全体の印象をご教示いただいた。その際石川氏からは「栗林1式」との判断をいただいたが、筆者の力不足で満足のいく報告ができなかったことをここでお詫び申し上げる。

第3章 試掘および立会調査

a. 小滝Ⅱ遺跡



所在地	ながのほらまちおおあざはねおおあざこたき 長野原町大字羽根尾字小滝 378-7
開発事業名	工場建て替え
調査期間	平成 23 年 6 月 6・7 日 (1・2 トレ) 8 月 2・3 日 (3・4 トレ)
開発総面積	1811m ²
調査面積	70m ²

第 32 図 調査地点位置図 (1/5,000)

立地と経過

対象地は長野原町の北部、吾妻川流域地帯に属し、吾妻川の左岸段丘上に位置する。標高は 667 m 位である。対象地は周知の包蔵地ではないが、天明泥流の到達範囲内であることから開発事業主と協議し、試掘調査を行うことになった。

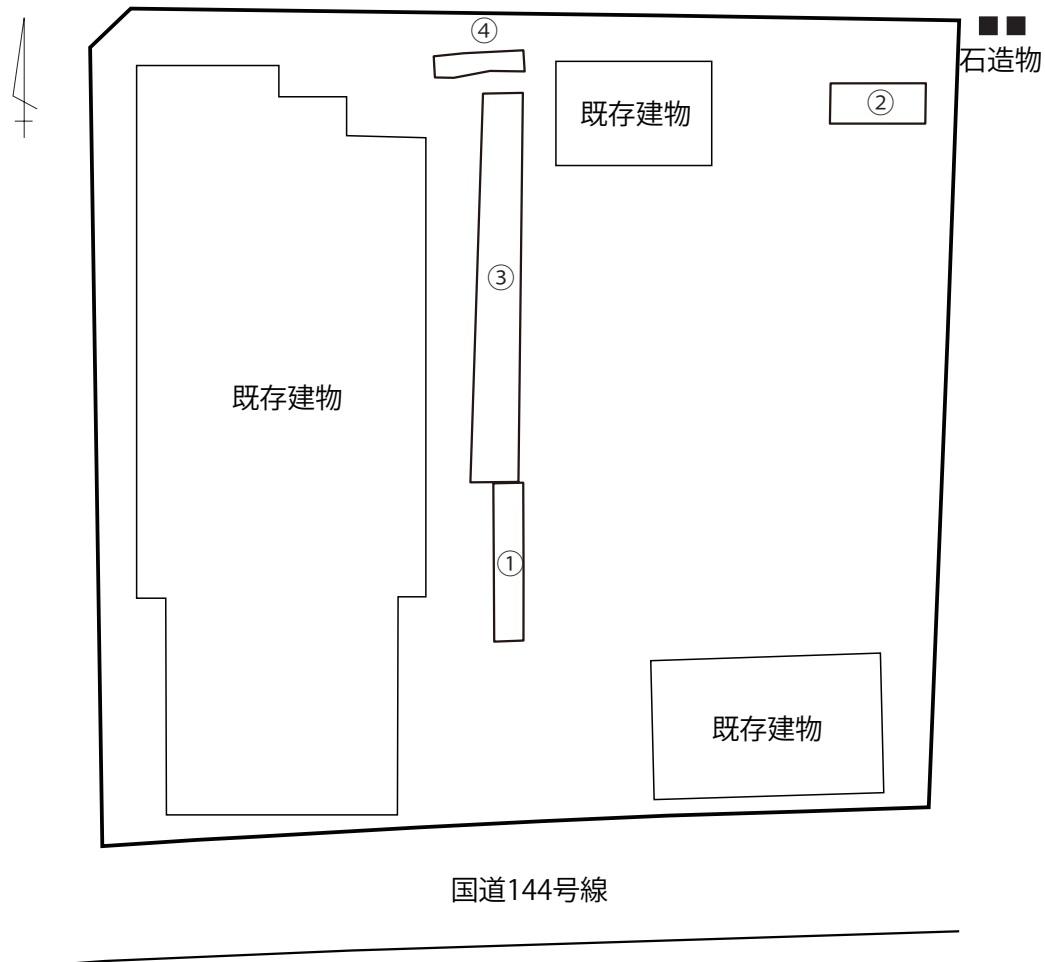
調査結果

修理工場建替予定箇所に試掘坑 (トレンチ) を 3 本、洗車場予定箇所に 1 本設定して、土層の堆積状況と遺構の有無を確認した。その結果、3 つのトレンチで天明泥流に埋没した畑跡が検出された。この泥流は 1783 年 (天明 3) に浅間火山の大爆発に伴って発生したもので、対象地も泥流到達範囲として把握されていたが、今回、国道より北側では初めての検出となった。調査は工場営業中 (1・2 トレ) と解体後 (3・4 トレ) の 2 度に分けて実施された。各トレンチ内にサブトレを設定し、畝サクの形状や軽石の堆積状況を観察するとともに、畑面下の天明以前の遺構の有無を確認したが、遺構・遺物の検出には至らなかった。対象地全体に天明泥流に埋没した畑跡が広がっていること (ただし、既存工場箇所は解体後に湧水が確認され大部分が埋没谷上にあることが判明した)、地形的には北側から南側、西側から東側に緩傾斜していることが今回の調査で明らかとなったが、工事計画と照合してみると、独立基礎列の部分の記録保存で文化財保護的には支障なしと判断された。

なお、今回の試掘調査で対象地は文化財保護法第 95 条の規定により「小滝Ⅱ遺跡 (No. 220)」として遺跡台帳に登録し、従来の線路北側の「小滝遺跡 (No. 114)」を「小滝Ⅰ遺跡」と名称変更した。

(1) 各トレンチの所見

1 トレンチ:延長 8.0 m、幅 1.6 m。泥流厚 125cm～142cm。国道からの入り口付近に位置する。現地表面から 170cm～180cm で畑跡に達した。畝サクはトレンチに対して直交する方向に走っている状況で検出された。南端に攪乱を被っているが遺存状態は良好である。畝サクの走行状況から 1 枚の畑 (KT1 号畑) であると判断される。トレン



第 33 図 トレンチ配置図 (1/400)

第 9 表 小滝Ⅱ遺跡 畑計測値等一覧表

*面積単位は㎡。1 歩＝6 尺平方で算出。尺換算は曲尺：1 尺＝10/33 m を用いた。

トレンチ	単位畑名	単位畑			畝幅：m	相当尺寸
		面積	反・畝・歩	斜度		
1・3	KT1 畑	-7.02	・・・2	3	0.4	1.31
2	KT2 畑	-5.97	・・・2	3	0.4	1.31
3	KT3 畑	-11.47	・・・3	3	0.38	1.27
3	KT4 畑	-22.21	・・・7	3	0.38	1.27

平 坦 面						
平坦面	面積	形状	溝	窪み	形状	比高
—	—	—	—	—	—	—
—	—	—	—	—	—	—
—	—	—	—	—	—	—
—	—	—	—	—	—	—

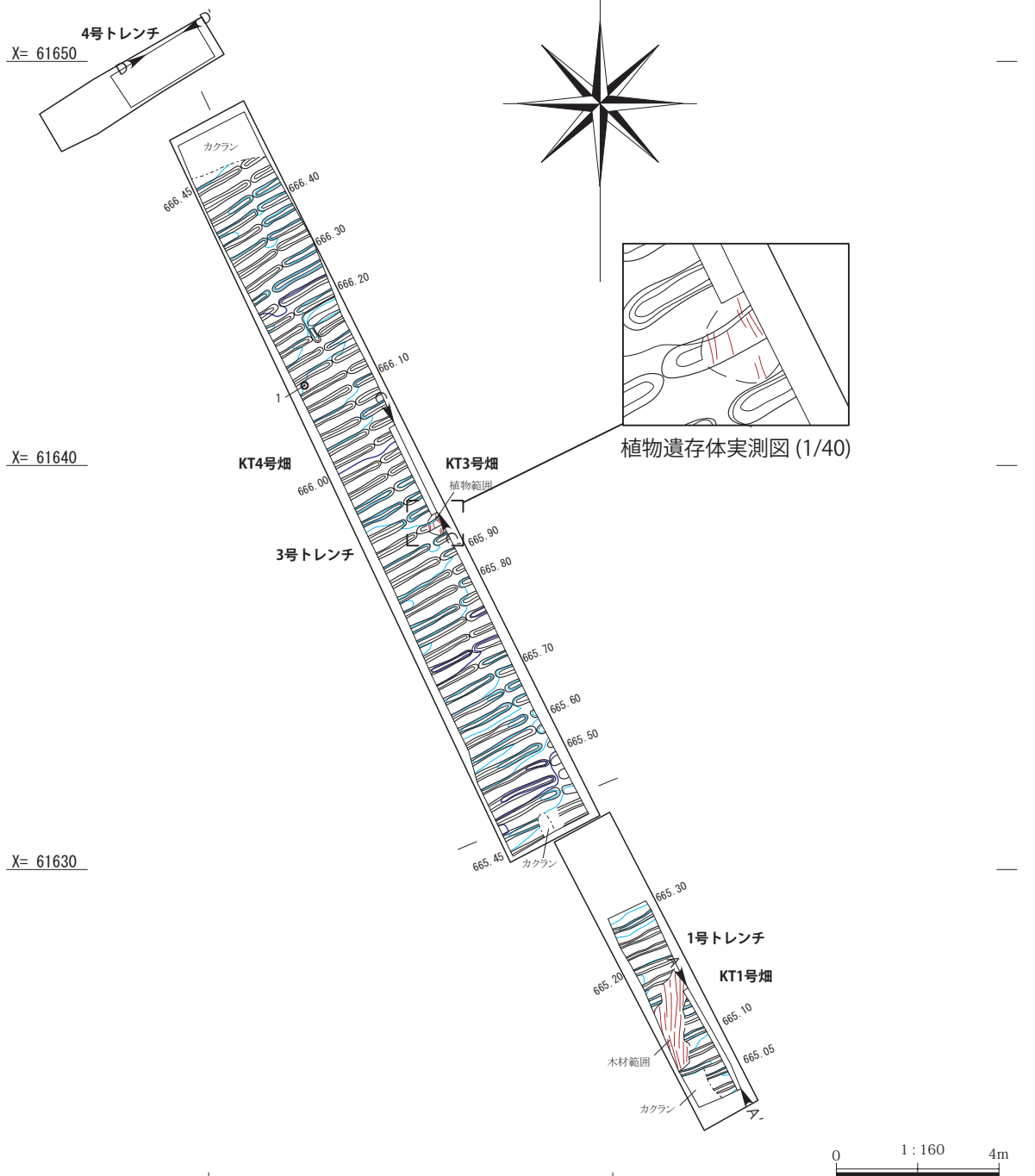
チ中央で南北方向に植物遺存体（木材痕）が畑面を覆うかたちで確認されている。トレンチ東壁南東端に設定したサブトレで畝サクの断面形状を観察すると、As-A 軽石降下前に一番ザクと二番ザク（土用の培土）が終了していた耕作状況であることが確認された（第 35 図 A A'）。この断面形状は関俊明氏の分類（関 2003）の 2 類に相当すると考えられる。

2 トレンチ：延長 5.0 m、幅 2.0 m。泥流厚 112cm～122cm。対象地の北東隅で洗車機東側に位置する。現地表面から 150cm～160cm で畑跡に達した。畝サクはトレンチに対

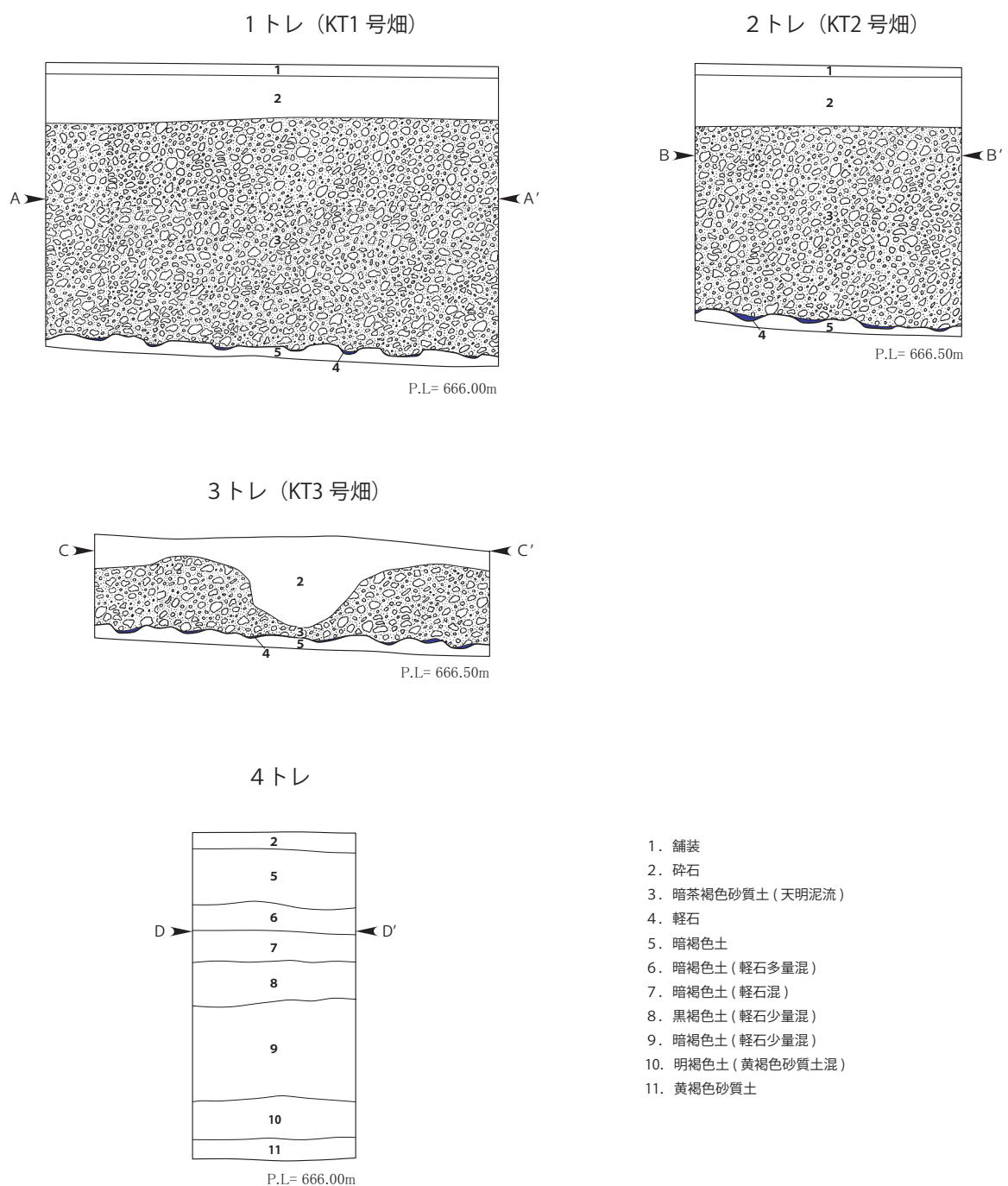
X= 61660

Y=-110000

Y=-109990

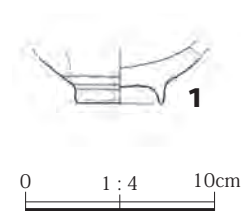


第 34 図 小滝 II 遺跡全体図 (1/160)



第 35 図 各トレンチ土層図 (1/40)

して若干斜交する方向に走っている状況で検出された。1トレ同様に遺存状態は良好である。畝サクの走行状況から1枚の畑(KT2号畑)であると判断される。トレンチ東壁に沿って設定したサブトレで畝サクの断面形状を観察すると、KT1号畑と同様にAs-A軽石降下前に一番ザクと二番ザク(土用の培土)が終了していた耕作状況であることが確認された(第35図BB')。



第 36 図 KT4号畑出土遺物実測図 (1/4)

3 トレンチ：延長 19.8 m、幅 2.5 m。泥流厚 34cm～51cm。1 トレの北側延長に隣接して設定した。新工場の新設される独立基礎列にあたる。畝サクは 1 トレ同様、トレンチに対して直交する方向に走っている状況で検出された。トレンチ南側から北側へ緩やかな傾斜で上がっていき、トレンチ北端で畝サクは削平されて途切れていることが判明した。トレンチを通して畝サクに切れ目が認められ、東側 (KT3 号畑) と西側 (KT4 号畑) の畑に大きく分けることが可能である。さらにトレンチ南端には 2 条ほど切れ目がない畝サクが認められ、1 トレンチの KT1 号畑が続いているものと判断される。KT3 号畑はトレンチ北側で L 字状のサクが認められ、ここで単位畑が分かれる可能性があるが部分調査のため今回は 1 枚の畑として扱っておきたい。KT4 号畑では KT1 号畑と同様に畝サクの上面で植物遺存体 (作物痕?) が確認され、肥前系磁器碗の破片が出土している。トレンチ東壁に沿って設定したサブトレで畝サクの断面形状を観察すると、これもまた As-A 軽石降下前に一番ザクと二番ザク (土用の培土) が終了していた耕作状況であることが確認された (第 35 図 C C')。

4 トレンチ：延長 4.7 m、1.1 m。泥流は削平されている。対象地の北端、3 トレの北側延長に畑の西側への広がりを見るために設定したが、畑面が消失していたことから天明以前の遺構の有無を確認するため深掘りを実施した。その結果、通常の地山の関東ローム層ではなく、表土下 2 m ほどで黄褐色砂層が検出され、対象地内に沢跡があった可能性が高く、線路北側の沢の流路にあたっていたことが予想された (第 35 図 D D')。

各畑の計測値一覧を第 8 表に示した。その他、対象地北東側の隣接地に設置されている石造物 2 基は既存修理工場の建設時に泥流中から出土したものであることが聞き取りにより判明した。2 基ともに個人墓で、年号を見ると、1 つが享保 7 年 (1722)、もう一つは夫婦墓で明和 5 年 (1768)・安永 7 年 (1778) なのでいずれも天明以前の墓であることが判明した。

(2) 小滝Ⅱ遺跡出土植物圧痕の同定

佐々木由香・バンダリ スダルシャン (パレオ・ラボ)

1. はじめに

群馬県長野原町に位置する小滝Ⅱ遺跡では、天明 3 (1783) 年の噴火に伴う浅間山泥流により埋没した畠が検出された。ここでは、畠を覆うように検出された泥流堆積物中から見いだされた植物圧痕の同定を行い、埋没当時の植生について検討した。

2. 試料と方法

試料は、3 号トレンチの KT3 号畠を覆う泥流堆積物から採取された土壌 1 試料で、葉や作物と思われる植物の痕跡が付着している箇所がブロック状で取り上げられていた。同定および計数は、肉眼および実体顕微鏡下で行った。試料は、長野原町教育委員会に保

第 10 表 小滝Ⅱ遺跡から出土した植物圧痕

		位置 3号トレンチ
分類群	部位／遺構名	KT3号畠
クリ	葉 (圧痕)	(2)
括弧内は破片数		

管されている。

3. 結果

植物遺体を同定した結果、木本植物のクリの葉の圧痕が2破片分、同定された(第10表)。葉そのものは残存しておらず、圧痕が遺存していた。

以下に記載を行い、写真を示して同定の根拠とする。

(1) クリ *Castanea crenata* Siebold et Zucc. 葉 ブナ科葉は長楕円形で、先端が尖る形状を呈すが、先端部および基部は残存していない。いずれも葉表。側脈は平行に斜上する。縁には先端がのぎ状になる短い突起があり、先端付近まで葉肉組織がつく鋸歯がある。大きさは、P L 21-1a・1bの左側の葉の痕跡が残存長35.9mm、幅12.2mm、右側の葉の痕跡が残存長33.6mm、残存幅8.0mm。

4. 考察

天明3年の泥流堆積物からは、クリの生の葉の圧痕が2破片分、同定された。泥流により倒された畠周辺の樹木の葉と考えられ、畠の周辺にクリが生育していたと考えられる。クリは野生種であるが、果実が食用になるだけでなく、木材が建築材や土木用材などに有用な樹木のため、畠の周辺に植栽されていた可能性も考えられる。また同試料には、幅約7mmの双子葉植物の茎状の不明植物遺体の痕跡も多数あったが(P L 21-3a・3b)、植物遺体そのものは残存しておらず、同定ができなかった。

うえはらいちいせき
b. 上原 I 遺跡 III



所在地 ながのほらまちおおあざはやしあざうえはら
長野原町大字林字上原 1036 番 1
開発事業名 携帯電話基地局
調査期間 平成 23 年 8 月 30 日
開発総面積 9 m²
調査面積 9 m²

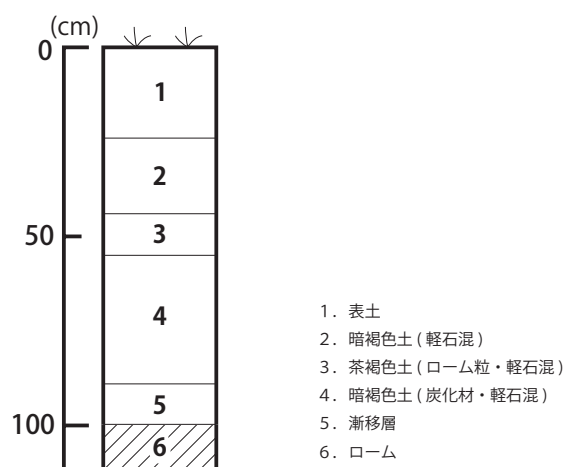
第 37 図 調査地点位置図 (1/5,000)

立地と経過

対象地は長野原町の北部、吾妻川流域地帯に属し、吾妻川左岸段丘上に位置する。標高は 638 m 位である。対象地は周知の包蔵地「上原 I 遺跡 (No. 41)」の範囲内であることから、開発事業主と協議し、確認調査を実施した。

調査結果

基地局建設予定箇所の 3 m × 3 m の表土を剥ぎ、土層の堆積状況と遺構の有無を確認した。その結果、遺構・遺物等は確認されなかったので、基地局建設に際して文化財保護的に支障はないと判断した。対象地は地境の法面に位置し、地山の関東ローム層まで法肩で 110 cm、法尻で 10 ~ 15 cm であった。堆積土層は全体で 6 層に分層できたが、第 4 層の暗褐色土は炭化材を含み、縄文時代の文化層と考えられる。



第 38 図 土層図 (1/20)

第10表 坪井VII遺跡出土遺物観察表

S01 出土遺物観察表

神図NO.	図版NO.	器種	法量 (器高・口径/底径) (cm)	特 徴 (形態・手法等)	焼成	胎土・材質等	色調 (外面/内面)	備考
9-1	10	弥生土器・蓋	<7.5>/<13.4>/<4.7>	浅鉢の可能性もあるが口唇部外面に煤の付着があるため蓋と判断した。外面は蓋口縁部にLR縄文帯を縦位に。その直下に2条の縦位沈線を通らしそこから舌状文(ノ字状文)を派生している。上下交互に派生しているため施底部付近は口縁部と同様に2条の縦位沈線が通っていたものと考えられる。モース外にはLR縄文を充填している。内面は口縁部付近は縦位ミガキで以下は縦位ケズリ。	良好	角四石・砂粒	明赤褐/にぶい赤褐	15%残存。
9-2	10	弥生土器・蓋	(4.0)/-//-	短頸蓋。口縁部は強く外反し、口唇部にLR縄文を施す。外面は頸部に幅広い縦線を3条以上巡らしている。施文部外及び内面は縦位ミガキ。	良好	角四石・石英	灰褐	破片資料(口頸部)
9-3	10	弥生土器・筒型	(1.9)/-//-	外面は縦位・斜位沈線。施文部はナデ。内面は縦位ミガキ。	良好	角四石・白色粒	にぶい黄褐/明褐	破片資料(体部)
9-4	10	弥生土器・壺	(2.3)/-//-	外面は縦位条痕。内面は縦位条痕。内面は縦位条痕頭着。	良好	角四石・白色粒	にぶい黄褐/黄褐	破片資料(体部)
9-5	10	弥生土器・壺	(1.5)/-//-	外面は斜位条痕ないし幅広い沈線。内面は縦位ナデ。	良好	角四石・黒色粒	にぶい黄褐/にぶい黄褐	破片資料(体部)
9-6	10	弥生土器・壺	(2.2)/-//-	外面は斜位ナデ。	良好	角四石・長石	にぶい黄褐/黒褐	破片資料(体部)
9-7	10	縄文土器・深鉢	(3.8)/-//-	外面は腰糸しを縦位施文。内面は縦位ナデ。	良好	長石	にぶい黄	破片資料(体部)
9-8	10	縄文土器・深鉢	(6.3)/-//-	外面は腰糸しを縦位施文。内面は横~斜位ナデ。	良好	角四石・長石	にぶい褐/褐	破片資料(体部)
9-9	10	縄文土器・深鉢	(2.8)/-//-	外面はLR縄文を傾位施文。内面は縦位ナデ。	良好	角四石・長石	にぶい褐/褐	破片資料(体部)
9-10	10	縄文土器・深鉢	(5.8)/-//-	外面はLR縄文を傾位施文。内面は縦位ナデ。	良好	角四石・長石	にぶい褐/褐	破片資料(体部)
9-11	10	縄文土器・深鉢	(4.5)/-//-	外面はRL縄文を傾位施文。内面は斜位ナデで煤の付着あり。	良好	角四石・長石	横/にぶい黄褐	破片資料(体部)
9-12	10	縄文土器・深鉢	(4.6)/-//-	外面はLR縄文を傾位施文。内面は斜位ナデ。	良好	角四石	にぶい黄褐/灰黄褐	破片資料(体部)
9-13	10	縄文土器・深鉢	(6.0)/-//-	外面はLR縄文を横~斜位施文。内面は縦位ナデ。	良好	角四石・雲母	横/灰褐	破片資料(体部)
9-14	10	縄文土器・深鉢	(2.8)/-//-	外面はLR縄文を横~斜位施文。内面は縦位ナデ。	良好	角四石・雲母	にぶい褐/灰褐	破片資料(体部)
9-15	10	縄文土器・深鉢	(2.3)/-//-	外面はLR縄文を傾位施文。内面は斜位ナデ。	良好		明褐/にぶい褐	破片資料(体部)
9-16	10	縄文土器・深鉢	(2.5)/-//-	外面はLR縄文を傾位施文。内面は縦位ナデ。	良好	角四石	にぶい褐	破片資料(体部)
9-17	10	縄文土器・深鉢	(3.8)/-//-	外面はLR縄文を傾位施文。内面は縦位ナデ。	良好	角四石	にぶい黄褐	破片資料(体部)
9-18	10	縄文土器・深鉢	(5.0)/-//-	外面はLR縄文を側方向に配することで縦羽状構成。内面は縦位ナデ。	良好	角四石	暗灰黄/にぶい黄	破片資料(体部)
9-19	10	剥片石器類・石鏃	長(2.5)/幅1.7/厚0.5	重量1.4g。凹底長形。表裏面に丁寧な調整刻線が施され、素材剥片段階の前縁面を残していない。表面は中央の膨らみが大きく、左右前縁は直線的である。先端欠損。	—	黒曜石	—	一部欠。
9-20	10	剥片石器類・スクレイパー	長(6.2)/幅2.9/厚0.9	重量17.3g。表面は自然面を残す縦長剥片を素材に用いている。下半部欠損。表面成形刻線は右後縁の調整刻線で、右側の鋭い凹縁を残し左側には連続的な調整刻線を出している。風化が著しい。	—	珪質頁岩	—	一部欠。
9-21	10	剥片石器類・スクレイパー	長(2.8)/幅2.7/厚0.8	重量5.5g。縦長剥片を素材に用いている。表面は成形刻線により鋭い稜をもち、周縁刻線はやや粗く全周している。裏面には連続的な調整刻線を施し刃部を出している。	—	流紋岩	—	50%残存。
9-22	10	剥片石器類・スクレイパー	長2.2/幅2.3/厚0.8	重量2.8g。表面は上縁から右側縁に刻線が施され、裏面は全面加工及び丁寧な連続する調整剥片が周縁に施されている。	—	珪質変質頁岩	—	完存。
9-23	11	剥片石器類・スクレイパー	長9.0/幅6.6/厚2.5	重量144.0g。大形の縦長剥片を素材に用いている。表面は成形刻線により鋭い稜をもち、周縁刻線はやや粗く全周している。裏面は平直刻線。表裏共に厚縁部が顕著である。	—	黒色頁岩	—	完存。
9-24	10	剥片石器類・スクレイパー	長2.9/幅(1.6)/厚0.5	重量2.9g。縦長剥片を素材に用い、表面周縁に丁寧な連続刻線を施し刃部を出している。	—	流紋岩	—	50%残存。
9-25	10	剥片石器類・スクレイパー	長1.9/幅2.3/厚0.8	重量3.4g。上部打面を残し、丁寧な連続刻線が表面を全周し刃部を出している。	—	流紋岩	—	完存。
9-26	10	剥片石器類・スクレイパー	長2.5/幅2.4/厚0.6	重量4.3g。表面は若干の成形刻線が施され、左右前縁には連続する丁寧な調整剥片を施し、取除する刃部を作出している。裏面にはやや粗い周縁刻線が施されている。	—	珪質変質頁岩	—	完存。
9-27	10	剥片石器類・二次加工のある剥片	長4.2/幅2.5/厚1.1	重量8.1g。左側縁と右側縁に急角度の刻線を施し、裏面右側縁には平直な調整刻線を施し、取除する刃部を作出している。	—	珪質頁岩	—	完存。
9-28	11	Retouched Flake	長2.6/幅3.6/厚0.9	重量6.6g。鋭い縁刃をもつ横長剥片である。表面右側縁及び裏面右から下縁には丁寧な連続調整刻線が施されている。	—	流紋岩	—	床直

SK01 出土遺物観察表

神図NO.	図版NO.	器種	法量 (器高・口径/底径) (cm)	特 徴 (形態・手法等)	焼成	胎土・材質等	色調 (外面/内面)	備考
12-1	11	縄文土器・深鉢	(4.7)/-//-	外面はナデ、内面は縦位ナデ。	良好	角四石・長石	にぶい黄褐/明褐	破片資料(体部)
12-2	11	剥片石器類・スクレイパー	長4.8/幅4.1/厚0.9	重量17.0g。縦長剥片を素材に用いている。左側縁から花輪部に自然面を残す。右側の鋭い縁刃に急角度の連続する調整刻線が施されている。	—	黒色頁岩	—	完存。

SK02 出土遺物観察表

神図NO.	図版NO.	器種	法量 (器高・口径/底径) (cm)	特 徴 (形態・手法等)	焼成	胎土・材質等	色調 (外面/内面)	備考
12-3	11	弥生土器・壺	(2.4)/-//-	外面は縦位沈線、斜位ナデ。内面はナデ。	良好	長石・砂礫	横	破片資料(体部)

SK03 出土遺物観察表

神図NO.	図版NO.	器種	法量 (器高・口径/底径) (cm)	特 徴 (形態・手法等)	焼成	胎土・材質等	色調 (外面/内面)	備考
12-4	11	礫石器・台石	長17.9/幅15.7/厚5.5	重量2680.0g。表裏面に磨り面を形成している。	—	変質安山岩	—	完存。

SK04 出土遺物観察表

神図NO	図版NO	器種	法量(器高・口径/底径)(cm)	特 徴 (形態・手法等)	焼成	胎土・材質等	色調 (外面/内面)	備考
12-5	12	縄文土器・流鉢	(8.9) / <21.1> / -	角頭状口縁。体部は若干丸く立ち上がり、口縁部は外反して開く。文様は口唇部・体部の2文様群構成である。口唇部には懸糸しを斜・横位、体部は同原体により横位に施されている。内面は口縁部が横位ナデ、体部が斜位ナデ。	良好	長石・石英・雲母	にぶい、黄褐/黒褐	口縁部～体部上半 25%残存。

SK05 出土遺物観察表

神図NO	図版NO	器種	法量(器高・口径/底径)(cm)	特 徴 (形態・手法等)	焼成	胎土・材質等	色調 (外面/内面)	備考
12-6	11	縄文土器・流鉢	(1.5) / - / -	円頭状口縁。緩やかに外反する。外面は懸糸しを縦位施文。内面は横位ナデ。	良好	角四石・石英	黒褐/灰黄褐	破片資料(口縁部)

SK11 出土遺物観察表

神図NO	図版NO	器種	法量(器高・口径/底径)(cm)	特 徴 (形態・手法等)	焼成	胎土・材質等	色調 (外面/内面)	備考
12-7	11	縄文土器・流鉢	(5.7) / - / -	口唇部内面。外面は有刻線。その下に横線を1条ずつ巡らせる。施文部外は横位ミガキ。内面は横位ミガキ。	良好	角四石・長石	にぶい、黄褐	破片資料(口縁部)
12-8	11	縄文土器・流鉢	(2.4) / - / -	外面はLR縄文を地文とし、へら状工具により重三角状に施文。内面は横位ナデ。	良好	角四石・長石	にぶい、黄褐/にぶい、黄褐	破片資料(体部)

SK12 出土遺物観察表

神図NO	図版NO	器種	法量(器高・口径/底径)(cm)	特 徴 (形態・手法等)	焼成	胎土・材質等	色調 (外面/内面)	備考
19-1	12	弥生土器・壺	(1.6) / <9.4> / -	緩やかに外反して開く口縁。口唇部に上方からの指頭圧痕を施す。外面は2条一単位の二又状工具により縦位条痕施文。内面は横位ナデ。	良好	角四石・長石	橙	口縁部 25%残存。
19-2	12	弥生土器・壺	(28.0) / - / -	細頸壺。頸部～胴上部外面には4～5本一単位の櫛状工具(櫛描条痕)により上から横位・斜位・縦羽状に施文。内面は横位ナデ。	良好	角四石・長石・石英	にぶい、黄褐/にぶい、黄	頸部・胴下半部 20%残存。
19-3	12	弥生土器・壺	(14.9) / - / -	胴部最大径 <22.4>cm。比較的肩の張る直の胴部。外面はLR縄文を斜位に施して地文とし、その上に5条一単位のへら描立線で「ハ」字状に施文。施文部外は縦～斜位のハケム調整後に丁寧なナデあるいはミガキ。内面は斜位ハケム。	良好	角四石・長石	黒褐/にぶい、黄褐	胴尖部 15%残存。
19-4	12	弥生土器・壺	(8.8) / - / -	胴部最大径 <25.8>cm。外面は横～斜位ハケム。内面は横位ハケム調整で上位はナデ消されている。	良好	角四石・長石	灰白/灰白	胴尖部 30%残存。
19-5	12	弥生土器・筒形	(20.0) <23.0> / <10.5> / <8.5>	底のくがはば全形が分かる資料である。底部から緩やかに外反しながら立ち上がり、口縁部は大きく内湾する。外面は口縁部に下端を比較的幅広いへら描立線で区画し、その下には磨消縄文により横位に同縦帯から左右交互に吉字文を派生させている。縄文部は赤彩が施されている。施文部外は横～斜位のハケム調整後に丁寧なナデあるいはミガキ。内面は斜位ハケム。	良好	長石・白色粒・赤色粒	黒褐・赤 / にぶい、黄褐	口縁部～胴部 45%残存。
19-6	13	弥生土器・筒形	(10.9) / <11.5> / -	破片は多いが接合しない。器形は5と同じで胴部は外反しながら立ち上がり、口縁部は大きく内湾する。外面は口縁部に下端をへら描立線で区画したLR縄文帯を巡らし、その下には磨消縄文により横位に同縦帯から左右交互に吉字文を派生させている。縄文部は赤彩が施されている。施文部外は横～斜位のハケム調整後に丁寧なナデあるいはミガキ。内面は斜位ハケム。	良好	角四石・砂礫	黒褐	口縁部～胴上半部 30%残存。
19-7	12	弥生土器・筒形	(7.6) / - / -	胴部最大径 <8.8>cm。若干膨らみのある胴下部から緩やかに折れて立ち上がり、外面はLR縄文を地文とし、胴上部には磨消縄文により工字状文を描出していると考えられる。内面は横～斜位ナデ調整後に横～斜位ミガキ。内外面とも横の付着が顕著あり。	良好	角四石・白色粒	にぶい、黄・暗灰黄 / 暗灰黄	胴部 20%残存。
20-8	12	弥生土器・壺	(1.9) / - / -	受口状を呈する。口唇部面取り。外面はLR縄文帯を巡らし、以下ナデ。内面は横位ナデ。外面に黒斑が認められる。	良好	黒色粒・砂礫	橙	破片資料(口縁部)
20-9	12	弥生土器・壺	(1.6) / - / -	受口状を呈する。外面はLR縄文帯を巡らす。内面は横位ナデ調整後に横位ミガキ。	良好	雲母	黄褐 / 明灰黄	破片資料(口縁部)
20-10	12	弥生土器・壺	(2.5) / - / -	素口縁。緩やかに外反しながら開く。外面は2条一単位の平行沈線あるいは3条以上の横位沈線で区画している。内面は横位ナデ調整後に斜位ミガキ。	良好	白色粒・砂礫	明黄褐	破片資料(口縁部)
19-11	12	弥生土器・壺	(2.1) / - / -	素口縁。緩やかに外反しながら開く。外面は二又状工具による縦位条痕を施文。内面は横位ナデ。	良好	長石・砂礫	にぶい、橙 / 橙	破片資料(口縁部)
19-12	12	弥生土器・壺	(3.8) / - / -	低い隆帯を1条巡らしている。LR縄文を地文とし、低い隆帯を挟んで上位にへら描横線を2条以上、下位に同波状文を1条以上施文。内面は横位ナデ。	良好	角四石・長石	にぶい、黄褐	破片資料(肩部)
20-13	12	弥生土器・壺	(1.9) / - / -	外面は幅広い条痕区画のLR縄文帯を1段以上巡らしている。内面はナデ調整後に横～斜位ミガキ。	良好	白色粒・砂礫	黒褐	破片資料(肩部)
20-14	12	弥生土器・壺	(3.2) / - / -	外面はLR縄文を横～斜位に施文。内面はナデ調整後に横～斜位ミガキ。	良好	角四石・白色粒	黒褐	破片資料(胴上部)
20-15	13	弥生土器・壺	(6.5) / - / -	外面は化驗区画のLR縄文帯を1段以上巡らしている。施文部外は横～斜位ナデ。内面は横位ナデ。	良好	片岩・雲母	明褐 / にぶい、黄褐	破片資料(胴尖部)
20-16	13	弥生土器・壺	(2.5) / - / -	外面は3条一単位の櫛描横線(櫛描条痕)を2段以上、その下に同波状文を1段以上巡らせている。内面は横位ナデ。	良好	長石	黄褐 / にぶい、黄	破片資料(頸部)
20-17	13	弥生土器・壺	(2.1) / - / -	外面は斜位条痕文。内面は横位ナデ。	良好	角四石・長石	橙	破片資料(胴部)
20-18	13	弥生土器・壺	(2.5) / - / -	外面は斜位条痕文。内面は横位ナデ。	良好	長石・小礫	にぶい、黄褐	破片資料(胴部)
20-19	13	弥生土器・壺	(2.3) / - / -	外面は斜位条痕文。内面は横位ナデ。	良好	角四石・長石・砂礫	明赤褐 / 橙	破片資料(口縁部)
20-20	13	弥生土器・甕	(3.3) / - / -	緩やかに外反しながら開く。口唇部は面取り後に二又状工具により磨消状の刻み目が施されている。外面は同工具による縦位条痕施文。外面に横の付着あり。	良好	長石	暗褐	破片資料(口縁部)
20-21	13	弥生土器・甕	(2.4) / - / -	直立気味に開く。口縁部は面取り後、口唇部は面取り後、口唇部は面取り後に二又状工具により磨消状の刻み目が施されている。外面は同工具による縦位条痕施文。内面は横位ナデ調整後に横位ミガキ。	良好	長石	暗灰黄	破片資料(口縁部)
19-22	13	弥生土器・甕	(1.3) / - / -	直立気味に開く。口縁部は面取り後、口唇部は面取り後に二又状工具により磨消状の刻み目が施されている。外面は同工具による縦位条痕施文。内面は横位ナデ調整後に横位ミガキ。	良好	白色粒	にぶい、黄褐	破片資料(口縁部)

神図NO	図版NO	器種	法量(器高/口径/底径)(cm)	特	微(形態・手法等)	焼成	胎土・材質等	色調(外面/内面)	備考
20-23	13	弥生土器・甕	(1.6)ノーノー	緩やかに外反しなから開く。口唇部に上方からの押圧を施している。外面はLR縄文を縦位施文。内面は縦位ナデ調整後に縦位ミガキ。		良好	白色粒	褐ノにぶい赤褐	破片資料(口縁部)
20-24	13	弥生土器・甕	(3.4)ノーノー	外面は短縄文と並し、幅広のヘラ描線線を2条以上巡らせている。内面は縦位ナデ調整後に縦位ミガキ。外面に煤の付着あり。		良好	長石・砂礫	明赤褐	破片資料(胴部)
20-25	13	弥生土器・甕	(4.0)ノーノー	外面は幅広沈線区間のLR縄文帯を2段以上巡らせている。内面は縦位ナデ。		良好	長石・砂礫	にぶい褐ノにぶい黄褐	破片資料(胴部)
20-26	13	弥生土器・甕	(5.7)ノーノー	外面はLR縄文帯を2段以上巡らせている。内面は縦位ナデ。外面に煤の付着あり。		良好	角四石・長石	黒褐ノ赤褐	破片資料(胴部)
20-27	13	弥生土器・甕	(1.8)ノーノー	外面は幅広沈線区間のLR縄文帯を1段以上巡らせている。内面は縦位ナデ。		良好	長石	褐ノ黄褐	破片資料(胴部)
20-28	13	弥生土器・甕	(2.5)ノーノー	外面は幅広沈線区間のLR縄文帯を1段以上巡らせている。内面は縦位ナデ。		良好	角四石	灰褐	破片資料(胴部)
20-29	13	弥生土器・甕	(3.9)ノーノー	外面はLR縄文帯を2段以上巡らせている。内面は縦位ナデ。		良好	角四石・長石	にぶい黄褐	破片資料(胴部)
20-30	13	弥生土器・甕	(1.8)ノーノー	外面は幅広のヘラ指込線とし、幅広のヘラ描線線を2段以上構成。内面は縦位ナデ。		良好	砂礫	黄褐ノにぶい黄褐	破片資料(胴部)
20-31	13	弥生土器・甕	(3.4)ノーノー	外面はLR縄文帯を2段以上巡らせている。内面は縦位ナデ。		良好	長石・砂礫	灰褐ノにぶい黄褐	破片資料(胴部)
20-32	13	弥生土器・甕	(1.1)ノーノー	外面は3条一単位の縮指縦線文(縮指条痕)を垂下させている。内面は縦位ミガキ。		良好	角四石・砂礫	黒褐ノ灰黄褐	破片資料(胴部)
20-33	13	弥生土器・甕	(2.2)ノーノー	外面は縦位条痕文(縮指条痕)。内面は縦位ナデで煤の付着が認められる。		良好	長石・砂礫	にぶい赤褐ノ黒褐	破片資料(胴部) 34・35は同一個体の可能性あり。
20-34	13	弥生土器・甕	(2.6)ノーノー	外面は3条一単位の縮指縦線文(縮指条痕)を重畳させている。内面は縦位ナデ調整後に縦位ミガキ。		良好	片岩・砂礫	灰褐	破片資料(胴部)
20-35	13	弥生土器・甕	(4.9)ノーノー	外面は3条一単位の縮指縦線文(縮指条痕)を重畳させている。内面は縦位ナデ調整後に縦位ミガキ。		良好	角四石・片岩・砂礫	明赤褐	破片資料(胴部)
20-36	13	弥生土器・甕	(3.7)ノーノー	外面は縦位条痕を施文。内面は縦位ナデ調整後に縦位ミガキ。		良好	長石	黒褐ノにぶい黄褐	破片資料(口縁部)
20-37	13	弥生土器・鉢	(1.5)ノーノー	緩やかに内湾しなから立ち上がる。外面はLR縄文帯を巡らす。内面は煤の付着あり。		良好	白色粒・砂礫	にぶい褐	破片資料(口縁部)
20-38	13	弥生土器・鉢	(1.9)ノーノー	緩やかに内湾しなから開く。口縁部外面はLR縄文帯を2段以上巡らす。上からヘラ描線線を1条巡らせている。内面は縦位ナデ。		良好	砂礫	明黄褐	破片資料(口縁部)
20-39	13	弥生土器・鉢	(2.7)ノーノー	緩やかに内湾しなから開く。口縁部外面にLR縄文帯を巡らせ、下縁をヘラ描線線で区画。その下にも同縦線で区画文を構成。施文部外及び内面は縦位ナデ調整後に縦位ミガキ。		良好	雲母	にぶい黄褐ノ明黄褐	破片資料(口縁部)
20-40	13	弥生土器・筒形	(3.0)ノーノー	直立外側に緩やかに内湾しなから開く。口縁部外面に赤彩を施したLR縄文帯を巡らせ、下縁をヘラ描線線で区画。その下にも同縦線のよる区画文でモチーヴを構成。内面は縦位ナデ調整後に縦位ミガキ。		良好	角四石	赤褐ノ黒褐ノ黒褐	破片資料(口縁部)
20-41	13	弥生土器・筒形	(4.3)ノーノー	外面は縮指縦線文により弧状(波状)文などを構成。内面は縦位ナデ調整後に縦位ミガキ。		良好	長石	にぶい褐	破片資料(胴部)
20-42	13	弥生土器・筒形	(2.3)ノーノー	器や鉢の可能性もある。外面はヘラ描線線により重四角文を構成。内面は縦位ナデ。		良好	角四石・石英	にぶい黄褐	破片資料(胴部)
20-43	13	弥生土器・筒形	(4.4)ノーノー	やや膨らみのある胴下部から括弧で緩やかに外反しなから立ち上がる。外面はヘラ描線線、以下縦位ナデ。内面は縦〜斜位ナデ。		良好	角四石・長石・石英	褐ノにぶい黄褐	破片資料(胴部)
20-44	13	弥生土器・筒形	(2.1)ノーノー	外面は縮指縦線文により工字状文を構成。内面は縦位ナデ調整後に縦位ミガキ。		良好	角四石	灰黄灰	破片資料(胴部)
20-45	13	弥生土器・筒形	(2.6)ノーノー	外面は縮指縦線文により工字状文を構成。内面は縦位ナデ調整後に縦位ミガキ。		良好	石英	黒褐	破片資料(胴部)
20-46	13	剥片石器類・石鏃	長 3.1/幅 1.9/厚 0.8	重量 3.8g。円柱形。表裏面共に全面に成形及び調整刻跡が施され、左右側縁はやや弧状で縦縁状を呈す。基部調整は粗く基部の欠損も考えられる。厚手と比較的大形である。		—	流紋岩	—	完存。
20-47	13	剥片石器類・石鏃	長 1.7/幅 1.1/厚 0.2	重量 0.5g。凸盾長形。表裏面共に素材剥片の周縁に調整刻跡が施され、基部調整は粗く基部の欠損も考えられる。厚手と比較的大形である。		—	珪質頁岩	—	完存。
20-48	14	剥片石器類・楔形石器	長 2.4/幅 2.5/厚 0.7	重量 4.8g。上・下面縁に若干の磨削状刻跡がみられる。加撃辺と対象物からの反作用辺は不明。		—	珪質頁岩	—	完存。
20-49	14	剥片石器類・楔形石器	長 3.1/幅 3.0/厚 0.6	重量 6.3g。上縁の刻跡は大きく、下縁の刻跡は僅かな両側刻跡がみられる。加撃辺と対象物からの反作用辺は不明。		—	黒色頁岩	—	完存。
20-50	13	剥片石器類・剥片	長 6.1/幅 5.6/厚 1.1	重量 35.6g。表面下部に自然面を残す縦長剥片である。比較的形の整った長くて鋭い縁辺をもち、周縁を刃部に使用したこととも考えられる。		—	珪質頁岩	—	完存。
20-51	13	剥片石器類・二次加工のある剥片	長 3.9/幅 3.4/厚 1.1	重量 10.3g。表面右側縁は石核附帯の作業面における刻跡と考えられる。裏面には若干の周縁刻跡が施され、鋭い縁辺をもつ下縁と共に刃部として使用されたと考えられる。		—	黒色頁岩	—	完存。
21-52	14	打製石斧類・石鏃	長 15.4/幅 8.9/厚 3.3	重量 512.0g。平たい形状。表面に広く自然面を残す大形の横長剥片を素材に用いている。丁寧な周縁調整成形及び表面上半部に柄装着用の周縁が施され、刃部よりやや内湾し基部を呈出している。刃口部は磨耗痕が顕著で、使用により剥落している。刃部は鋭利な刃で刃分を呈す。		—	細粒輝石安山岩	—	完存。
21-53	14	打製石斧類・石鏃	長 (13.5)/幅 8.0/厚 2.0	重量 334.0 g。平大形。大形の扁平平鏃を素材に用いている。左側縁は平坦で周縁調整が施された右側縁の下半部は欠損している。形態は長方形を呈し、両側刻跡が施された刃部は直ちに近い。裏面の広い磨耗面から研削利用に係る器用からの底用も考えられる。刃部は両刃方で刃分を呈す。		—	粗粒輝石安山岩	—	一部欠。
21-54	14	打製石斧類・石鏃	長 8.5/幅 5.2/厚 1.1	重量 42.3g。表面に粗い成形及び調整刻跡が施された横長剥片である。裏面の右側縁及び下縁には剥片剥離後の調整刻跡が施され、鋭い縁辺を刃部として使用したと考えられる。		—	細粒輝石安山岩	—	完存。

SK17 出土遺物観察表

神図NO	図版NO	器種	法量(器高/口径/底径)(cm)	特	微(形態・手法等)	焼成	胎土・材質等	色調(外面/内面)	備考
23-1	14	縄文土器・深鉢	(5.0)ノーノー	口唇部内屈。外面は断面三角の隆線を1条巡らす。内外面とも縦位ナデ調整後に縦位ミガキ。		良好	角四石・長石	にぶい黄褐	破片資料(口縁部)

SK18 出土遺物観察表

神図NO	図版NO	器種	法量(器高/口径/底径)(cm)	特	微(形態・手法等)	焼成	胎土・材質等	色調(外面/内面)	備考
23-2	14	弥生土器・甕	(2.7)ノーノー	外面は縦位ナデ。内面はナデ。		良好	角四石	黄褐ノにぶい黄褐	破片資料(底部)
23-3	14	弥生土器・甕	(1.6)ノーノー	外面は縦〜斜位条痕文。内面は縦位ナデ。		良好	長石・砂礫	黒ノ黒褐	破片資料(底部)
23-4	14	弥生土器・甕	(2.2)ノーノー	外面は斜位条痕文。内面はナデ。		良好	—	明褐	破片資料(底部)

SK19 出土遺物観察表

神図NO. NO.	図版 器種	法量(器高/口径/底径)(cm)	特 徴(形態・手法等)	焼成	胎土・材質等	色調(外面/内面)	備考
23-5	14	弥生土器・	外面はLR縄文帯で東の付着あり。内面は横位ナデ。	良好	砂藻	黒褐/灰黄褐	破片資料(体部)

遺構外出土遺物観察表

神図NO. NO.	図版 器種	法量(器高/口径/底径)(cm)	特 徴(形態・手法等)	焼成	胎土・材質等	色調(外面/内面)	備考
27-1	14	縄文土器・深鉢	口唇部肥厚。口縁部は強く外反して開く。口唇部・外面にはLR縄文を斜位に施している。内面は横位ナデ。	良好	角四石・長石	にぶい黄褐	破片資料(口縁部)
27-2	14	縄文土器・深鉢	角頭状口縁。口縁部は「く」字に外反して開く。外面はLR縄文を横位、斜位、口唇部・内面には横位に施している。内面は横位ナデ。	良好	角四石・石英・雲母	にぶい褐	破片資料(口縁部)
27-3	14	縄文土器・深鉢	角頭状口縁。口縁部は丸く外反して開く。口唇部・外面・内面はLR縄文を横位に施している。内面は横位ナデ調整後に横位ナデ。	良好	角四石	黒褐/灰黄褐	破片資料(口縁部)
27-4	14	縄文土器・深鉢	角頭状口縁。口縁部は丸く外反して開く。口唇部はLR縄文を横位、外面は斜〜横位、内面は横位に施している。	良好	角四石・長石・雲母	褐/灰褐	破片資料(口縁部)
27-5	14	縄文土器・深鉢	角頭状口縁。口縁部は緩やかに外反して開く。口唇部・外面・内面はLR縄文を横位に施している。	良好	角四石・長石・雲母	灰褐/黒褐	破片資料(口縁部)
27-6	14	縄文土器・深鉢	肩手。口縁部は緩やかに外反して開く。口唇部は燃糸を斜位、外面は横位、内面は横位に施している。	良好	長石・雲母	黒褐	破片資料(口縁部)
27-7	14	縄文土器・深鉢	角頭状口縁。口縁部は緩やかに外反して開く。外面はRL縄文を横〜斜位に施している。内面は横位ナデ。	良好	角四石・長石・雲母	黒褐/灰褐	破片資料(口縁部)
27-8	14	縄文土器・深鉢	外面はRL縄文を横位、斜〜横位に施している。内面は横位ナデ。	良好	角四石・長石・雲母	黒褐/灰黄褐	破片資料(口縁部)
27-9	15	縄文土器・深鉢	外面は燃糸Lを横位に施文。内面はナデ。	良好	長石・雲母	にぶい褐/褐灰	破片資料(底部)
27-10	15	縄文土器・深鉢	外面はLR縄文を横位施文。内面は横位ナデ。	良好	角四石	にぶい黄褐	破片資料(体部)
27-11	15	縄文土器・深鉢	外面は無筋Lを斜位施文。内面はナデで横付着。	良好	長石	にぶい黄褐/褐灰	破片資料(体部)
27-12	15	縄文土器・深鉢	外面はLR縄文を横位施文。内面は斜位ナデで横付着。	良好	長石	橙/にぶい黄褐	破片資料(体部)
27-13	15	縄文土器・深鉢	外面はLR縄文を斜位施文。内面は斜〜横位ナデ。	良好	角四石	黒褐	破片資料(体部)
27-14	15	縄文土器・深鉢	外面は隆帯区画内を矢羽根状沈線で充塞。内面は横位ナデ。	良好	角四石・長石	橙	破片資料(口縁部)
27-15	15	弥生土器・甕	口唇部面取り。口縁部は緩やかに外反して開く。外面は4条一単位位の櫛状工具(櫛筋条痕)により施文。施文部外及び内面は横位ミガキ。	良好	長石	にぶい黄褐/黒褐	破片資料(口縁部)
27-16	15	弥生土器・甕?	外面は横位沈線。内面は横位ナデ。	良好	長石	明黄褐	破片資料(体部)
27-17	15	弥生土器・甕	外面は4条一単位位の櫛状工具(櫛筋条痕)により波状文・横線文を施文。内面は横位ナデ。	良好	角四石・長石	橙	破片資料(体部)
27-18	15	弥生土器・甕	外面は横位の矢羽根状沈線で体付着あり。内面は横位ナデ。	良好	角四石・長石	黒褐/にぶい褐	破片資料(体部)
27-19	15	弥生土器・甕?	外面は横位の矢羽根状沈線が施されている。左口縁部は磨縁状を呈する。先端及び左返し部欠損。	良好	角四石・長石・石英	橙/にぶい黄褐	破片資料(体部)
27-20	15	弥生土器・甕?	外面は2〜3条の沈線で三角状区画内をLR縄文で充塞。内面は横位ナデ。	良好	角四石・長石・石英	にぶい黄褐	破片資料(体部)
27-21	15	須恵器・甕	外面はタタキ面が破らに現る自然釉付着。内面は横位ナデ。	還元還元 堅緻	白色粒・褐色粒	黒褐/褐灰	破片資料(体部)
27-22	15	剥片石器類・石鏃	重量0.5g。凹底長形。表面は全面に成形及び調整刻痕が施され、裏面は素材剥片段縁の剥離面を残し、調整加工が施されている。	—	黒曜石	—	80%残存。
27-23	15	剥片石器類・石鏃	重量0.4g。平基三角。表面は一部に素材剥片段縁の剥離面を残し、裏面は全面剥離が施されている。先端及び左返し部欠損。	—	チャート	—	80%残存。
27-24	15	剥片石器類・石鏃	重量0.6g。平基三角。表裏面共に周縁調整刻痕が施されている。左口縁部は磨縁状を呈する。先端及び左返し部欠損。	—	珪質頁岩	—	完存。
27-25	15	剥片石器類・スクレイパー	重量19.1g。比較的整った長くで鋭い縁辺をもつ縦長剥片である。上部には打面調整刻痕が施され、表面には広い自然面を残す。左右側縁及び先端部には丁寧な調整刻痕が施されている。	—	珪質頁岩	—	完存。
27-26	15	剥片石器類・スクレイパー	重量3.0g。縦長剥片を素材に用いている。表面左側縁に丁寧な連続調整刻痕を施し、やや鉤座状の刃部を作出している。	—	珪質燧岩	—	完存。
27-27	15	打製石斧類・スクレイパー	重量385.0g。大形の縦長剥片で、表面の成形刻痕は石移段縁の剥離面である。鋭い右側縁を残し右側縁辺に両面調整を施し刃部を作出している。右側縁は原料面が顕著である。	—	細粒輝石安山岩	—	完存。
28-28	16	打製石斧類・石鏃	重量652.0g。平大くさ形。大形の扁平縦長剥片を素材に用いている。上半部はやや粗い成形剥離が施され、柄袷着脱れ部を作出している。刃部は磨縁状が顕著で、縁辺の調整刻痕と使用による剥落が混在する。刃部は両面及び側面が顕著である。	—	粗粒輝石安山岩	—	完存。
28-29	16	礫石器・凹石+礫石	重量909.0g。不定形。表裏面共に複数の凹み及び磨面をもち、上下縁は鋭打痕が顕著である。	—	粗粒輝石安山岩	—	完存。
28-30	16	礫石器・凹石+礫石	重量11.3。幅9.5/厚5.9	—	変質安山岩	—	50%残存。
28-31	15	鉄製品・鉄ヤイ	重量34.0g。碗状鋒。	—	—	—	完存。
28-32	15	銅製品・銅銭	重量2.9g。宋銭「元祐通宝」。篆書体。初鑄年代は1086年。	—	—	—	完存。

第11表 小滝Ⅱ遺跡出土遺物観察表

KT4号畑出土遺物観察表

神図NO. NO.	図版 器種	法量(器高/口径/底径)(cm)	特 徴(形態・手法等)	焼成	胎土・材質等	色調(外面/内面)	備考
35-1	20	灰付・甕	(2.2)/—/<3.4>	堅緻	—	灰白色	胴下部〜部台15%残存。



1. 1区全景（南東から）



2. 2区全景（東から）



1. 2区西側近景（南から）



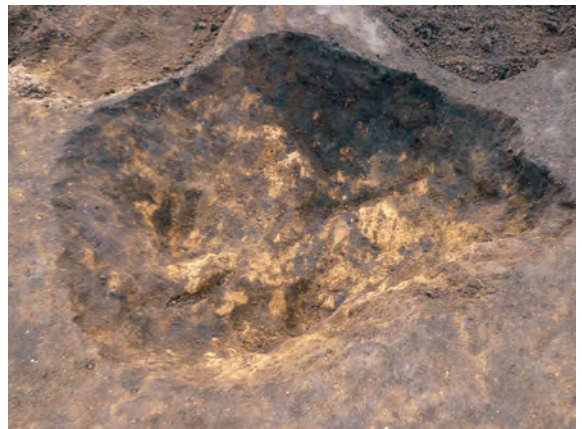
2. 3区全景（東から）



1. SI01（南から）



2. SI01 遺物出土状況（南西から）



3. SI01 炉跡（南から）



4. SI01 炉跡半截（南から）



5. SI01 炉跡検出状況（南西から）



1. SK01 (南から)



2. SK01 半截 (南から)



3. SK02 (南から)



4. SK02 半截 (南から)



5. SK03 (南から)



6. SK03 半截 (南から)



7. SK04 (東から)



8. SK04 半截 (東から)



1. SK05 (南から)



2. SK05 半截 (南から)



3. SK06 (南から)



4. SK06 半截 (南から)



5. SK08 (南から)



6. SK08 半截 (南から)



7. SK09 (南から)



8. SK09 半截 (南から)



1. SK10 (東から)



2. SK10 半截 (東から)



3. SK11 (東から)



4. SK11 半截 (東から)



5. SK12 (南から)



6. SK12 半截 (南から)



7. SK12 遺物出土状況 1 (南から)



8. SK12 遺物出土状況 2 (南から)



1. SK12 遺物出土状況 3 (南東から)



2. SK12 遺物出土状況 4 (南から)



3. SK12 遺物出土状況 5 (南から)



4. SK15 (南から)



5. SK15 半截 (西から)



6. SK16 (東から)



7. SK16 半截 (東から)



8. SK17 (西から)



1. SK17 半截 (西から)



2. SK18 (南から)



3. SK18 半截 (南から)



4. SK19 (東から)



5. SK19 半截 (東から)



6. SK07 (東から)



7. SK07 南北セクション (西から)



8. SK07 東西セクション (北から)



1. SK13（北東から）



2. SK13 セクション（東から）



3. SK14（東から）



4. SK13・14（南から）



5. SK14 南北セクション（東から）



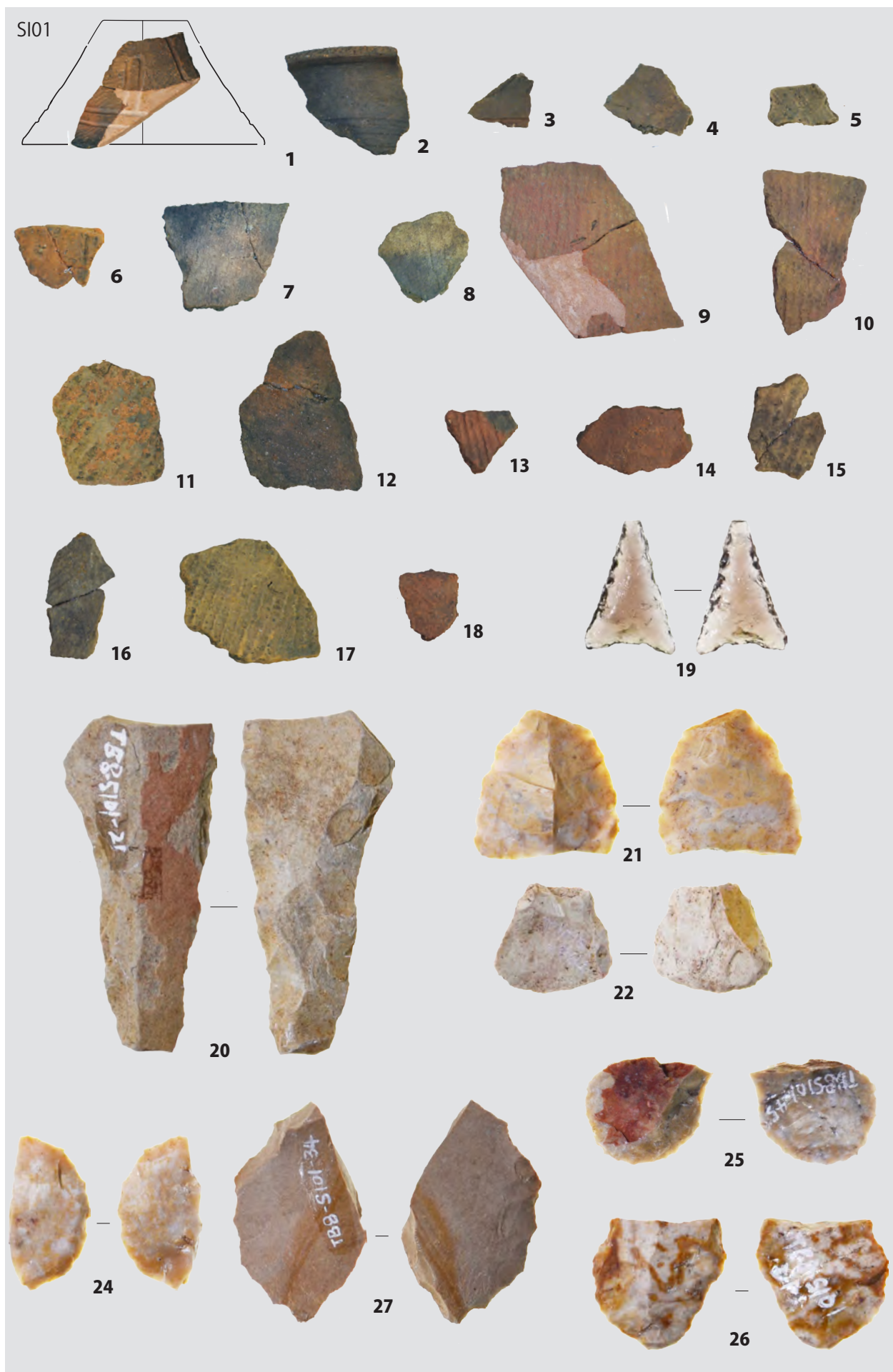
6. SK14 東西セクション（南から）

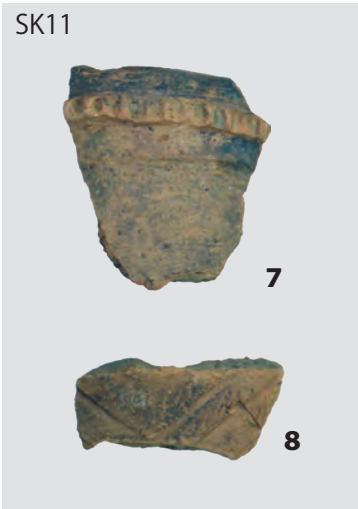
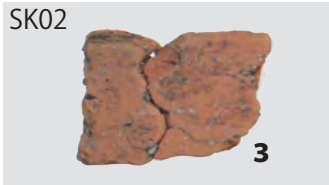


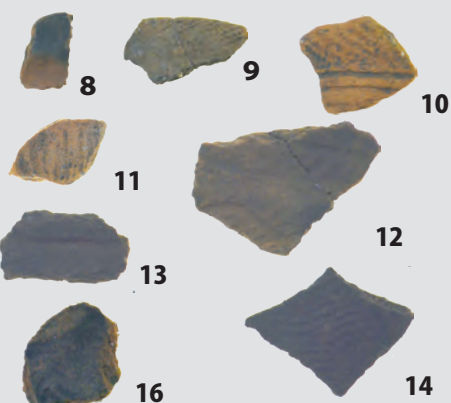
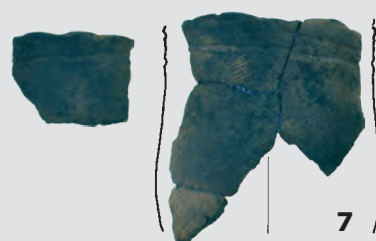
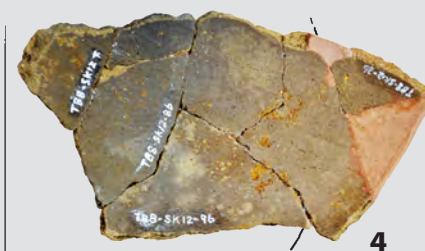
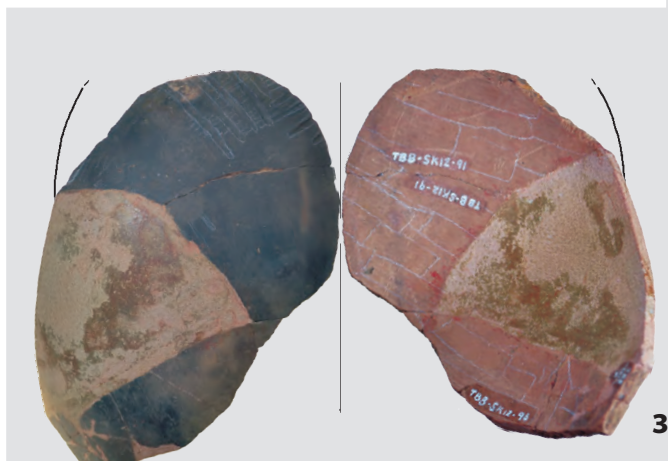
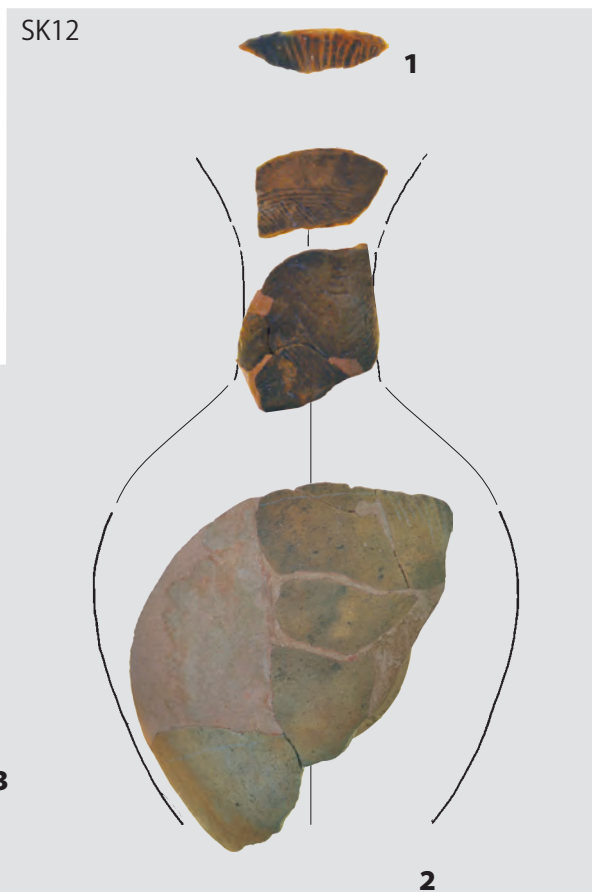
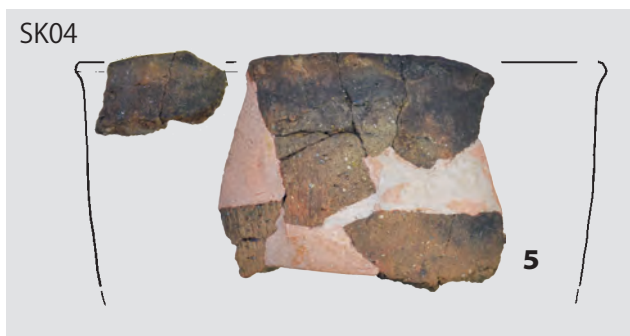
7. 調査風景（東から）

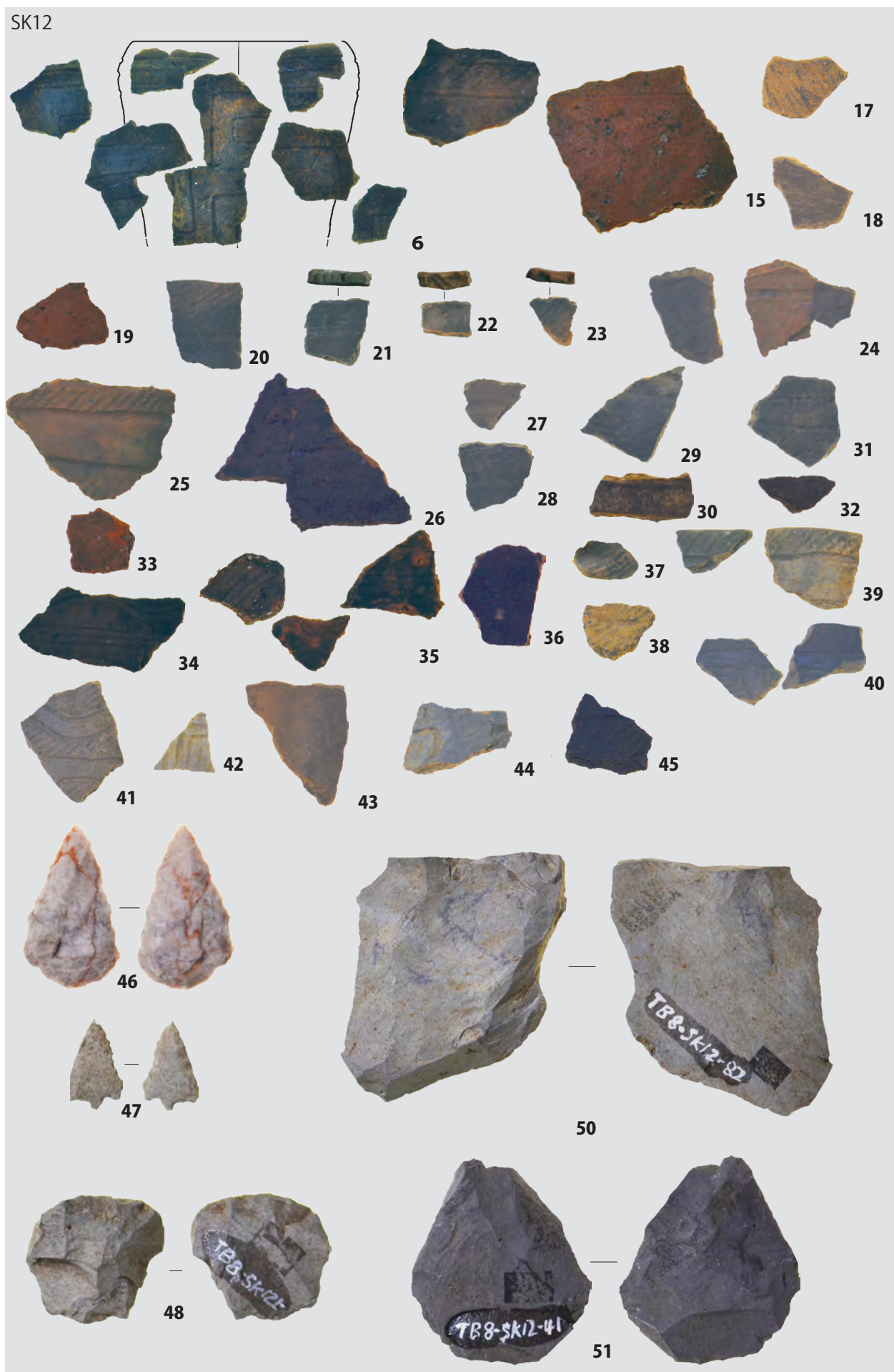


8. 測量風景（南から）

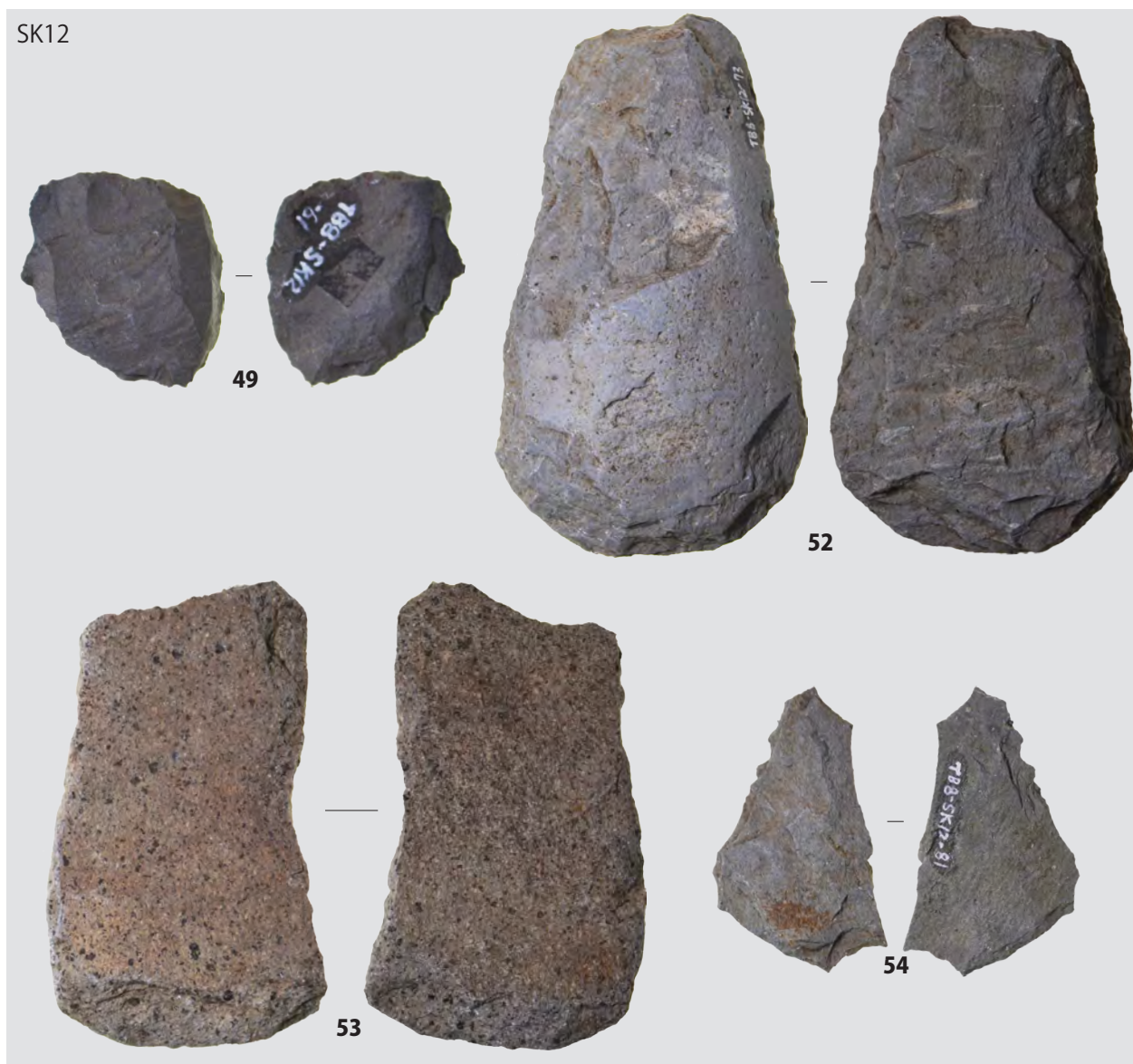








SK12



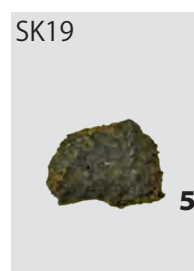
SK17



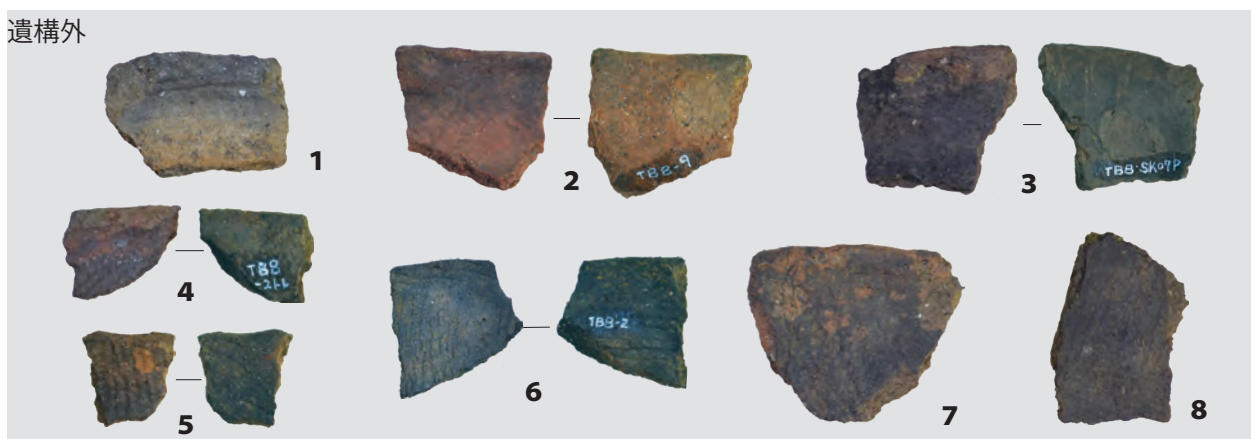
SK18



SK19



遺構外

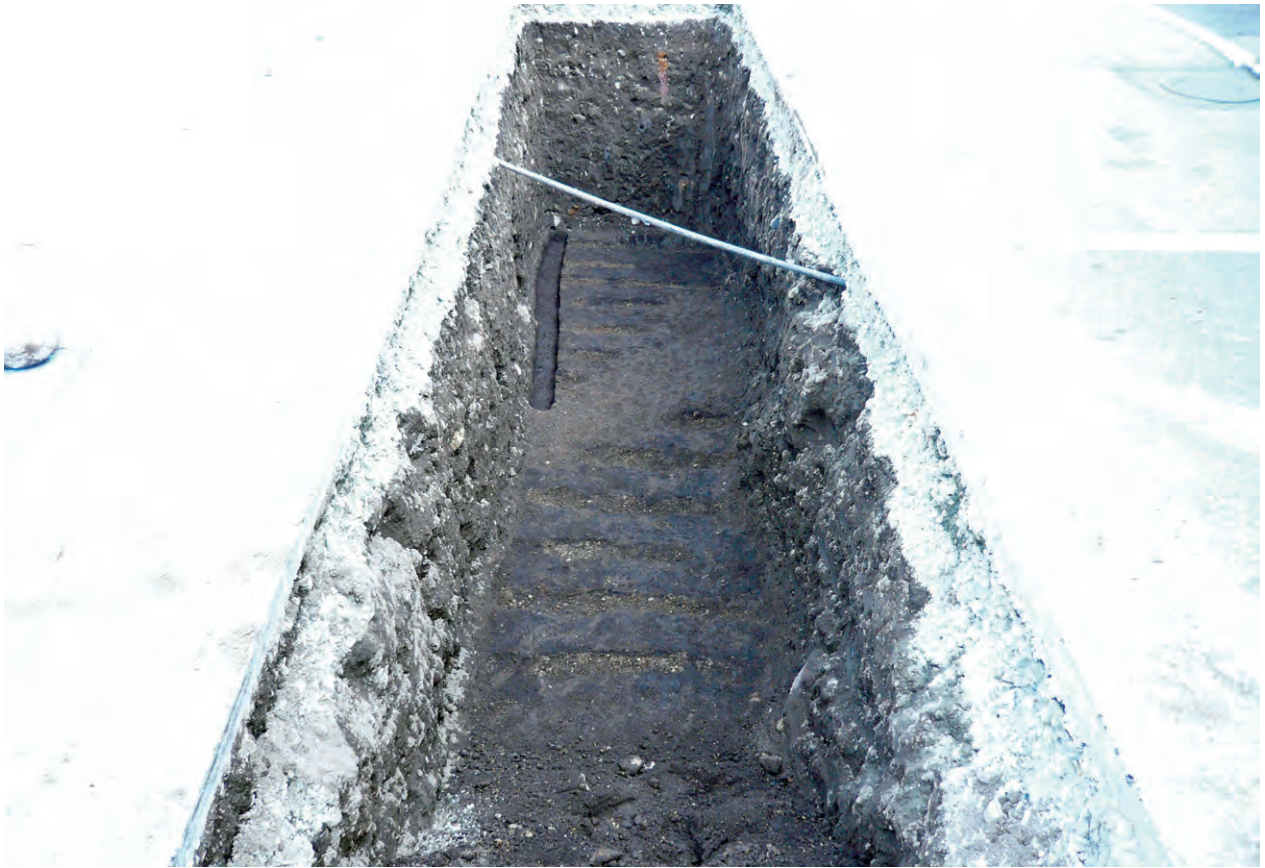


遺構外



遺構外





1. 1 トレンチ全景（北から）



2. 土層堆積状況（西から）



3. 畝サク検出状況（東から）



4. 畝サク断面（西から）



1. 植物遺存体検出状況（北から）



2. 埋戻し状況（南から）



3. 2トレンチ全景（西から）



4. 土層堆積状況（西から）



5. 畝サク断面（西から）



1. 埋戻し状況（西から）



2. 2トレ北東側石造物（南から）



3. 3トレンチ全景（南から）



4. 土層堆積状況（西から）



5. 畝サク断面（西から）



1. 植物遺存体検出状況（南から）



2. 遺物出土状況（東から）



3. 4 トレンチ全景（西から）



4. 土層堆積状況（南から）



5. KT4 号畑出土遺物（肥前碗）



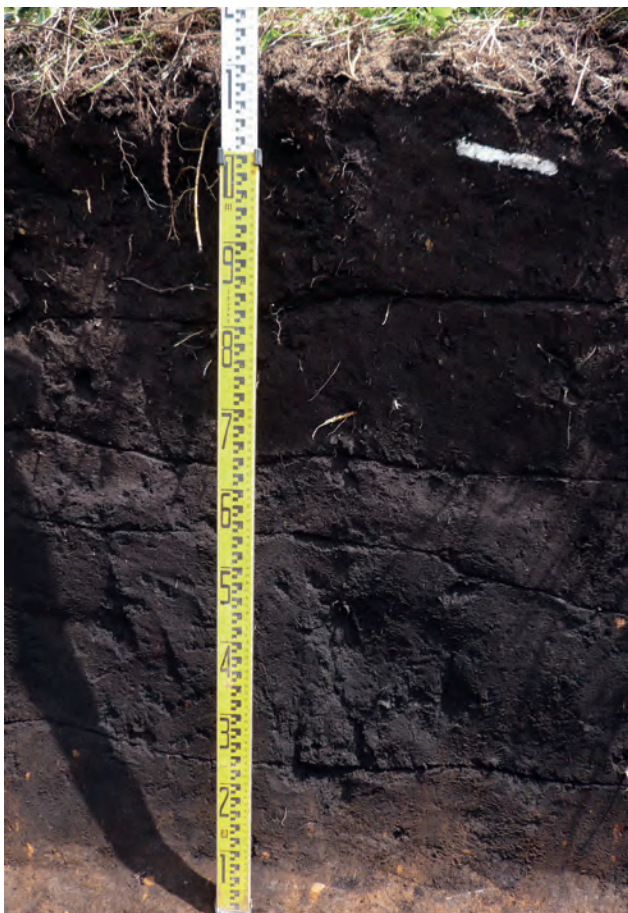
スケール 1, 3b:5mm, 2:10mm, 3a:50mm

図版1 小滝Ⅱ遺跡から出土した植物圧痕

1. クリ葉圧痕 (KT3号畠)、2. クリ葉 (現生)、3. 不明植物圧痕 (KT3号畠)



1. 上原Ⅰ遺跡Ⅲ全景（南東から）



2. 土層堆積状況（南から）



3. ローム面検出状況（南から）



4. 埋戻し状況（南東から）

報 告 書 抄 録

ふりがな	ちょうないいせき　じゅうに							
書　　名	町内遺跡Ⅱ							
副　書　名	平成 23 年度　埋蔵文化財緊急発掘調査報告書							
巻　　次								
シリーズ名	長野原町埋蔵文化財調査報告							
シリーズ番号	第 25 集							
編　著　者　名	富田　孝彦							
編　集　機　関	長野原町教育委員会							
所　在　地	〒 377-1305　群馬県吾妻郡長野原町大字与喜屋 174　TEL0279-82-4517/FAX0279-82-4519							
発行年月日	西暦 2013 年 2 月 15 日							
ふりがな 所収遺跡名	所　在　地	コ　ー　ド		北　　緯 (世界測地系)	東　　経 (世界測地系)	調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因
		市町村	遺跡番号					
つばいいせき 坪井遺跡	群馬県吾妻郡長 野原町大字大津 字馬込 72-3	10424	86	363309	1383712	120729～ 120812/ 121013・14	550	店舗兼用住宅
所収遺跡名	種　　別	主な時代		主な遺構		主な遺物		特記事項
坪井遺跡	集落跡	縄文時代 弥生時代 平安時代		土坑 5 基 竪穴式住居跡 1 軒 土坑 5 基 陥し穴 3 基 掘立柱建物跡 1 棟 時期不明土坑 5 基		縄文土器・石器 弥生土器・石器・炭化 材 須恵器・鉄製品・銅製 品		弥生時代中期 中葉～中期後 葉の再葬墓と 考えられる土 坑を検出
要　　約	本遺跡は吾妻川左岸の上位段丘上の南向き緩斜面に位置する。標高は約 678 m である。調査区は台地の縁 辺に位置し、傾斜変換点付近で遺構が集中して分布している状況が確認された。縄文時代早期前半の土坑 2 基、後期前葉の土坑 3 基、弥生時代中期前半の竪穴式住居跡 1 軒・土坑 5 基、平安時代陥し穴 3 基・掘立柱 建物跡 1 軒が検出された。その中で、SK12 からは 300 点を超える土器片・石器（剥片主体）が出土しており、 土坑内での遺物の分布状況や接合関係が把握され、複数個体を復元することができた。これら土器群は弥生 時代中期中葉（神保富士塚式）と中期後葉（栗林 1 式）との接点に関わる一括資料として注目される。また 1 つの土坑から複数個体の壺形土器や筒形土器が出土していることから再葬墓の可能性が指摘できよう。							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所　在　地	市町村コード	北　　緯	調査期間	調査面積	調査原因	発見遺構	
		遺跡番号	東　　径		開発面積		保護措置	
こたきにいせき 小滝Ⅱ遺跡	長野原町大字羽根尾字小滝 378-7	10424	360000	12006・07/ 120802・03	70㎡	工場建て 替え	天明泥流下畑跡 4	
		220	1395000		1,811㎡		記録保存	
うえはらいちいせき 上原Ⅰ遺跡Ⅲ	"　はやしあざうえはら 林字上原 1036-1	10424	363245	120830	9 ㎡	携帯電話 基地局	遺構なし	
		43	1384045		9 ㎡			